

人生の戦い

——一つの愛の物語——

チャールズ・ディケンズ 作
篠田 昭 夫 訳

目次

第一部

一

第二部

四九

第三部

一一一

解説

一六三

第一部

昔、勇敢なイングランドで、時と場所は問題ではないが、激しい戦いが繰り広げられた。緑したたる夏草が風で波打っていた夏の終日繰り広げられたのである。神の御手で馥郁たる酒杯として造り出された幾多の野の花が、その日おのがつややかな盃が血であふれるのを感じて、萎れ果てたのであった。汚れなき葉と草からあえかな色彩を得ていた無数の昆虫は、その日果てて行く戦士より新たに染められ、怯えて乱れた足跡を残して行った。血染めの蝶が翼に載せて血を空中に運んで行った。せせらぎも真つ赤に染まったのであった。踏み荒らされた地面は沼地となり、足と蹄の跡に流れこんでできた血だまりから、赤一色だけが日光を受けて洗面をつくりかすかに光っていた。

木々によつて端が柔らかくかすんで見える遠い山の黒い影から空高く昇った月が、かつては母親に抱かれてその目を求めたり、安らかにまどろんだりした仰向けの顔で満ち満ちていた戦場を見つめた時に、目に入ってきた光景はどうあつても知りたくないものだ。終日続いた戦いと夜の傷ついた者達の死と苦しみの現場を吹き抜けて、血に染まった風がささやいた秘密も断じて知りたくないものだ！ 戦いの痕跡が消え去って行くまでに、月が幾度となくその孤独な明かりを戦場に投げかけ、幾多の星が戦場を悲しみの目で見続け、この世の全ての所から数知れぬ風が戦場を吹き抜けて行ったのである。

戦いの痕跡は長い間消え去らなかったが、些細な物となつて残つて行くこととなつたのである。

る。というのは、人間の悪しき執念をはるかに凌駕する自然の女神は程なく、静謐せいひつを取り戻して、この罪深き戦場に対し、血で汚されない時のごとく微笑ほほえみかけたからである。雲雀ひばりが高く舞いあがって唄い、燕つばめもかすめて飛んだり降下したり軽快に飛び回ったりするようになった。空を駆けて行く雲の影がお互いにすみやかに追いかっこしながら、草と小麦と燕かばと森の上に、そして樹間に見える町の屋根と教会の尖塔の上に落ち、そして遠く沈んだ夕陽の残光で輝いていた空と地の果てへと消えて行ったのである。作物がまかれ、成長し、収穫されるようになり、血で染まった川に水車が回り始めた。男達が口笛を吹きながら土地をすくようになった。落穂を拾ったり干し草を作る人々が静かに群れて仕事に従事するのも見られ出した。羊と牛が牧草を食べるようになった。子供達が畑で喚声をあげて鳥を追ひ払うようになった。家々の煙突から煙が昇るようになった。夕べの鐘も穏やかに鳴るようになった。老人達が安らかな死を迎えるようになった。野のかよわい生き物と茂みと庭のやさしい花々も、定められた期間生きて果てるようになった。そうして、何千何万という戦士達が激しい戦いで倒れて死んでいき、すさまじく血でまみれた戦場の生きとし生けるもの全てが天寿をまっとうするようになったのである。

しかし、最初のうちは小麦の成長過程において濃緑の斑点が現れ、人々はそれをおそろおそろ見つめたのであった。くる年くる年も斑点は現れ続けた。斑点をもつ小麦を産み出す肥沃な

畑の下に、無数の人間と馬が一緒くたに埋まって、地味を肥やしていることは周知の事実であった。これらの場所を耕やす農夫達は、沢山いる巨大な虫を恐れていた。ここでとれる小麦は、長年に渡って戦争小麦と呼ばれて、別にされたのである。それで、取り入れが終了して最後の束を運びこむ時に、その中に戦争小麦が一束だつて混じっていることは決してなかったのである。長い間、すぎ返された畑の畝うねという畝から戦いの遺物が出土し続けた。戦場には傷ついた木々が、命をかけての戦いが繰り広げられた所からは、割られ折られた柵の破片が、そして葉一枚だつて育たない踏みにじられた場所が、長年に渡って残り存在し続けたのであった。長年に渡って、戦場の最も綺麗な花をもつてしてさえ、それで髪や胸を飾る娘は一人もいなかったのである。幾多の歳月の巡りの後も、戦場の苺は摘みとった手に拭いきれない程濃いしみを付けると、依然として信じられていたのである。

しかしながら、夏雲と同じく軽やかに過ぎ去つて行つたけれども、四季の巡りが何時の間にか昔の戦いのこれらの痕跡さえも消し去ってしまったのである。そして、近在の人々の記憶に残っていた伝説化された痕跡も次第に薄れて行つて、遂には老婆の迷信じみた話と化して、冬の炉端でぼんやりと想い起こされるだけのこととなり、それも年毎に衰退して行つたのであった。野の花と果実が手をつけられないまま茎にずっと残っていた所に、庭が出現し、家が建てられ、そして子供達が芝生の上で戦争ごっこをして遊ぶようになった。戦いで傷ついた木々は



とつくの昔にクリスマス前後に炉でたく大薪まさきとして使われ炎をあげてごうごうと燃え、そして果ててしまった。例の濃緑の斑点も地中で埋もれて土に帰った戦死者同様、今ではもう想い起こされることもなくなっていた。鋤すきの刃が今もなお時たまさびついた金属の破片を掘り起こすこともあったが、それがかつて何に使用されたものかを言い当てることは困難で、発見した人々は首をひねり議論したものであった。古びてへこみのある胴鎧よろいと兜かぶとが実に長い間教会にかかげられていたので、乳児の時それらを見て驚嘆の目を見張った同じ人が、漆喰しつく塗りのアーチ上のそれらを見分けようとしてもできない毫碌もうろくして視力も衰えた老人となっていたのであった。戦場で果てた人々が、各自が早過ぎる死の床となった場所で、息絶えた姿で一瞬でも蘇生できたとすれば、深傷を負い血の気の失せた兵士達が無数に並んで、各家庭の戸と窓から中を凝視したことであろう。そして各家庭の静かな炉辺に姿を現したことであろう。また納屋と倉庫に貯蔵された穀物ともなったことであろう。揺り籠の乳飲み子と乳母の間に突然出現したことであろう。流れに漂って水車と共に旋回し、果樹園に群がり、牧草地を踏みにじり、そして干し草積み場に死人の山が築かれたことであろう。激しい戦いで数知れぬ人達が殺された戦場は、このようにすっかり変わってしまったのである。

およそ百年前、忍冬すいかずらの車寄せを持つとある石造りの古い屋敷に付属した一つの小果樹園以上に変貌した場所は何処にもなかったであらう。そこから、ある晴れた秋の朝、楽の音と笑い声

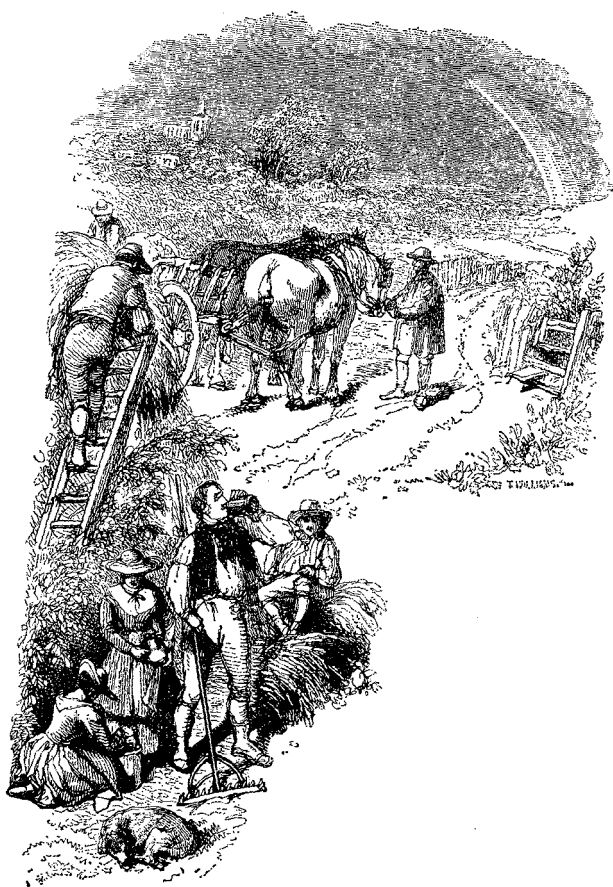
が起こり、二人の娘が楽しげに草の上のダンスを楽しんでいた。梯子に登って林檎を摘んでいた数人の百姓女達がその手を休めて、下方を見て娘達の踊りに乗って弾んだ気分になっていた。それは美しい朝、奥まった所で繰り広げられた楽しく、伸びやかで、生き生きとした場面であった。二人の娘は、潑刺とし闊達さにあふれて、心の底から自由に楽しそうに踊っていたのである。

この世の中に虚飾のようなものがなかったならば、私個人としては、そして皆さんも賛成して下さるものと思っているが、私達は現下の状態よりも格段により良い生活を送り、はるかに打ち解けた仲間になっていただろう、という風に思うのである。二人の娘の踊る様は魅力一杯だった。二人には梯子の林檎摘み以外には観客はいなかった。これら数人の観客が楽しんでいるのもとても嬉しくはあったが、彼女ら自ら喜々として踊っていたのである（少くとも皆さん方ならばそう思ったはずである）。一人が踊り出すことを抑えられなかったように、皆さん方も賞讃の気持を抑えることは不可能だったのである。それ程彼女らの踊りはすばらしかったのである！

オペラの踊り子のごとくかといえば、それとは似ても似つかなかった。何某夫人の洗練された弟子のごとくかという、それとも全く違っていた。カドリールとも、メヌエットとも、カントリーダンスとも違っていた。新旧いずれのスタイルの踊りとも、フランス流とも、イギリ

ス流とも違っていた。陽氣にカタカタと鳴るカスタンネットから即興の弾んだ調子を引き出して、伸びやかで楽しいと聞いているスペイン流の踊りに偶然にも幾分か似ているということはある。たかも知れないが。彼女らが林檎の樹間を踊り抜け、幹の間を下ってまた戻ってきて、軽やかな旋回の輪を描くにつれて、二人の軽快な動きの感化力が、ふり注ぐ秋の陽の下、水面の波紋のごとく、どんどんと拡がって行くように見えたのであった。彼女らのひるがえりはためく髪と服の裾、二人の足が踏むしなやかな草、朝の風を受けてさらさらと鳴る木々の枝——きらめく葉、柔らかな緑の地面に落ちてゐる斑模様まだらの影——風景の中を吹き抜けて、遠くの風車を回転させて喜び弾んでいるさわやかな風——二人の娘と、大空を背景にして現世における最終物かと思わせる外観を呈して、畝を耕やしている人馬との間に存在する全ての物——もまた踊っているように見受けられたのである。

ついに、踊っている姉妹の妹の方が、息を切らし、明るく笑いながら、一息入れるためにベンチにどつと腰をおろした。姉の方も傍の木に寄りかかったのであった。旅回りのハープとパイオリンの奏者よりなる楽団が、生きのよさを誇るかのごとく、大袈裟な響きでもって演奏を終了した。もともと本当のところは、猛烈なペースで演奏したし、娘達の踊りと激しく競い合ってきたので、楽団は後三十秒と演奏を続けられるはずもなかったのではあるが。自ずと湧き起こった賞讃の呟きをハミングしていた梯子の林檎摘み達も、演奏の終了と共に、蜜蜂のよう



に仕事を再開したのであった。

より一層活発に再開したといってよかっただろう、というのも、——ここはジエドラー博士の屋敷と果樹園であり、踊っていた乙女達は彼の二人の娘であつたので——その当のジエドラー博士自身が、何事が起こつたのかと思ひ、朝食前に一体誰が彼の地所で楽の音を奏でているのかと、せわしく飛び出してきたからである。何故なら、彼、ジエドラー博士は偉大なる哲学者であつて、音楽的な人間とはいひかねる人物であつたからである。

「よりによつて今日、楽を奏で踊りをするとは！」と、博士は突然立ち止まつて、独り言を呟いた。「娘達はこの日を恐れているとばかり思つていたのに。だが、この世は矛盾だらけだから」ここで声を大きくして、「やあ、グレイス、やあ、メアリアン！ 今朝は世界の調子がいつになく狂つたのかな？」と呼びかけた。

「お父さま、そのことは大目に見て頂きたくてよ」と、妹のメアリアンが、父のそばに寄り、その顔をのぞきながら、言つた。「今日は誰かさんの誕生日ですもの」

「誰かさんの誕生日だつて、おねちゃん！」と博士が答えた。「誰かさんの誕生日なんて切れ目なしに続いているのじゃないか？ おびたらしい新参の演技者がこの——はっ！ はっ！ はっ！——真面目に話すなんてできっこないが——この人生と呼ばれている馬鹿馬鹿しくて滑稽な舞台に、毎分登場しているのを知らない訳じゃないだろう？」

「知らないわ、お父さま！」

「おまえはもちろんそうだろうよ。おまえも一人前になったなあ——ほとんどな」と博士。眼前の娘の美しい顔をのぞきこみながら、「ところで、おまえの誕生日は今日じゃなかったかな」と続けて言った。

「いいえ！ 本当にそうだと思つてらっしゃるの？」と彼のお氣に入りの娘が、唇をすぼめて父親の接吻を受けながら、叫んだ。

「さあ！ 私の愛を受け取つておくれ」と唇を娘のそれに付けながら、博士が言った。「そしてこの——なんてこつた！——この良き日が何度でも繰り返されますようにと。こんな茶番劇の幾久しい反復を願うという考えは」とここまで独り言を呟き、「実にすばらしい！ はっ！ はっ！ は！」と。

ジエドラー博士は、既述したように、偉大な哲学者であつた、そして彼の哲学の根本と興義は、この世界を巨大な悪ふざけと見なしているところにあつた。理論家が真剣に考慮するには余りにも馬鹿げたものと見なしているところにあつた。彼の信念の体系は、最初から、皆さんもすぐに理解されるごとく、住みついている古戦場と不可分の關係にあつたのである。

「よしと！ ところで、この楽団をどうやって雇つたのかね？」と博士が尋ねた。「どう見ても鶏泥棒といったところだな！ この連中はどこから来たのかね？」

「アルフレッドが寄りましたの」と、妹のういういしい美しさを讃えて、三十分前にその髪に飾りつけ、踊っている間に乱れた幾つかの清楚な花を直してやりながら、姉のグレイスが言った。

「おお！ アルフレッドが寄こしたのか？」と博士が答えた。

「ええ。今朝早く町へ到着した時丁度出ようとしていたこの人達に会ったということです。彼等は歩いて回っていて、昨夜は町に泊ったのだそうです。本日はメアリアンの誕生日であり、彼女が喜んでくれるだろうと考えて、彼はわたしも同じ想いだろうと思って、妹を讃える演奏を贈るために寄こしたというわたしあての鉛筆書きのメモを添えて、彼等を前もって寄こしたのです」

「そうか、そうか、彼はいつもおまえの意見を尊重しているからな」と博士が、何気なく言った。

「そしてわたしも賛成だったし」とグレイスが、上機嫌に言い、彼女が飾りの花を直してやった妹の美しい髪を反り身になって見とれて、一瞬話すのをやめた。「その上メアリアンが元氣よく踊り出したので、わたしも一緒になって踊ったという訳です。それで二人で息が切れるまでずっとアルフレッドの楽団に合わせて踊り続けたのです。アルフレッドが寄こしただけに楽士さん達もいやが上にも弾んだ演奏をしてくれたと思いますわ。そうでしょう、メアリア

ン?」

「わたしには分からないわ、グレイス。アルフレッドのことでわたしを虐めないでよ」

「愛しい人を持ち出すことがどうして虐めることになるの?」と姉が言った。

「あの人のことを持ち出されるのはいやなの」と、手中の花から花弁をむしって、地面にまき散らしながら、わがままな妹が言った。「あの人のことを聞くのはもううんざりなの。その上彼がわたしの愛しい人ということも——」

「やめなさい! あなたを心の底から愛している誠実な心を冗談にせよけなすのはよくないわ。アルフレッド以上に誠実な心はありえないのだから!」

「そう——そうね」とメアリアンが、軽いことを考えているという明るい態度をとって眉を開きながら、言った。「多分ね。しかしそうだからといってそれ程賞讃に価するとは思えないわ。わたし——わたしは彼にそんなに誠実であってほしくないの。一度も頼んだこともなくてよ。もしも彼がわたしのことも期待するなら——だけど、グレイス、どうしていまあの人のことを話し合わなければいけないの?」

花のような姉妹がびったりと寄り添って樹間を歩きながら、真面目さと軽やかさという対照をえがいてはいるものの、お互いに心の底から愛し合っている態度で、会話を交わしている美しい姿を見るのは氣持が良かった。そして妹の両眼に涙があふれ、わがままなことを言ってい

るにもかかわらず、激しく深く感受された想念が表面に出てきて、口先の言葉と争って苦しんでいる様を見るのは、本当に何とも奇妙なことであった。

年齢の点においては、二人は精々四歳程度しか離れていなかったが、(博士の妻は亡くなっていたので)見守ってくれる母親という存在がない場合によくあるように、妹にやさしく気配りし絶えず心に掛けているためにグレイスは老成して見えた。そして自然の成り行きとして、年齢の差がなるほどと納得させる以上に、妹との競争からもすっかり身を引いていたし、思いやりと愛情によるもの以外には、妹の気紛れな想いにあずかるうとはしないように見えた。かくのごとき影でありほのかな反映の中においてさえ、母という偉大な性格は心を清め、気高い人格を高めてますます天使へ近付けて行くものなのだ！

二人の姿を見ながら、会話の内容を聞くともしに聞いていた博士の想いは、最初のうちは、愛というものの愚かさ、こうした他愛もないものにも重大なものがあり得ると一瞬信じこんで常に迷夢をさまさせられることになる若者達が自らに及ぼす無益な思いちがいについての楽しい想いに限定されていた。

しかしグレイスの家庭の美を引き立てる献身的な性格と、極めて物静かで控え目ではあるが、大変な意志の強さと勇気を含んでいる優美な氣質が、彼女の穏やかで家庭的な姿と妹の美しさではまさる姿との対比に接している間に、彼に対して全てを物語っているように思われた。そ

れで彼は彼女のために——二人のために——人生がこの上なく滑稽なものであることを残念に思ったのである。

博士は二人とも、或いはどちらかが、社会の仕組みを真面目なものにすることに少しでも手を貸しているかどうか尋ねてみようとは夢にも思わなかった。それもそのはず彼は哲学者であったのだから。

生来親切で寛大な男であった彼は、あのよく見受けられる化金石ならぬ夢想解決法に偶然行き当たったのである（錬金術師達が探し求めた化金石よりもずっと容易に発見されるのであるが）、そしてこれは時々親切で寛大な男達をつまずかせ、金を屑に、あらゆる貴重なもの価値なきものに変えてしまふ致命的な特性を持っているのである。

「ブリテン！」と博士が叫んだ。「ブリテン！ おい！」

並外れてむっつりして不機嫌な顔つきをした小柄な男が、邸内から姿を現して、この叫び声に「何事ですか！」とぶっきらぼうな答えを返した。

「朝食のテーブルは一体どうしたんだ？」と博士が言った。

「邸内にあります」とブリテンが答えた。

「昨夜言っておいた通りに、今すぐ庭に持ち出して置いてくれ」と博士が言った。「お客様が来られて、馬車の到着までに済まさねばいけない用があることを知らない訳ではないだろう？

今朝が極めて特別な時であることも？」

「ジェドラー博士、女達の林檎摘みが終了するまでは、何もできるはずはありませんよ、そうでしょうが」とブリテンが言い、彼の声は言葉と共に大きくなり、最後はとてつもない大声となったのであった。

「ところで、その林檎摘みは終わったんだろう？」と博士は答え、時計を見て、両手を打ち合わせて言った。「さあ、急いで！ クレメンシはどこにいる？」

「ここです、旦那さま」と梯子の一つから声がして、不格好な足が勢いよく梯子を降りてきた。「すっかり終わりました。みんな、さっさと片付けて。三十秒で全て用意してごらんに入れます、旦那さま」

そう言うとき彼女は極めて活発に飛び回り始めた。動くにつれて、言葉の正しさを十分に証明するに足る独特の態度を示しながら。

彼女は三十歳前後の年輩で、非常に丸々として陽気な顔つきをしていた、もっともそれをゆがんでおどけた感じに見せるこわばった妙な表情を呈することもあったが、だが彼女の度外れて醜い歩き振りと態度は世の中のどんな顔をも圧倒して寄せつけはしなかったことであろう。彼女が左足を二本持ち、他人の両腕を持っていると言うこと、手足が全て関節が外れていて、それらが動く時は全く意外な場所から始動するように見えると言ったことなどは、真の姿の最

も軽い輪郭を描いてみせたに過ぎないのである。彼女がこういった取り決めにすっかり満足して、みだりに干渉すべきではないと見なしていたこと、出現した通りに手足を受け入れて、気の向くまま自由に身の振り方を決めさせていたことなどは、彼女の泰然自若のわずかな正当化といってよい。彼女の足が進む方向には絶対行こうとしない途方もなく頑固な靴、青い靴下、金銭で入手できる限りではこの上なくものすごい柄の多様な色のサラサの服、そして白いエプロンなどを、彼女は身につけ、まもっていた。彼女は短袖を常に着こみ、偶然の成行きでいつも肘をすりむいていた、そしてそのことに非常に生き生きとした興味を持っていた彼女は、絶えず肘をくるりと回転させて、不可能なはずの視界に入れることを試みていたのである。小さな帽子が彼女の頭のどこかに乗っかっているのが普通であったが、他の人々の頭に通常乗っている位置で彼女の帽子と出会えることは滅多になかった。だが頭の中から爪の先まで彼女は清潔であることに心を砕いており、いわば脱臼した小ぎれいさといったものを持続させていたのである。実際人前のみならず自己の意識においても小ぎれいにしきちんすることに感心する程熱心であったので、極めて驚くべき身体の旋回運動が引き起こされることがあった。つまり時々（彼女の衣服の一部であり、一般にはコルセットの胸部の張り骨と呼ばれているところの）木製の柄のようなもので自分の身体をつかんで左右の釣り合いがとれて落ち着くまで、いふなれば服と格闘をすることがあったのである。

外面の姿と衣服から見たクレメンシ・ニューカムとはかくのごときものであった。彼女は洗礼名クレメンティーナを変形してクレメンシを何時の間にか造り出したと思われていた（だが真偽の程は不明だった、何故ならほとんど子供の頃から扶養してきた老衰の典型といつてよい耳の遠い母親が他界して、彼女の身寄りには皆無になってしまったからである）。今彼女は朝食の準備に追われながら、時折、むき出しの血色の良い両腕を組み、反対側の手ですりむいた肘をさすり、落ち着き払って食卓を見つめながら立っていた、と突然必要とする何かを思い出して、それを取りにゆつくりと歩いて行った。

「あの二人の弁護士さんがお見えです！」とクレメンシが、大して嬉しそうなでもない調子で言った。

「あー、わかった！」と博士が叫んで、二人を迎えに門の方へ進んだ。「やあ、おはよう！ グレイス！ メアリアン！ スニチとクラッグズの両氏がお見えだぞ。アルフレッドは？」
「彼はすぐに戻りますわ、お父さま」とグレイスが言った。「出発の準備で今朝は色々と用を足さなければいけないことがあるので、あの人は夜明け前に起きて外出したんですよ。お二人ともおはようございます」

「お嬢様方！」とスニチ氏が言った。「スニチ・クラッグズ事務所を代表して」ここでお辞儀をして、「おはようございます！」とメアリアンに向かって「貴女の手に接吻ができます

れば」と言いながら、それを実行に移したのであった。「そしてこのめでたい日が幾久しく繰り返されますように」——こんなことは彼にとつてどうでもよいことであつた、というのも、一見したところ、他人のために、暖かい心遣いがほとばしり出るのをどうにも抑えきれない人物には見えなかつたからである。

「はっ、はっ、はー！」と博士が両手をポケットに突つこんで思ひを致しつつ笑つた。「これは最高の茶番劇だな！」

「貴方はきつとなさらないと思います」と、食卓の足に小型の青い書類袋をもたせかけながら、スニチ氏が言つた、「いずれにせよ、出演女優であるお嬢さんのためこの茶番劇を途中で打ち切ることは、ジエドラー博士」

「その通り」と博士が答えた。「間違つてもしないぞ！　娘が生きるだけは生きてこの茶番劇を笑えるだけ笑ひ、そしてフランスの才人(フランク・ラブレール「四」)のごとく、『茶番劇は終わった。幕を下ろしてくれ』と臨終の際に言いますように」

「そのフランスの才人は」とスニチ氏が、青い袋の中を鋭い目でのぞきながら、言つた、「間違っています、ジエドラー博士、そして貴方の哲学も、これまで度々申し上げてきたように、完全に間違っています、人生において真剣なものは皆無ですと！　それでは法律はどういうことになりますか？」

「戯^{たわ}れだよ」と博士が答えた。

「これまで法に訴えられたことはおありですか？」とスニチ氏が、袋から目をはなして、言った。

「二度もないな」と博士が答えた。

「二度でもおありでしたら」とスニチ氏が言った、「恐らく違つた意見をお持ちだと思ひます」

スニチ一人が代表して、別々の存在とか独立した個性ということとはほとんどかまるで意識していないように見えるクラッグズが、この時彼自身の意見を表明した。それは彼がスニチと対等に半分ずつ所有していない唯一一つの考えを意味したが、こうしたことは世の賢人達においても時折見られることである。

「余りにも手輕に扱われています」とクラッグズ氏が言った。

「法律が？」と博士が尋ねた。

「そうです」とクラッグズ氏が言った。「何もかもです。近頃は何もかも手輕に扱われているように思います。これは現代の悪癖です。（そうでないと言いきれる自信はありませんが）この世界が一つの冗談であるとしても、口に出して言うのが困難を極める冗談とされるべきです。可能な限りつらい苦しみとなるべきです。それがこの世界の主旨というものです。だが手輕に

扱われる一方です。私達はこの世の門に油をさしています。錆びついたままにしておくべきです。蝶番^{ちょうがい}がきしんで当然であるはずなのに、すぐに滑らかな音とともに門が開閉を始めることになってしまいます」

クラッグズ氏は、このような意見を述べながら、明らかに蝶番をきまさせているように見えた。灰色と白色の服を着こんだ火打ち石のごとく冷たくて固く、そして乾いた男であり、火花が飛び出てくるのではないかと思われる程、両眼を小刻みにきらめかせていたので、彼の蝶番は絶大の効果を収めてきしんでいたのである。動物、植物、鉱物の三界は、實際この三人のなごやかな論争者の中に、各々風変わりな代表者を持っていた。というのもスニチ^{かきさぎ}は鵲^{かきさぎ}か渡り鳥そっくりだったし(ただしそれ程つややかではなかった)、そして博士は冬季貯蔵のできる林檎のごとき縞^{しま}のある顔をして、顔のそこに小鳥がついばんだことを物語るへこみがあり、背後には柄となるとても短い弁髪を持っていたからである。

旅装をして、数個の包みと籠を持った男を従えた顔立ちの良い青年が元氣よく、さっそうとした足取りで、その朝とよく調和した明るく希望にあふれた態度で果樹園に入ってきた時、運命の三女神^(ギリシャ神話に現れる、クロト、ラケシス、アトロポスの三女神のこと)の兄弟のごとく、最も効果的な変装をしている美の三女神^(ギリシャ神話に現れる、エウプロシネ、タリアーの三女神のこと)のごとく、或いは『マクベス』の三人の魔女のごとく、

三人はびつたりと寄り添って彼を迎えた。

「誕生日おめでとう、アルフ！」と博士が、軽やかに言った。

「この良き日が幾久しく繰り返されるように、ヒースフィールドさん！」とスニチイが、低くお辞儀をしながら、言った。

「繰り返されますように！」とクラッグズが深い声で、ぼつんと言った。

「これはすごい集中砲火だな！」とアルフレッドが、突然足を止めて、叫んだ。「そして一人——二人——三人——みんな僕の旅路の前途の暗雲を予言しているみたいだ。あなたがたが今朝最初に出会った人でないのが嬉しい。もしそうだったら、縁起が悪いと思ったことでしょう。だがグレイスが最初に出会った人だったから——やさしく、感じのよいグレイスが——僕にとって三人とも恐くも何ともないんだ！」

「いえいえ、このわたくしが最初だったんですよ」とクレメンシイ・ニューカムが言った。「グレイスさまは日の出前に果樹園の方へ出られて、家の中で起きていたのはわたしだったんですよ」

「そうだ！ クレメンシイが最初だった」とアルフレッドが言った。「それなら僕はクレメンシイによってあなたがたが恐くも何ともない」

「はっ、はっ、は、——私とクラッグズに対する」とスニチイが言った。「何ともすごい挑戦ですなあ！」



「見た目程すぐくはありませんよ」とアルフレッドは言つて、心の底から博士と、次にスニチイとクラッグズとも握手を交わして、あたりを見回した。「ところで二人は——おお！」

ジョナサン・スニチイとトマス・クラッグズの間で交わされて存在している協定の条項より、もっとびたりと寄り添う相棒關係を一瞬生み出した驚きの言葉を發して、彼は姉妹が並んで立っている所へ駆け寄り、そして——しかしながら、私としては最初にメアリアンと、次にグレイスと挨拶を交わした時の彼の態度をことさらあげつらうつもりはない、クラッグズ氏が多分「余りに手輕に過ぎる」と思ったかも知れないと示唆する以上には。

多分話題を変えようとしてか、ジェドラー博士が食卓の方へ急いで動いたので、全員が着席したのであつた。グレイスがとり仕切つて、うまく着席して妹とアルフレッドと他の三人を切り離したのである。スニチイとクラッグズは青い袋を万が一のために二人の足元に置いて、向き合つて座り博士はグレイスと向き合ういつもの場所に座つた。クレメンシイが給仕をしながら、食卓をめぐるてけいれんでも起こしたように動いた。一方陰氣なブリテンは、もう一方の小テーブルで、牛のもも肉とハムの最高の肉切り分け人として振る舞つていた。

「肉は？」とブリテンが手に肉切り用のナイフとフォークを持って、スニチイ氏のそばに来て、彈丸のように質問を浴びせかけながら、言つた。

「もちろん」と弁護士が答えた。

「あなたも？」とクラッグズに。

「脂肪のないよく焼けたのを」とその紳士が答えた。

これらの注文をこなして、博士にも適度の量をあてがうと（他の者は食事をすることを欲していないと彼は見抜いている風であった）、彼は適度な間隔でできるだけ二人の弁護士に近くについて、厳しい目で彼等の肉を平らげる姿を観察し、ほんの一瞬厳しい表情を崩した。それは、齒がそんなに丈夫ではないクラッグズ氏が幾分喉を詰まらせた時で、彼は大いに元気づいて、「死んだと思ったのに！」と叫んだのだった。

「さて、アルフレッド」と博士が言った、「食卓についている間に、片付けておきたい用向きが少々あるんだがな」

「こうして私どもが食卓についている間にです」とスニチィとクラッグズが口を揃えて言ったが、二人は現在のところは辞去しようという気持は全く念頭にないように見えた。

アルフレッドは朝食をとっていない上に、多すぎる程の用事を抱えこんでいるように見えたが、丁寧に「分かりました」と答えた。

「真剣になり得ることがあるなら」博士が言い出した、「こんな——で」

「こんな茶番劇で、でしょう」とアルフレッドがそれとなく言った。

「こんな茶番劇だからこそ」と博士が言った、「アルフレッドとメアリアンの全く重なった誕

生日の反復が、別離の間際に出来してくるし、そしてそれに我々四人にとって心なごむくさぐさの連想と長くて楽しい関係の想い出が、連なり続いているということになるのだ。これは何の意義もないことだ」

「いいえ、いいえ、ジエドラー博士」と若者が言った。「意義のあることですよ。今朝の偽わらざる真情を申し上げますと、大いに意義のあることですよ、そしてあなたも本音をお話し下されば、きっと同様のことを申されるはずです。僕は本日出立致します。本日をもってあなたの被後見人であることも終了する訳です。僕達の背後に長く伸びていて、そのまま再現することとは到底不可能である心暖まる関係のまでにお別れ致します、そして将来の関係は未分明のまま」彼は傍のメアリアンに目をやった、「今話し出すと、自分でもどういうことになるか見当もつかない様々の思いをこめて、お別れ致します。さあ、さあ！」彼は続けて、自身と博士の氣持を同時に奮い立たせようとした、「この巨大で馬鹿げた塵芥の山の中にも真剣なものが存在しているということですよ、博士。一つはあるということを、本日ここで認めて下さるでしょう」

「本日ここで！」と博士が叫んだ。「よくぞ言ってくれた！ はっ、はっ、は！ 愚かな一年の巡りの中でもよりよってこの日に。本日は、あの激しい戦いがこの地で繰り広げられた日なのに。私達が今こうして座っているこの地面で、先程娘達が踊っているのを見かけた、そし

て土ではなく人間から芽生えてきたこれらの木々から、食するため林檎が集められたこの地面で、——おびたらしい生命が果てたので、私が憶えている限りにおいても、幾世代にも渡って、教会の中庭が一杯になる程の骨、骨の粉、割れた頭蓋骨の破片などが、我々の足元の地面から掘り出されたものだ。しかし何のために、何故戦っているのか分かつている者は百人といなかったのだ。何も考えないまま勝利を喜んだ連中の中で、何故喜んでいいのかその理由が分かっている者もしかりだ。戦いの勝ち負けで向上した者は五十人といなかったのだ。その大義名分や価値を認めている者も、現在に至るまで六人といないのだ。要するに、果てて行った者の死を悲しんだ人達を除けば、この戦いのことを明確に認識した者も一人としていないのだ。これでも真剣なものといえるのかね！」と博士が笑いながら言った。「こんな仕組みが！」

「だけどころしたこと全ては僕には」とアルフレッドが言った、「極めて真剣なことのようには思えますが」

「真剣なものだと！」と博士が叫んだ。「君はこんなものが真剣なものだと思っているなら、間違ひなく発狂するかさもなくば命を落としてしまうぞ、或いはどうしようもなく山の頂上へ登って、隠者になってしまふぞ」

「それに——遠い昔のことですし」

「遠い昔のことだと！」と博士が答えた。「それ以後、この世の中が一体何をやってきたと思

っているんだ？ 茶番劇以外の何か他のことをやってきたとも思っているのか？ そんなことは断じてない！」

「少しは法に訴えてきました」とスニチィ氏が、紅茶をかきまぜながら、言った。

「もっともその解決法は常に手輕に過ぎたが」と相棒が言った。

「以下のように述べることをお許し頂きたいのですが、博士」とスニチィ氏が話を続けた、「私達の議論において、これまで私見として散々お聞かせしてきたことですが、法に訴えてきたことにおいても、法の体系そのものにおいても、私はこの世の真剣な側面を目撃しております——本當に、明確な形をとりはつきりした目的と意図をもつ何かを——」

クレメンシィ・ニューカムが食卓に不格好に衝突してよろめいて、カップと受け皿が大きな音を立ててぶつかる様を引き起こした。

「おい！ 一体どうしたんだ？」と博士が叫んだ。

「このいまましい青い袋のせいなんですよ」とクレメンシィが言った、「足を引っ掛けてつまずかせてやまない！」

「この世には目的と意図があるんですよ、私が言った通りに」とスニチィが再び言葉を続けた、「これは尊重すべきことですよ。この世が茶番劇ですって、ジェドラー博士？ 法を備えていて？」博士は笑って、アルフレッドを見た。

「戦いというものは馬鹿げたものだとしておきましょう」とスニチイが言った。「その点では私達の意見は一致します。例えばですね。ここに晴れやかな風景が広がっています」とフォークで指し示しながら、「かつて兵士達が踏み荒した——彼等全員が侵略者であつた訳で——そして火と刀で荒廃させられたところの。ひっ、ひっ、ひ！ 誰もが望まぬことながら火と刀を浴びている場面なんですよ！ 愚かで、不毛で、極めて滑稽です。貴方はそれを想って、愚か者達よとお笑いになる！ ですがこの晴れやかな風景をあるがままに受け入れて下さい。不動産に關係する法律のことを思い浮かべて下さい。不動産の遺贈、抵当と受け戻しに關係ある法律のこと、賃借、自由保有、謄本保有権などによる土地に關係する法律のこと」とスニチイが、實際に舌鼓を打って賞味していると思われる程の熱をこめて言った、「財産の権原けんげんとその証拠書類と關係のある複雑な法律と、全てのあい矛盾する判決例とそれと関連をもつおびただしい法令のことも思い浮かべて下さい。この心地よい風景が引き起こす無限の数を誇る巧妙で果てしなく続く大法院訴訟のことを思い浮かべて下さい。そしてジエドラー博士、私達を囲む仕組みにも緑の場所があることも認めて頂きたく存じます」とスニチイ氏が、相棒を見ながら言った、「わが事務所の意見として申し上げている訳ですが？」

クラッグズ氏が賛意を表明した時、それまでの雄弁で多少なりとも意気が上がっていたスニチイ氏は、肉をもう少しと紅茶をもう一杯頂きたいと言明した。

「私は概してこの世の中を擁護するつもりはありません」と彼は、両手をこすり合わせくすくす笑いをしながら、つけ加えた、「愚かさで一杯ですし、もっと下劣なもので充満しています。信頼、信任、無私といった類の公言も満ち満ちています。ばあ、ばあ、ばあ！ これらが無価値であることは分かっています。しかし貴方はこの世を嘲笑してはいけません。この世というのは一つのゲームなんです。しかもものすごく真剣なね！ 誰もが貴方にゲームを仕掛けてくるし、貴方の方からも仕掛けるといふ訳ですよ。おお！ そこがとても面白いところですよ。お互いの手を読みながら盤上の駒を動かす訳です。ジェドラー博士、勝利を収めた時に笑いを浴びせるべきであつて——その時でも高笑いはいけません。ひっ、ひっ、ひ！ 高笑いはいけませんよ」とスニチは繰り返して、「その代わりにこれをしなさい」と言わんばかりに、頭をぐるぐると回しウィンクしたのであつた。

「アルフレッド！」と博士が叫んだ、「君の意見はどうかね？」

「僕としては」とアルフレッドが答えた、「あなたが僕と御自身に与え得る最大の恩恵は、僕が思うに、太陽が日々照らしているこの戦場を人生というあのより広大な戦場におけるこれと同様の戦場を、時には忘れるようにすることだ、ということをお願いしたいのです」

「実のところ、それでは博士の持論を柔らげることはできないと思いますよ、アルフレッドさん」とスニチが言った。「人生の戦いにおいても戦士達は非常に真剣に激しく戦つていま

す。おびただしい切り合いと、背後から頭へ弾を撃ちこむことが行われています。ぞっとするような踏みにじりも。これは相当にひどい戦いなんです」

「スニチィさん」とアルフレッドが言った、「人生の戦いには——見かけは軽率で矛盾だらけに見える沢山のものの中にさえ——年代記や観客を伴わないからと言って、達成するのが決して容易ではない——日々片隅と人目につかない所で、ささやかな家庭で、そして人々の心の中で、なされている静かな勝利と苦闘、大いなる自己犠牲、崇高で勇敢な振る舞いが存在しています——四分の二の人々は戦っており、四分の一の人々は法で争っているけれども、これらのどれにも最も厳格な人でさえかくのごとき世の中と折り合いをつけさせ、そして信念と希望で満たすものがあるのです。法律用語を使ったりして僭越とは思いますが」

二人の姉妹は熱心に聞き入っていた。

「はて、さて！」と博士が言った、「ここにいる友人のスニチィ君や、或いはわが独身の妹マールサ・ジェドラーなどにより、転向するには私は年をとり過ぎています。妹はいうところの家庭の苦勞というやつを大昔に体験して、それ以来ずっとあらゆる類の連中と協調した生活を送っている。そして君と全く同じ信念を持っているので（ただ女であるので、彼女の方が独断的で頑固ではあるが）、私とは意見が合わず、あれと会うことは滅多にないのだ。私はこの戦場で生まれ、一人の少年として、戦場の真の歴史に想いを向け始めたものだ。年齢六十を数えるに至

ったが、この世で数知れぬ愛情に満ちあふれた母親達と私の娘と同じく思いやり一杯の娘達が、戦場のために発狂する以外の何かになったためしを私は知らない。同様の矛盾は全ての物事の中に浸透している。このような途方もない矛盾に対しては笑うか泣き叫ぶかのいずれかしかりようはない訳で、私は笑う方が性に合うということなのだ」

彼の方でもまたそれぞれの話し手に極めて深く憂いに沈んだ注意を向けていたブリテンが、彼から漏れ出る深く陰気な音が笑いの表明と解釈できるとすればの話であるが、突然主人と同じ好みを選択する決心をしたように見えた。しかしながら、その前後を問わず、彼の顔は笑いの影響を全く受けなかったので、妙な音に驚いて、テーブルについている者の中で周りを見回す者も一、二あったけれども、その音とブリテンを結びつける人は皆無であつたのである。

但し朝食の給仕と一緒にしているクレメンシ・ニューカムは別だった。両肘というお気に入りの関節の一方を使って彼の目を覚ましてから、叱責調の小声で、何を笑っているのかと尋ねた。

「君じゃあない！」とブリテンが言った。

「じゃあ誰よ？」

「人類全体だ」とブリテンが言った。「これこそ物笑いの種だ」

「旦那さまや弁護士さんの相手をしているうちに、あんたは毎日どんどんとおかしくなる一

方よ！」とクレメンシイは叫んで、精神面に活を入れるために、もう一方の肘を使って彼を一突きした。「あんた自分を何様だと思ってるの？解雇通告でも欲しいってわけ？」

「よく分からない」とブリテンが、鈍い目と無表情の顔付きを言った。「何も氣にならないし、認めるものも、信じるものもない。そして欲しいものも何もない」

おのが常態のこのようなわびしい要約は、意気消沈の発作で大袈裟なものになっていたけれども、ベンジャミン・ブリテンは——明確に昔のイギリスと区別するために、オールド・イングランドイギリス青年党（一八四〇年代初期のトリー党の一派）と言い表すように、大英帝国と区別するために、時々リトル・ブリテンと呼ば

れることもあった——意外に正確に彼の眞の状況を定義したのであった。というのも、マイルズがベイコン修道士に仕えるように（二人ともロバート・グリーン（一五五八？—一五九二）作の喜劇「ベイクン修道士とバンケイ修道士」（一五九四年上巻）中の登場人物。）博士に

仕えて、彼の存在自体が精々のところ誤ちであり馬鹿げていることを証明する方へ全て傾きがちの、様々な人達に向かつて博士が行う数知れぬ演説に日々聞き入っている間に、この不運な召使は、徐々に彼の内と外双方からの混乱し矛盾だらけの思い付きをめぐる底無しの深淵にはまりこんでしまったので、究めにくい眞理といえども、迷妄の深みにはまっているブリテンと比較すると、極くたやすい問題であるといつてよかった。彼が明確に理解し得た唯一の事柄は、スニチイとクラッグズによつて普通これらの議論の中に持ちこまれる新しい側面は、議論を明快なものにするのにはさっぱり役に立たず、いつも博士に優越感と自信を与えているように見

えるということだった。それ故に、彼は二人の弁護士をおのが精神状態を生み出す直接の原因の一つと考えて、当然のことながら彼等を嫌悪していたのである。

「だがこんなことはどうでもよいことだ、アルフレッド」と博士が言った。「君が言ったように」本日をもって私の被後見人であることが終了し、この土地の学校で吸収し得た学問と、それに加えてロンドンでの勉学と、私のごとき老いばれ田舎医者が君の研鑽につき足し得た實際的な知識等を一杯詰めこんで、私達の下を離れて、君は今世の中へ出ようとしている。君の亡きお父上により定められた見習いの前半の期間を終了して、君は今一人前の男となって、お父上の第二の望みを実現すべく旅立とうとしている。異国の医学校での三年間の研修が完了する時にはとつきの昔に、君は私達のことは忘れ去ってしまったているだろう。六ヶ月もあれば君はやすやすと私達のことは忘却してしまっているだろう！」

「できればの話ですが——しかし僕にできないことはあなたには分かっているでしょう。どうしてこんな分かりきったことを話さなければいけないんですか！」

「さあ私にはよく分からない」と博士が答えた。「メアリアン、おまえはどう思うかな？」メアリアンは、ティーカップをいじくりながら——口に出して言わなかったが——もし可能なら彼が忘却することは大歓迎だと言いたそうに見えた。グレイスが妹の花のような顔に頬を寄せ、微笑んだ。

「私は信託資金を執行する財産管理人としては公平を期したつもりだ」と博士が話を続けた。「だが今朝をもって正式にその責務から解放されることになる。それでスニチィとクラッグズの両君が、信託資金の残額を君に譲渡するために、書類と明細と書き付けを袋に一杯詰めて（アルフレッド、君の財産を譲渡するのがもっと煩わしい仕事であつてもよかつたとは思うが、君は偉い人物になるに違いないし、財産も大いに価値あるものにするだろう）、そして署名し、封印して引き渡さなければいけないその他のくだらないものを持参して、こうしてやって来てくれている」

「そして法律上の手続きに従つて正式に証人の署名もしてあります」とスニチィが言つて、皿を脇へのけて書類を取り出し、相棒がそれを食卓の上に広げた。「信託資金に関しては、博士、私とクラッグズは貴方と共に共同管財人だったので、署名を有効なものとするにはこの兩名の副署が必要なのですが——字は読めるんだらうね、ニューカム夫人？」

「結婚はまだしておりません」とクレメンシィが言つた。

「おお！ どうも失礼。当然もうしていると思つたもので」とスニチィがくすくすと笑い、彼女の常識を逸脱した姿に目をやった。「字は読めるのかね」

「少しなら」とクレメンシィが言つた。

「結婚式の誓いの言葉をかね、それも昼夜をいとわず読んでいるのだろう？」と弁護士が、

からかつて言った。

「いいえ」とクレメンシイが言った。「難しすぎます。指ぬきを読むだけでございます」

「指ぬきを読むって！」とスニチイがおうむ返しに言った。「一体何のことをいってるのかね、娘さん？」

クレメンシイがうなずいて、「そしてにくずくおろしも」と言った。

「おい、気は確かか！ これは大法官（上院議長で国璽を保管し、裁判官としても英国最高の官職。）に裁判をお願いしなければいけない問題だ！」とスニチイが、彼女を凝視して言った。

——「何らかの財産を所有していればのことだが」とクラッグズが条件をつけた。

しかしながら、ここでグレイスが口をはさんで、問題の二つの物のそれぞれに言葉が刻印されていて、これがほとんど読書する習慣を持っていないクレメンシイ・ニューカムのポケット版蔵書となっていることを説明した。

「おお、そうなんですか、グレイスさん！」とスニチイが言った。

「そうですか、そうですか。はっ、はっ、は！ 私は彼女が白痴だとばかり思っていましたよ。そう見えても仕方がないですなあ」と彼は、見下したような視線を走らせながら、言った。「ところで指ぬきには何と刻まれているのかな、ニューカム夫人？」

「結婚はしておりません」とクレメンシイが言った。

「それでは、ニューカム。これでいいのだろう？」と弁護士が言った。「指ぬきには何と刻まれているのかな、ニューカム？」

この質問に答える前に、クレメンシーが片方のポケットを広げて、そこにはなかった指ぬきを求めて口を開けて欠伸をしている底をのぞきこんだこと——次に反対側のポケットを広げ、高価な一粒の真珠のごとく、はるかかなたの底にそれを認めたように見え、ハンカチ、ろうそくのかげら、血色の良い林檎、オレンジ、幸運のペニー銅貨(穴をあけて時計の鎖などにつける)、羊の膝蓋骨(けいれん)(守りと信じて、)、南京錠、前途有望な若き大ばさみとはつきりと言った方がふさわしいさやに収まったばさみ、一握りほどの束ねていないビーズ、数個の木綿糸の玉、針入れ、飾り棚が一杯になるほどの毛巻き紙、一個のビスケット等々の夾雑物(きょうざつぶつ)を取り出して、一品ずつブリテンに預けて持たせたこと——以上のことはとるに足らないことといつてよい。

更に、このポケットの喉首をつかんで監禁しようと固く決心して（というのもポケットが体を揺さぶり、ひねって最も近い角を回って逃げようとしたので）、人間の解剖学的構造と重力の法則に明らかに一致しない姿勢を彼女がとり、それを静かに続けたことも、とるに足らないことといつてよい。ついに彼女が意気揚々と指ぬきを指にはめたことと、にくずくおろしをがらがいわせながら取り出したことを述べれば、それで十分である。同じくこの二つに刻みこまれた文字が過度の摩擦により、明らかにすり切れ磨滅しつつあることを述べれば、それで十

分である。

「それが指ぬきなのかね、娘さん？」とスニチイが、彼女をからかって面白がりながら、言った。「指ぬきには何と刻んであるのかね？」

「これには」とクレメンシイが答え、まるで塔でもあるかのごとくまわりを巡ってゆっくりと読み上げた、「忘——れそして許——せよ、とあります」

スニチイとクラッグズは思ひ存分笑った。「全く新しい！」とスニチイ。「全く明快！」とクラッグズ。「人間性への深い洞察がある！」とスニチイ。「どの問題にもぴつたりとあてはまる！」とクラッグズ。

「ところでにくずくおろしには何とあるのかね？」とスニチイが尋ねた。

「にくずくおろしには」とクレメンシイが答えた、「人にして——ほしい——と思うとおりに人につくせ」（『マタイによる福音書』七章十二節参照）、とあります」

「人を欺け、さもないと人から欺かれるぞ、ということだな」とスニチイ氏が言った。

「わたしには分かりません」とクレメンシイが、ぼんやりと首を振って、言った。「弁護士ではありませんので」

「博士、もし彼女が弁護士であつたなら」とスニチイ氏が、この返事の結果として当然予想される博士からの批判を防ごうとするかのごとく、突然博士の方を振り向いて、言った、「そ

れが依頼人の半数の行動の基本原理だということを発見すると思いますよ。連中はその点ではものすごく真剣ですし——貴方の世界は気紛れなようですが——そしてどのつまりは我々弁護士に責任を押しつけようとする訳ですから。我々法律家というものは結局は鏡に他ならないんですよ、アルフレッドさん。しかし私達は大抵おおよそ機嫌が良いとは申せない怒り対立している人達から依頼を受ける訳です、それで鏡たる私達が不機嫌な顔を映し出したら、私達相手の喧嘩は難しくなるということです。私は」とスニチ氏が言った、「わが事務所の意見として申し上げている訳ですが？」

「その通りです」とクラッグズが言った。

「それで、ブリテン君が一口分のインクを運んでくだされば」とスニチ氏が、書類へ話題を戻して言った、「私どもはすみやかに署名、封印をして、お渡ししたいと存じます、さもないと馬車があつという間に通り過ぎてしまふでしょうから」

その様子から判断すると、ブリテン氏の眼前を馬車があつという間に通り過ぎてしまう可能性は十分にあった。というのは彼は立たずんだまま、博士と二人の弁護士を、二人の弁護士と博士を、依頼人達と二人の弁護士を比較して、もの思いにふけり、そして（彼にとつては新発見であつた）指ぬきとにくずおろしを先人の哲学体系と適合させようというはかない試みに熱中していたからである。つまり、彼の偉大な同名の持ち主である大英帝国が理論と学派で悩ま

されてきたのと同様に、彼も思い悩んでいたのである。しかし彼の守り神であるクレメンシイが——もつとも彼女がもの思いにふけて悩むことが減多にないことと、いつも身近にいて目立たない形で、これという時にこれという事をやってしまうという二つの理由によって、彼女の理解能力を彼は限りなく最低でしか見積つていなかったが——インクをあつという間に運んできて、肘を使って、彼を正氣づかせる仕事までやつてのけた。肘鉄砲を普段使われている意味以上におだやかに使つて、彼に刺激を与えて記憶を呼び覚ましたので、彼はすぐに極めて生き生きとし活氣が出てきたのである。

ペンとインクの使用が大事件であつた彼が、他人の作成した書類に署名すると、訳が分からないうちにおのが立場を危うくしたり、或いは何か莫大な額の金銭を渡さざるを得なくなるのではないかという、彼のごとき身分の人々には珍しくない不安にどんなに彼が襲われていたか。どんなにか彼が不承不承、そして博士の命令により、証書類に近づいて（言い回しはいうまでもなく、判読しにくい筆蹟も彼にはちんぷんかんぷんであつたが）、署名する前にそれらを觀察して、そして裏返しにして、裏側に何かいかがわしいものが付いていないかどうかを確認すると言ひ張つたこと。また署名した後、どれほど彼が財産と所有物を手放した人間のごとく意氣消沈したか。以上のことを説明するには相当な時間が必要とならう。彼の署名した書類をしまった青い袋が、以後どれほど彼にとって不可思議な関心をそそるものとなり、彼がそれから

離れられなかったか。いかにクレメンシ・ニューカムが、自身の重要さと威厳をかみしめて興奮して笑いながら、翼を広げた驚のごとく、両肘で食卓全体を抱えこみ、多大のインクを必要とするある神秘的な文字を書きこむ準備として左腕に頭を乗せ、同時に声に出して言いながらそれらの文字の想像上の写しを作成するに至ったか。また、一度インクの味をしめると、いかに彼女が、丁度おとなしい虎が一度血の味を知るとそれを求めてやまないと言われているのと同じく、インクに飢えて、何にでも至る所に署名したくなったことか。以上のこともまた説明するには相当な時間が必要である。要するに、博士は委託された責務を完了したのであり、アルフレッドは、自ら責任を負って、堂々と人生の旅路につこうとしていたのである。

「ブリテン！」と博士が言った。「門まで走って行って馬車を見張れ。もう時間がないぞ、アルフレッド」

「そうです、まさにそうです」と若者が、急いで言った。「グレイス！ あと一言！ メアリアンを——初々しい上に美しく、魅力的で誰からも好かれ、何物ともかえがたい程愛しい——忘れないでくれ！ メアリアンを君に預けて行くことを！」

「彼女は常にわたしにとっては大切な預りものでしたわ、アルフレッド。今からは、これまでも増してそうですわ。あなたの信頼にはいつまでも応えるつもりでいますわ、信じて下さるなら」

「心から信じるよ、グレイス。それはよく分かっている。君の顔を見て君の声を聞く者の中で、それを知らない者がいるはずはないよ！ グレイス！ 君の理性的で落ち着いた内面さえあれば、僕は今日どんなにか自信をもつて出立することができのに！」

「そうですもの？」グレイスは静かに微笑みながら答えた。

「しかも、グレイス——お姉さん、と言う方がびつたりだけどね」

「そう言つて！」彼女が早口に言った。「その方がわたしも嬉しいのよ。他の呼び方は使わないで頂だい」

「それでは、お姉さん」とアルフレッドが言った、「メアリアンと僕にとつてはここで君の誠実で揺るぎない人格と共に暮らして、更により一層幸せになり向上もしていくのが望ましいことなんだ。それで僕自身のためにも、ずっとここにいてほしい！」

「馬車が丘のてっぺんまで来ています！」とブリテンが叫んだ。

「時間がないぞ、アルフレッド」と博士が言った。

メアリアンは、地面を見つめたまま、離れて立っていた、だが、この警句を聞くと、アルフレッドは彼女をやさしく姉の所へ連れて行き、その抱擁に預けた。

「グレイスに話していたんだがね、メアリアン」彼は言った、「出立に際して僕の大切な預けものとして君を彼女に預けると。そして僕が戻つて来て君を返して貰つて、僕達の結婚生活の

明るい展望がくつきりと開けてきたあかつきには、グレイスを幸せにできる方法を相談するところが僕達の大きな楽しみの一つとなるだろう。彼女の願望を先取りし、彼女に対する感謝と愛を示す方法と、彼女から受ける大きな恩恵を幾分かでも返す方法を相談することも大きな楽しみとなるだろう」

メアリアンは片方の手を彼の手に、もう一方の手を姉の首に預けていた。彼女は愛情、賞讃、悲しみ、驚き、崇拜に近いもの等が入り混じった視線で、静かで、穏やかで、快活な姉の両眼をじっと見つめていた。輝く天使の顔でもあるかのように、姉の顔を見つめていた。静かに、穏やかに、快活に、その顔は彼女とその恋人に伝えていた。

「そうした時が巡って来たあかつきには、いつかはきつと来るに違いないけれども」とアルフレッドが言った——「これまで巡って来なかったのが不思議なくらいだが、グレイスが一番よく知っている、何といってもグレイスはいつも正しいのだから——巡って来たあかつきには思いのたけを打ち明けることができて、僕達をこれまで支えてくれた彼女のように、今度は彼女を支えてくれる存在を彼女が必要とするだろう——その時には、メアリアン、僕達がいかに忠実で、僕達二人の願い通りに、彼女が愛し相手からも愛されるのを知ることがいかに大きな喜びであるかを、二人で示すことになるだろう！」

依然として妹は姉の両眼を見つめたまま、振り向かなかった——彼の方さえも。そして依然

としてその誠実な両眼が、静かに、穏やかに、快活に、妹と恋人に応えていた。

「これら全てが過去のこととなり、僕達が年老いて、（当然そうなるはずである）仲良く暮らして——びつたりと寄り添って——しばしば昔話をするようになった時」とアルフレッドが言った——「これらの出来事はとりわけ格好の話の種となるだろう——なかんずく今日のこの日が。出立の際に僕達が思ったり感じたりしたこと、願ったり恐れたりしたことなどを語り合うこと、別れの言葉を言うのに僕達がどれ程つらい思いをしたかということも——」

「馬車が木立を抜けました！」とブリテンが叫んだ。

「分かった！ 今すぐ行く——そして色々あったにもかかわらず、僕達が幸福な再会を遂げたことも。僕達は今日という日を全歳月の中で最高に幸せな日として、お互いのそれに加えて僕の出立の日という三重に記念すべき誕生日として祝うようにしよう。そうするだろう？」

「ええ、そうするわ！」と姉の方が割りこんで言った、真剣に、輝くような微笑みをたたえながら。「ええ、そうするわ！ アルフレッド、急がないと。ぐずぐずしている時間はなくてよ。メアリアンにさよならを言つて。あなたに神様の御加護がありますように！」

彼は妹を抱き寄せた。彼の抱擁から解放されると、彼女はまたしても姉に寄り添って離れなかった。目も、前と同じ色々な感情が入り混じった表情を浮かべて、静かで、穏やかで、快活な姉の両眼をまたもや求めていた。

「さらば！」と博士が言った。「真剣な文通とか、愛情とか婚約とかいったことを話し合うなんて、しかもこんな——はっ、はっ、はっ——私が言わんとしていることは分かっているだろう——そうしたことは、もちろん、全く馬鹿げたことだ。私として言えることは、君とメアリアンが今と同じ馬鹿げた気持を持ち続けるということになれば、君が遠からず娘婿となることに反対はしない、ということだ」

「橋を渡りました！」とブリテンが叫んだ。

「勝手に来ればいい！」とアルフレッドは言つて、博士の手をしっかりと握りしめた。「友人にして後见人である博士、僕のことを時にはできる限り真剣に思い浮かべて下さい！ さようなら、スニチイさん！ ごきげんよう、クラッグズさん！」

「道を下ってきます！」とブリテンが叫んだ。

「長い間の知り合いであるクレメンシ・ニューカムにキスを！ ブリテン、握手を！ メアリアン、最愛の人、さようなら！ グレイス姉さん！ 僕のことを忘れないで！」

静かで家庭的な姿と、穏やかで美しい顔とが、その言葉に应えて彼の方に向けられた、だがメアリアンの視線と姿勢は動かないままだった。

馬車が門前に到着した。荷物を積みこむ騒ぎがあつた。馬車が走り去った。メアリアンは全く動かなかった。

「彼があなたに帽子を振ってるわ」とグレイスが言った。「夫になるあの人が。ご覧なさい！」
妹は顔を起こして、一瞬、向きを変えた。次の瞬間には、再び戻して、初めて、姉の静かな
両眼をまともに見すえ、彼女の首に抱きついて泣き出した。

「おお、グレイス。あなたに神様の御加護がありますように！　だけどわたしにはとても見
られないわ、グレイス！　胸が張り裂けそうなの」

第二部

スニチイとクラッグズは古戦場を臨む居心地のよい小さな事務所を構えていて、そこで居心地のよいさやかな業務を営み、おびただしいあい争っている連中のためにおびただしい小規模の正々堂々の戦いを展開していた。これらの戦いが海上の追撃戦とは到底呼べなかつたけれども——というのも実際のところ概して非常にのろろと運ばれていたもので——この事務所が占めていた役割は多岐に渡って万屋まやといつてよい程であつたので、状況に応じ、敵の様相に合わせて、今この被告めがけて発射したかと思うと、次にはあの被告に狙いをつけてたき切つたりしたし、また大法官庁裁判所である財産に激しく突撃したかと思うと、次にはわずかな負債者からなる不正規軍と軽い小ぜり合いを起こしたりしていたのである。もつと華やかで目立つ戦場と同じく、彼等の戦場においても官報は重要で有益な格好の獲物であつた。彼等が指揮能力を発揮したほとんどの戦闘において、二人を取り巻くおびただしい量の煙のために、彼等がお互いを確認し合うことと、従事していることを多少でも明確に知ることにおいて、極めて難儀していたことが、後刻敵方により看取されたのであつた。

スニチイとクラッグズ両氏の事務所は、市場町の便利のよい場所に位置していて、二段の滑りやすい石段の下のだアは、苦境に陥つて興奮した農夫が直ちに転がつて入れるように、開放されていた。二人の特別の仕事部屋兼相談室は二階の奥の古びた部屋で、法律上のもつた問題を陰気に眉に皺しわを寄せて考えこんでいるように見受けられた低く黒ずんだ天井が付いてい

た。この部屋には、一面至るところ二個三個と抜け落ちるか——或いは多分、途方に暮れた依頼人のさまよう親指と人指し指によって引き抜かれたと思われるぎよる目の大きな真鍮製の鉾飾りの付いた数脚の背の高い革張りの椅子が備えてあった。恐るべき鬘かつらの巻き毛の一本一本が本物の頭髮を震えあがらせて逆立ちさせた偉大な裁判官の版画が額縁に入れて掛けてあった。

書類の山が埃まみれの物置き、棚、テーブルを占領していた。壁の羽目板の周囲に南京錠の付いた耐火構造の、それぞれに名前が書いてある箱がずらりと並んでいて、不安一杯の依頼人は、スニチイとクラッグズが語る内容が全く理解できないまま、二人の言葉に耳を傾けていると見せて座っている間、残酷にも魅せられてそれらの名前をあれこれと綴ることと、それらの綴り換えを否定なしにさせられたものだった。

スニチイとクラッグズには、二人が仕事の上で連れ添っているのと同じく私生活においても、それぞれに連れ添っている妻がいた。スニチイとクラッグズは無二の親友で、相互に心から信頼し合っていたが、スニチイ夫人は、人生模様ではよくある天の配剤により、クラッグズ氏を信用しないことを主義としていたし、クラッグズ夫人もスニチイ氏を信用しないことを主義としていた。「あなたのスニチイズは実際」とクラッグズ夫人は、時々夫に言うことがあった、不愉快なズボンや単数を所有していないその他の物をそしめる時のように、空想上の複数を使いながら。「わたしとしては、あなたがスニチイズに一体何の用事があるのかさっぱり分からない

いわ。あなたはスニチイズを余りにも信用し過ぎていると思うし、そしてわたしの言葉が当たっていないように願うだけよ」一方スニチィ夫人もクラッグズに関して、夫に言うのが常だった、「あなたは間違いなくあの男に欺かれているし、クラッグズの目から一心ある人物だといふことがわたしにはよく読みとれるわ」しかしながら、こうした障害があるにもかかわらず、彼等は無二の親友であり続けたので、スニチィ夫人とクラッグズ夫人は、二人が秘密の部屋であり、（未知であるが故に）危険な陰謀で一杯である共通の敵とみなした「事務所」に対して、固い同盟の盟約を結んだのであった。

それにもかかわらず、この事務所ですニチィとクラッグズはめいめいの巣箱のために蜜を作り出していた。ここで、時折、晴れた日の夕方、彼等は古戦場を見おろす仕事部屋の窓辺に立たずんで、（だがこうしたことは、沢山の仕事が二人を感傷的な気分にした巡回裁判開廷期に概して出来したのであるが）相互に仲良くしたり、気持よく訴訟に訴えたりすることが必ずしもできない人類の愚かさをいぶかしく思ったものである。ここで、曜日が、週が、月が、年が経過して行き、それと共に、草張りの椅子の真鍮の鉈の数は次第に減少して行き、テーブルの書類の山の方はどんどん増えて行くという彼等の暦も経過して行った。ここで、果樹園での例の朝食以来約三年の歳月の巡りの間に、一方はどんどんとほそり、他方はどんどんとふくらんで行った。そうした時の夜分、彼等は共に座って相談していたのである。

二人だけではなくして、三十歳前後の、投げやりな服装をして、顔が幾分やつれてはいるが、均齊がとれ、上質の服を身につけた、ハンサムな、年代ものの肘掛椅子に座りこんで、片手で胸を押さえ、もう一方の手で乱れた髪をひっかいても思いに沈んでいる一人の男が一緒にいた。スニチィとクラッグズ両氏はとなりのテーブルをはさんで相對して座っていた。耐火構造の箱の一つが南京錠を開けられ蓋をとって、テーブルに置かれていた。その中味の一部がテーブルにまき散らされていて、残りのものはその時スニチィ氏の両手を通して経過を辿っていて、彼ほどの書類も取り出しては、一枚ずつろろそくにかざして眺め、頭を振って、それをクラッグズ氏に手渡した。彼もまたその書類を眺め、頭を振り、そしてテーブルに置いた。時々二人は手を休め、共に頭を振って、放心状態の顧客を眺めた。箱の名前がマイケル・ウォーデン殿となっていたので、これらの前提からその名前も箱もこの顧客を指していることと、マイケル・ウォーデン殿をめぐる事態がひどく悪化していることを結論づけることができよう。

「万事休す」とスニチィ氏は、最後の書類を見ながら、言った。「本当に打てる手は何もありません。何一つありません」

「全て失い、浪費し、質草になり、借金の抵当になったり、売り払われたりしているのかい？」と顧客が、視線を起こして言った。

「そうです」とスニチィ氏が答えた。

「打てる手が何一つないって？」

「何一つありません」

顧客は爪をかみ、再び沈みこんだ。

「俺がイギリスにいるのは危険だって言うんだな？ あくまでもそうだとするんだな？」

「大英帝国とアイルランドのいかなる場所においてもそうです」とスニチ氏が答えた。

「戻ってゆける父親もいず、飼える豚もいず、豚と分かちあう穀皮も持たない放蕩息子（『ルカ福音書』十五章十一節―三十二節参照）も同然だと言うんだな？」と顧客が、組んだ方の足をぶらぶらとさせ、床を見

つめながら、言葉を続けた。

スニチ氏は、法律上の立場をめぐる相手の比喩的な言葉に相槌を打つと思われるのを見下しているかのごとく、咳払いをした。クラッグズ氏も、この問題に関する相棒としての見解を表明するかのごとく、咳払いをした。

「三十歳で破産か？」と顧客が言った。「ふん！」

「破産ではありません、ウォーデンさん」とスニチ氏が答えた。「そこまでひどくはありません。貴方が破産に向かって色々なことを仕出かされたことは認めなければいけません、破産はされておりません。少し財産を大事に管理しますと――」

「少しなんてくそくらえ」と顧客が言った。

「クラッグズ君」とスニチイが言った、「嗅ぎ煙草を少しくれないか？　ありがとう」

ものに動じない弁護士が明らかに大いに楽しみ、かつその手順に神経をすっかり集中させて、嗅ぎ煙草を鼻の穴にあてた時、顧客は徐々に表情を崩してついには笑い出し、視線を起こして、言った、「財産を大事に管理すればとあんたは今言ったけど、期間はどう位かね？」

「期間はどれ位かねか？」とスニチイは指から嗅ぎ煙草の粉を払い、心中で慎重に計算をしながら、おうむ返しに言った。「貴方の危機にひんしている地所のために？　信頼できる人の管理で？　例えば当事務所のような？　六、七年ですかな」

「六、七年で餓死という訳か！」と顧客はいら立った笑いを浮かべ、姿勢をせかせかと変えながら言った。

「六、七年で餓死なんてことは、ウォーデンさん」とスニチイは言った、「ありえないことだと思えますよ、本当に。貴方はその間に姿を隠す代わりに世間に姿を見せて、別の地所を手に入れようと思えばできる訳ですから。だが私どもは貴方にそれができるとは思っておりません——当事務所の意見を申し上げている訳ですが——それ故にそれをお勧めも致しません」

「それでは、体何をお勧めようと言うんだい？」

「財産の大事な管理ということですよ」とスニチイが繰り返した。「私とクラッグズで貴方の財産を数年間大事に管理すれば、事態は好転すると思います。だけど私どもが協定を結び、

持續できるようにすること、そして貴方がその協定を守ることを可能にするためには、貴方に立ち退いて海外に身を隠して頂くことが不可欠なんですよ。餓死の問題に関しては、最初から餓死代として年間数百ポンドは保証できると思います——多分できるはずです、ウォーデンさん」

「数百ポンドだと」と顧客が言った。「何千ポンドと使ってきたのに！」

「私が申し上げたことは」とスニチィは、書類をゆっくりと鑄鉄製の箱に戻しながら、答えた、「絶対に間違いありません。それについて——は間違いありません」考えこんで作業を続けながら、彼は自問自答するように繰り返して言った。

弁護士は顧客の人となりをも分知り抜いていたのだらう。いずれにせよ、彼の乾いた、鋭敏な風変わりな態度が、顧客のふさぎこんだ状態に有利な影響を及ぼして、もっと伸びやかでくだわらない態度をとろうという気持ちにさせたのであった。或いは多分顧客も弁護士の人となりを知り抜いていて、彼が受け取ったような励ましを引き出して、表明しようとしていた何かの意図を見かけだけでもそれだけより一層防御できるものにし得たのであらう。次第に頭を起こして、彼は冷徹そのものの助言者を微笑みをもって見るようになり、その微笑みはじきに一笑へと激しく変化していったのであった。

「つまるところ」と彼は言った、「わが石頭の友は——」

スニチィ氏は彼の相棒を指さした。「私どもは——すいませんが——二人でして」

「失礼しました」と顧客が言った。「つまるところ、わが石頭の友人がたは」彼は座ったまま身体を乗り出して、声を少し下げた、「あんたがたは俺の破滅を半分も御存知ではない」

スニチィ氏は作業の手をとめて彼を見つめた。クラッグズ氏もまた見つめた。

「俺は負債だけではなくて」と顧客が言った、「別にもはまりこんでいるものが——」

「まさか恋では！」とスニチィが叫んだ。

「その通りだ！」と顧客は、座り直して、両手をポケットに突っこんで二人を見渡しながら、言った。「恋にはまりこんでいる」

「相続人とはありますまいな？」とスニチィが言った。

「相続人ではない」

「金持の御婦人でもなさそうですな？」

「俺の知る限りではそうだ——美しさと人間的価値を除けばね」

「独身の御婦人なのでしょうね？」とスニチィ氏が、意味深重に言った。

「その通りだ」

「ジェドラー博士の御令嬢の一方では？」とスニチィは言つて、突然膝に肘を立てて、少くとも一ヤード顔を前進させた。

「そうだ」と顧客が答えた。

「妹さんの方では？」とスニチイが言った。

「そうだ」と顧客が答えた。

「クラッグズ君」とスニチイが、ほっと一息入れて、言った、「また嗅ぎ煙草を少々くれないかね？　ありがとう！　それならありがたいことに何の意味もありませんよ、ウォーデンさん。彼女は婚約しているのですよ。相棒も請けあいますし、私どもはその事実を承知しております」

「承知しております」とクラッグズがおうむ返しに言った。

「俺だつて知っているよ」と顧客が静かに答えた。「それがどうしたというんだ！　あんたがたは世の中をよく知っているから、女性の心変わりという話を聞いたことがあるだろう？」

「確かに背信のために起こされた訴訟はあります」とスニチイ氏が言った、「独身女性と未亡人の両方に対してなされたね、しかし、大多数の場合——」

「場合だつて！」と顧客が、いら立って、口をはさんだ。「俺に場合の話なんかしないでくれ。先例一般の話となると、法律の書物をはるかにしのぐ膨大な量に達してしまう。その上、俺が博士の屋敷で無駄に六週間も過ごしたとでも思っているのか？」

「私が思うに」とスニチイが、相棒に向かって重々しい態度で、話しかけた、「ウォーデン氏の馬がこれまで次々と彼をおとしめてきた窮境の中でも——そして彼自身と私ども二人が誰よ



りもよく知っているごとく、それらはものすごい数に達しているし、出費も随分とかさんだものだが——彼がこんな調子で、博士の庭の塀に乗っていた馬がぶつかって、肋骨が三本折れ、鎖骨も折れ、その上無数の傷を負ったことから、この事態が出来たという風に話す限り、最悪の窮境に直面する羽目に陥るかも知れない。博士の屋敷で看護を受けながら彼が順調に回復しているのを知った時点では、我々は重大視していなかった、だが今はゆゆしい状況になっている、そうだろうか？ 極めてゆゆしい状況になっている。ジェドラー博士も——私どもの顧客なんだよ、クラッグズ君」

「アルフレッド・ヒースフィールド氏も——顧客といってよいだろう、スニチ君」とクラッグズが言った。

「マイケル・ウォーデン氏も、顧客といってよい」と投げやりな訪問者が言った、「しかも悪くない顧客のはずだ、十年も十二年も馬鹿をやってきたのだから。しかし、マイケル・ウォーデン氏も今は若気の道楽をやめて落ち着いてきている——その箱の中に道案の数々を物語るものが入っているが。そして彼は後悔して賢明になろうとしている。その明かしとして、マイケル・ウォーデン氏は、できることなら、博士の美しい娘であるメアリアンと結婚して、海外へ連れ去りたいと考えている」

「実際、クラッグズ君」スニチが言い出した。

「實際、スニチイにクラッグズの御兩人」と顧客が、彼をさえぎつて、言った、「あんた達は顧客に対する義務をわきまえているし、また俺が打ち明けることを余儀なくされたような恋愛沙汰程度のこと干渉するのが義務の一部でないことも、十二分にわきまえているはずだ。俺は本人の同意なく、当の若い婦人を連れて行くようなことはしない。法に触れることは何一つない。俺がヒースフィールド氏の親友であつたことは一度もない。彼の信頼を破る訳でもない。俺は彼が愛するように愛して、彼が勝利を収めるであらうように勝利を収めるつもりだ」

「この人には不可能だよ、クラッグズ君」とスニチイが、明らかに不安と動揺の色を見せながら、言った。「そんなことは不可能だよ。彼女はアルフレッドさんに夢中なのだから」

「本当にそうかい？」と顧客が答えた。

「クラッグズ君、彼女はあの人に夢中なんだよ」とスニチイは言い続けた。

「俺は、数ヶ月前、博士の屋敷で六週間を無駄に過ごした訳ではない。すぐにそれに対する疑いを持ったんだ」と顧客が言った。「彼女の姉がそうさせることができていたならば、彼女は彼に夢中になったかも知れない、だが俺は二人を観察した。メアリアンは彼の名前も、この問題も避けていたし、明らかに苦しみ抜いて、これに遠回しに触れることすら避けていた」

「クラッグズ君、何故彼女はそんなことをしなければいけないのか？ どうしてなのか？」とスニチイが尋ねた。

「何故彼女がそうするのか俺にも分からない。ありそうな理由は色々と思いつくけれども」と顧客は言つて、スニチィ氏の光る目に浮かんでいる注意深さと当惑を見て、会話を運びながら必要な情報を得ようとする彼の用心深いやり方を見て、微笑んだ。「だが彼女が現にそうしているのは確かだ。結婚の約束をした時彼女は若すぎた——俺にはとてもそうは思えない、それが結婚の約束と呼べたらの話だが——それで、多分その後それを悔いたのだろう。恐らく——馬鹿げた話のように聞こえるだろうが、誓つて真剣な気持で言うのだが——俺が彼女を愛するようになったように、彼女も俺を愛するようになったのだらうと思う」

「ひつ、ひ！ 彼女の遊び仲間でもあるアルフレッドさんが、憶えているだらう、クラッグズ君」とスニチィは、とり乱した笑いを浮かべて、言つた、「ほとんど赤ん坊の時から彼女を知っていることを！」

「それが彼女が彼について想うことにあきあきしているかも知れない事実をより一層あり得るものにしてゐるし」と顧客が静かに話を続けた、「そしてロマンティックな状態で登場してきた（或いは馬により紹介された）別の恋人というより新しい想いと、彼についての想いを取り換へたいという気持にさせたのもそうだ。人に大して害を加えることもなく、無分別に派手に暮らしてきたという——近在の女の子を相手にしての——決して不利とはいえない評判をとつており、若さと容姿などのために——またしても馬鹿げた話のように聞こえるだらうが、誓

って真剣な気持で言うのだが——アルフレッド氏と比べても多分見劣りはしない別の恋人という新しい想いとな」

最後の条項は明らかに否認できないと、スニチィ氏は、彼に目をやりながら、思った。彼の投げやりな態度そのものに生得の上品で心地よい何かがあった。それと彼の端正な顔と引き締まった体を結びつけると、彼がその気になれば飛躍的にすばらしいものが出てくるだろうと思わせるものと、一旦目覚めて真剣になると（もっともこの人物が真剣になったことはこれまでもないが）、彼が激しく燃えて集中力を発揮し得るであろうと思わせるものが感じとれた。「危険な類の放蕩者だ」と明敏な弁護士は思った、「若い婦人の両眼から、欲していた火花を受けとめて燃焼している感じた」

「ところで、いいかね、スニチィ」彼は言葉を続けながら、立ち上がって相手のボタンをつかんだ、「そしてクラッグズ」ここでもボタンをつかんで、二人が彼から逃げないように、両側に引き寄せた。「あんた達の忠告なんかどうでもいい。あんた達のような堅物では口出しをしかねるこのような問題の全ての当事者から、あんたがたが距離を置こうとするのは当然だ。

自分の立場と意図を今から手短かに説明し、金銭上の問題はあんた達が俺のために最善の手を打ってくれるだろうから、それに任そうと思う。博士の美しい娘と駆け落ちしたなら（俺はそうしたいし、彼女のすばらしい感化力を受けて別人になりたいと思っている）、俺一人で逐電

するよりは、当座は非難されることが分かりきっているのね。しかし生まれ変わることによって俺はすぐにその償いを果たすことになるだろうよ」

「今の言葉は聞かないことにした方がよいと思うが、クラッグズ君？」とスニチイが、顧客越しに相棒を見ながら、言った。

「その通りだ」とクラッグズが言った。——二人とも聞き耳を立てていた。

「いいとも！ 聞くには及ばないよ」と顧客が答えた。「だけど、言うべきことは言っておく。彼が同意してくれないことは分かりきっているの、俺は博士の同意を求めるつもりはない。だが俺のすることが博士に不当な仕打ちや害を加えることにはならない、何故なら（彼が言うがごとく、こんな些事に真剣なものが有り得るはずはないことに加えて）彼女が恐れていることが俺に見てとれる——俺に分かる——そして惨めな気持で思い悩んでいることから、即ち、昔の恋人の帰国から、俺のメアリアンを救い出したいと思っているからだ。この世の中に本当のものがあるとすれば、彼女が彼の帰国を恐れていることこそ紛れもなくそうだ。これまでは誰も傷ついてはいない。俺は今のところここで執拗に悩まされ付きまとわれているので、飛魚のごとき生活を送っている。暗闇の中をこそそそと忍び、自分の屋敷から閉め出され、おのが庭園への出入りを禁じられている。だが屋敷も庭園も地所も、あんた達が見通して言うように、いずれは俺の手元へ帰ってくるだろう。そうなればメアリアンは——樂觀的になることが絶対

にないあんた達の説明によっても——十年後にはアルフレッド・ヒースフィールドの妻になるよりもっと俺の妻として、多分金持ちになっているだろう、彼女は彼の帰国を恐れているし（これはよく銘記しといてくれ）、愛情ならば彼にも他の誰にも引けをとることはないからな。

誰か傷ついた者がいるのか？ 徹頭徹尾公平に運ばれているのだ。彼女が俺を選んでくれるなら、俺にも彼と同じだけの権利はある訳で、それで彼女と二人だけの時に俺の権利を行使してみろつもありだ。あんたがたもこれ以上はもう聞きたくはないだろうし、俺も話したくはない。

これで俺の意図と望みを知った訳だ。何時ここを離れなければいけないのか？」

「一週間後」とスニチィが言った。「そうだろう、クラッグズ君？」

「もっと早いうちに」とクラッグズが答えた。

「一ヶ月後」と顧客が、二人の顔を注意深く見つめた後、言った。「丁度一ヶ月後の木曜日だ。どういうことになるかと、きっかり一ヶ月後に出て行く」

「それでは余りにも遅すぎます」とスニチィが言った。「余りにも長すぎます。だが放っておこう。三ヶ月後という条件でも出しかねない感じだったから」彼は独り呟いた。「お帰りですか？ お休みなさい！」

「お休み！」と答えて、顧客は二人と握手をした。「あんた達はそのうち俺が財産を活用するのを見ることになるだろう。これからはメアリアンが俺の導きの星となるよ！」

「階段に氣を付けて下さいよ」とスニチイが答えた。「そこでは彼女は輝いてはいませんからね。お休みなさい！」

「お休み！」

二人はろうそくを手にして階段を上がりきった所に立つて、彼が下りて行くのを見送った。彼が行ってしまった後、二人は顔を見合せて立たずんでいた。

「今の話をどう思ふかね、クラッグズ君？」とスニチイが言った。

クラッグズ氏は頭を振った。

「アルフレッドさんについての責任解除が遂行された日のあの二人の別れ方には何か変なところがあったというのが、我々の一致した意見だったと思うが」とスニチイが言った。

「その通り」とクラッグズ氏が言った。

「多分彼は全くの錯覚をしているのだろう」とスニチイ氏は、耐火性の箱の鍵を掛けて、それを片付けながら、言葉を続けた。「或いは、そうでない場合は、ちょっとした気紛れと浮気というのは別に珍しいことではないから、クラッグズ君。しかしあの綺麗な顔は嘘偽りはないと思つていた。私は思つていたのだが」とスニチイ氏は、コートを着て（寒さが厳しかったので）、手袋をはめ、ろうそくを消しながら、言った、「彼女の性格が最近一段と強くなり揺るぎないものになってきたと。姉に似てきたと」

「家内も同じ意見なんだが」とクラッグズが答えた。

「今晚喜んで一杯おごろう」とスニチィが、人柄の良さを発揮して、言った。「ウォーデン氏が手前勝手な考え方をしていると信じられたらね。だが軽はずみで、気紛れで、移り気であっても、彼は世の中と人間というものを幾分なりともわきまえている（当然のことだ、彼は多額の金銭を浪費してそれらの知識を買ったのだから）。それで彼の勝手な思いこみとは考えられないのだ。干渉しない方がよいし、静観する以外には何もできないよ、クラッグズ君」

「その通り」とクラッグズが答えた。

「博士はこうした問題を軽く見すぎる」とスニチィ氏が、頭を振って、言った。「あの人が例の哲学を必要としないように願うばかりだ。アルフレッド君は人生の戦いの話をしたが」彼はまた頭を振った、「彼が戦いで若くして倒れないよう祈るばかりだ。帽子はかぶったね、クラッグズ君？ 残りのろうそくも消すから」

クラッグズ氏の肯定の答を受けて、スニチィ氏はろうそくを消し、二人は話題と同じく、或いは法律全般と同様、真つ暗な仕事部屋から外へ手探りで出たのであった。

同じ日の夜、娘達と元気な老博士が火が陽気に燃えている炉辺に座っていた静かで小ぢんまりした書齋へと話は展開する。グレイスは針仕事をしていた。メアリアンは本を音読していた。

博士は、ガウンを着てスリッパをはき、両足を暖かい敷物に投げ出して、安楽椅子にもたれて、音読する声に聞き入り、娘達を眺めていた。

二人はとても美しく目に映じてきた。もっと整った顔をもってきたとしても、炉辺が明るく神聖なものになるはずもなかった。三年の間に姉妹の間の相違は幾分やわらげられていた。目を見張り、声を震わせている妹の清らかな顔に、母親なしの妹の存在がずっと昔に姉の中に熟させたのと同じ真剣な人となり宿っていた。しかし彼女は依然として二人の中で可愛らしく弱い立場をとっているように見えたし、依然として姉の胸に頭を預け、信頼を寄せ、助言と抛り所を求めて姉の目をのぞきこんでいるように見えた。昔同様、静かで、穏やかで、快活な愛情に満ちあふれた目を。

『そして家について』とメアリアンが、本を音読した、『これらの想い出によって家が愛しいものとなった時、彼女は心の大きな試練が避けるすべもなくすぐに起こって、先へ延ばすことは不可能であることを悟り始めた。他のものが見捨てても慰め手となり友人となる、おお、家よ、揺り籠から墓場までのいかなる段階においても、汝と別れを告げることは――』

「メアリアン、あなた！」とグレイスが言った。

「おい、おねこちゃん」と父親が叫んだ、「どうしたんだ？」

彼女は姉が差し出した手におのが手を重ねて、読み続けた。声を依然として詰まらせ、震わ

せていた、このように呼びかけられた時それを努めて抑えようとしていたけれども。

「揺り籠から墓場までのいかなる段階においても、汝と別れを告げることは、常に悲しい。我々にこの上なく誠実でありながら、返礼としてこの上なく軽侮される、おお、家よ、汝に背を向けた者達に寛大な態度をとって、彼等の罪深い歩みにとがめだてするように付きまとわないでおくれ！　いかなるやさしい視線も、いかなる記憶に焼きついて離れない微笑みも、汝の幽霊のごとき顔に浮かべないでおくれ！　いかなる愛、温情、やさしさ、寛大さ、誠意などの光を、汝の真つ白な顔から輝やかさないでおくれ！　なつかしい愛に満ちあふれた言葉と響きを、汝を見棄てた者に対する判断の中に入れないでおくれ！　だがもしも汝が厳しく容赦しない視線を向けることができるならば、罪を悔いている者を哀れと思つて、そうしておくれ！」

「メアリアン、今夜はもう読むのはやめなさい」とグレイスが言つた——というのも彼女が泣き出したからである。

「もうこれ以上は駄目だわ」と答えて、彼女は本を閉じた。「言葉が燃え立っているように思えるのよ！」

博士はこれを聞いて面白がり、娘の頭を撫でながら笑つた。

「何たることだ！　物語に圧倒されるとは！」とシェドラー博士が言つた。「活字と紙に過ぎないのに！　まあ、そんなことはどうでもよい。活字と紙を真剣な問題だと受けとめるのも分

からない訳でもない。だが泣くのはおよし、さあ、涙をふいて。多分ヒロインはとつくの昔に家に戻って、すっかり仲直りしていると思うよ——それに彼女が仲直りしていなくとも、家なんて壁が四つあるだけのことだし、まして架空の家となると、ぼろ紙とインクに過ぎない。おい、何かあったのか？」

「わたしです、旦那さま」とクレメンシィが、戸口から顔をのぞかせて、言った。

「それではおまえの身に何かあったのか？」と博士が言った。

「いいえ、めっそうもない、わたしは何ともありません」とクレメンシィが答えた——彼女の石鹼の香りがする顔から判断すると、まさにそのようであつた、そしてその顔にいつものごとく上機嫌の精髓が輝いていて、不格好な見かけにもかかわらず、彼女をこの上なく魅力的にしていた。肘のすり傷は、普通付け黒子ぼくろと呼ばれる種類の容姿の魅力には含まれていないと了解されている、ということはあるとしても。しかしこの世を生きて行く間は、気分をいらだたされるよりは、狭い通路で肘をすりむく方がましである。その上クレメンシィの気分はこの世の全ての美人の気分に分けをとらない程健やかで安定していた。

「わたしは何ともありません」と言つて、クレメンシィが部屋に入ってきた、「ですが——もっとそばへ寄つて下さいまし、旦那さま」

博士は、驚きながら、この言葉に応じた。

「お嬢さま方の前で手渡してはならぬと仰せになりましたので」とクレメンシイが言った。

この家族に慣れない人は、われとわが身を抱きしめたかのごとき彼女の両肘にみなぎった独特の歓喜もしくは興奮のみならず、この言葉を言った時の彼女の異常とも思える流し目から、最も好意的な立場をとって、彼女が清らかな接吻をしようとしていると思ったことだろう。事実他ならぬ博士自身が、一瞬仰天したように見えたが、すぐに彼は平静さを取り戻した。一方クレメンシイは、両側のポケットをしきりに探り——正しい方のポケットから始めて、次に間違った方のポケットに移り、その後再び正しい方のポケットに戻って——一通の手紙を取り出した。

「プリテンが馬で用足しに出ていて」彼女は、手紙を博士に渡しながら、くすくすと笑った。「郵便が来るのを見て、待ち受けたのでございます。隅にA・H・とあります。アルフレッドさまは間違いないとお帰りの旅についておられます。じきにこの屋敷で結婚式があげられる運びとなりましょう——今朝受け皿にスプーンが二本載っております。ええ、またか、手紙を開けるのが何とどのろいこと！」

このセリフを彼女は独り言のつもりで呟きながら、手紙の内容を聞こうとしていら立って、次第につま先で伸び上がり、栓抜きでコルク栓を開けるように、口でエプロンをひねり回したのであった。ついに、気をもみながら待つことも限界に達し、その上博士が依然として手紙を

精読し続けているのを見て、彼女はもう一度踵を床にべたりと着け、無言の絶望と忍耐の限界を越えた印として、ベールのごとく、エプロンを頭にかぶせたのである。

「おい！ おまえ達！」と博士が叫んだ。「つい喋ってしまう。私はこれまで秘密を保ち得たためしがない。実際のところ、保持しておく価値がある秘密もそれ程はない、こんな——まあいい！ 気にしてくれるな。アルフレッドが帰ってくるぞ、おまえ達、すぐに」

「すぐに！」とメアリアンが叫んだ。

「何と！ 泣いた鳥の何とかだな！」と博士は言つて、娘の頬を軽くつねつた。「このニュースでおまえの涙も乾くだろうと思つた。そうだ。『僕の帰国は秘密にしておいて彼女を驚かせてやりましょう』とアルフレッドは手紙の中で書いている。だが私にはそんなことはできない。帰国する彼を心から歓迎しなければいけないからな」

「すぐに！」とメアリアンが繰り返して言つた。

「おまえが待ち切れないで『すぐに』というよりも」と博士が答えた、「ほどなくということだ。待てよ、えーと。今日は木曜日だな？ それでは来月の今日、彼は間違いなくここに帰ってくるぞ」

「来月の今日ですって！」とメアリアンが、静かに反復して言つた。

「わたし達にとって楽しい日となり記念すべき日となるのよ」とグレイスが、祝福の接吻を

しながら、弾んだ声で言った。「随分長い間待ち望んだ日がとうとう来たのよ」

彼女は微笑みをもって答えた、悲しそうではあったが、妹らしい愛情にあふれた微笑みをもって。姉の顔を見つめて、その静かで音楽のごとき声を聞きながら、この帰国のもたらす幸福を想い描いた時、彼女の顔は希望と喜びで輝いた。

そしてそれ以外のもの、つまり全ての表情を超えてどんどん輝きを増す名状し難いものでも輝いた。それは狂喜、勝利感、誇り高い興奮のいずれでもなかった。これらの表情が静かに示されることはないからである。それは愛と感謝だけのものでもなかった、その一部ではあったとしても。それは汚れた想いから発してもいなかった、というのも汚れた想いが額を明るくしたり、唇に漂ったり、思いやりにあふれたその姿が震えを帯びるまで波動する光のごとく魂を揺り動かす、ということはある得ないからである。

ジェドラー博士は、彼の哲学体系にもかかわらず——実際は彼はその哲学を絶えず否認し打ち消していたのだが、そうしたことはもつと著名な哲学者でも行っていることである——彼の被後見人にして弟子の帰国にまるで重大事件であるかのごとき関心を寄せざるを得なかった。それで彼はもう一度安楽椅子に腰を下ろし、數物に再度スリッパをはいた両足を投げ出して、手紙を何度も読み返し、繰り返し繰り返し話題にしたのであった。

「ああ！ 昔よく」と博士が、暖炉の火を見つめながら、言った、「グレイス、おまえとアル

フレッドが、一對の歩く人形のように、彼の休みの日に、腕を組んで歩き回っていたっけなあ。憶えているだろう？」

「憶えていますわ」グレイスが、弾んだ笑いを浮かべ、せっせと針を動かしながら、答えた。

「来月の今日か、まったく！」と博士が感慨にふけて呟いた。「あれから一年と経っていないように思えてならない。ところでメアリアンはあの頃どうしていたのかな！」

「お姉さんから決して離れなかったわ」とメアリアンが、楽しそうに言った。「わたしがどんなに小さくとも。グレイスは、お姉さんが子供であった頃でさえ、わたしにとっては全てだったの」

「その通りだ、おねこちゃん、その通りだ」と博士が答えた。「その時分から落ち着いていた、グレイスは、その上賢い家政婦にして、多忙な、もの静かで、明るい女性だった。我々の気紛れに耐え、我々の願望を察知し、いつも自身の望みは進んで忘れ去っていた。その時分、グレイス、一つの話題を除いて、断定的であったり頑固であったりしたおまえを私は知らない」

「悲しいことに、その後良くない人間に変わってしまったみたい」と、依然として針仕事をせっせとしながら、グレイスが笑った。「一つの話題とは何ですの、お父さま？」

「アルフレッドだよ、もちろん」と博士が言った。「アルフレッドの奥さんと何が何でも呼んでほしいと言っておまえは聞かなかったものだ。それで皆でおまえをそう呼んだものだ。（今

となつてみると妙な話だが）たとえおまえが公爵夫人になり得たとしても、そう呼ばれるよりはアルフレッドの奥さんと呼ばれる方をおまえが望んだ、と思つた程だ」

「本当ですの？」とグレイスが、静かに言つた。

「おまえは憶えてないのか？」と博士が尋ねた。

「少しは」彼女が答えた、「だけどほとんど憶えておりませんわ。遠い昔のことですもの」針仕事をしながら、彼女は博士が好きな古謡の一節を口ずさんだ。

「アルフレッドはほどなく本当の奥さんを見つけますわ」歌を急にやめて、彼女は言つた、「その時はわたし達全員本当に幸せな時を持つことになりますわ。三年間あなたを預つた責任もほぼ終りを迎えてよ、メアリアン。とても楽な仕事だったけど。あなたを彼にお返しする時、あなたがこの三年間ずっと彼を心の底から愛したことで、一度としてわたしの助力など必要ではなかつたことを、アルフレッドに話そうと思うの。そうしていいでしょう？」

「あの人に言つて頂だい、グレイス」とメアリアンが答えた、「これ程寛大に、氣高く、着実に、果たされた責任はこれまでないということを。わたしがあなたをこの三年間、毎日心の底から愛したということを。おお！ どれ程あなたを愛していることか！」

「いいえ」と、妹の抱擁に応えながら、姉が快活に言つた、「そんなことはあの人にはとても言えないわ。わたしへの評価はあの子の胸の内に任せておきましょう。メアリアン、あなたと

同様に、とても寛大だろうとは思うけど」

それと共に、グレイスは、妹が熱をこめて話している間、手を休めていた針仕事を再開し、それに合わせて博士が好む古謡を再び唄い始めた。一方博士は、ずっと安楽椅子に腰を下ろし、スリッパをはいた両足を敷物に投げたままで、その調べに聞き入り、アルフレッドの手紙で膝をたたいて拍子をとりながら、二人の娘を眺めては、この取るに足らぬ世の中の幾多の些細なものの中で、二人の娘という些細なものは十分に心なごむものだと思ったのであった。

一方、クレメンシー・ニューカムは用件を済ませた後も部屋に残って手紙の内容を知ってから、台所へと下りて行った。そこには彼女の助手たるブリテン氏が、鏡のホールの中央に座っているかと思われる程、壁と棚に整理されて並べられている輝くつぼの蓋、よく磨かれた鍋、つやつやと光る食器類、きらめくやかん、その他の彼女の勤勉さを物語るおびただしい道具類にとり囲まれて、夕食を終えて満ち足りた様子を見せていた。ほとんどの器具類は確かに彼に好意的な肖像画を造り出しはしなかったし、映し出すことにおいても決して全員が一致している訳でもなかった。めいめいの映像の造り方によって、あるものは彼を馬面にし、他のものは蟹面に、またあるものは相当見栄えのするものに、あるものはひどく不細工なものに仕立てたりしたので、そうした事実から考えると、それだけの数の違った種類の人々の映像のごとく多彩であった。しかし中央部にパイプを口にくわえ、肘のところにビールのジョッキを置いた一

人の人物が、すっかり寛いで座っており、同じテーブルに着席したクレメンシに、保護者のごとくうなずいて見せた映像を造り出した点においては全員が一致していたのである。

「おい、クレメンシ」とブリテンが言った、「一体今まで何をしていたんだ、それにあの手紙には何とあったんだ？」

クレメンシが手紙の内容を話してやると、彼はそれを情をこめて傾聴したのであった。情のこもった変化がベンジャミンの頭の先から爪の先まで駆け抜けた。彼はずっとふくらみと赤味を帯び、格段に明朗になり、どの点から見てもすばらしく陽気になった。それはまるで彼の顔がそれまでずっと固い結び目で縛られていて、今やっとそれがほどかれて皺が伸ばされたかのようにであった。

「スニチィ・クラッグズ法律事務所の仕事がもう一つ増えるな」パイプをくゆらせながら、彼が言った。「君と俺はもう一度証人をつとめることになるだろう、クレミィ！」

「ああ！」と彼の麗しい相棒が関節をねじ曲げるお気に入り仕草をしながら、答えた。「わたしだったらよかったのと思うわ、ブリテン！」

「何のことだね？」

「結婚するのがよ」とクレメンシが言った。

ベンジャミンは口からパイプを取り出して大笑いした。「なるほど！ 君ほど結婚におあつ

らえむきの女性もないからなあ！」彼は言った。「やれやれ！」クレメンシ自身も相手に劣らない程大笑いをして、その考えを大いに楽しんでいる様子だった。「そうねえ」彼女は同意した、「わたしほど結婚にびったしの女もないわねえ、そうでしょう？」

「君は決して結婚はしないよ」とブリテン氏が、パイプを口に戻しながら、言った。

「だけれどいつの日かすることもあるだろうとは思わない？」と、全く飾らない態度で、クレメンシが言った。

ブリテン氏は頭を振った。「それはないよ！」

「思ってくれるだけでいいの！」とクレメンシが言った。「ところで！——わたしが思うに、ブリテン、あんたは近々結婚するつもりね、そうでしょう？」

このような重大な問題に関して、出し抜けに浴びせられた質問に対しては、熟考が必要であった。煙を雲のごとく吐き出し、あたかも煙がその質問であって、様々な側面からそれを調べているかのごとく、頭を右へ左へ色々と動かして煙を観察した後、ブリテン氏ははっきりとは考えてはいないが——そう——だなあ——とどのつまりはそうすることになるだろうと思うと答えた。

「相手が誰であれ、その人は幸せだと思うわ！」とクレメンシが叫んだ。

「おお、もちろんそうだよ」とベンジャミンが言った、「間違いなしに」

「だけどその人はきつと掛け値なしに楽しい生活も送れなかったし、人好きのする夫にも恵まれなかったと思うわよ」と、テーブルの半分も占領するぐらい身体を乗り出して、記憶を辿るようにろうそくを見つめながら、クレメンシイが言った、「もしも——わたしが何もそこまで踏みこんでやったということではないのよ、全ては偶然的の成り行きなのだから——もしもわたしというものがいなかったとすれば。そうでしょう、ブリテン？」

「その通りだ」とブリテン氏が答えた、そしてこの時までには、喋るためにほんのわずしか口が開かないし、椅子の中でゆったりと不動の姿勢をとって、目だけを相手の方向へ、それも柔和にかつ威厳をもつて注ぐ、というゆとりが持てるすばらしく高級な段階にまで、彼はパイプの賞味を進めていたのであった。「おお！ 君には随分と世話になった、本当だよ、クレム」

「まあ、そういう風に思ってくれて本当に嬉しいわ！」とクレメンシイが言った。

同時に、目のみならず思考の方もろうそくの脂に集中して、突然それが薬としての効力を持つていることを思い出して、彼女は左肘にそれをたつぷりと塗りこんだのであった。

「俺はあれやこれや随分と研究を重ねてきたものだ」とブリテン氏が、賢人の風格をこめて、話を続けた、「いつも探求心を持っていたものでね。それに物事の普遍的な善悪に関する書物も随分と読んできた、何といっても人生のスタートが文学の世界だったからな」

「それ本当のこと！」とクレメンシィが感激して叫んだ。

「本当だ」とブリテン氏が言った、「ほとんど二年間棚の後ろに隠れて、本を万引きする者がいたらすぐに飛び出したものだ。その後は、コルセットと婦人服製造業者の使い走りになって、油布張りの籠に詐欺以外の何物でもない商品を入れて配達して歩いた——そのために俺の気質はひねくれてしまい人間性への信頼も歪んでしまった。そしてそれに引き続き、この屋敷で議論をいやという程聞いたために、ひねくれてますます磨きがかかったということだ。それでつまるところ、確かでかつ氣持のよい慰め手として、そして人生の快活な導き手としては、にくずくおろしにまざるものはない、という結論に至ったという訳だ」

クレメンシィが一つの提案をしかけたのを、彼は先手をとってさえぎった。

「一体——となった」彼は重々しく付け加えた、「指ぬきと」

「人につくせ、といったような教えでしょう、えー！」とクレメンシィが、自身の言葉に喜んで気分よく両腕を組み、肘をさすりながら、言った。「何と簡潔ですばらしい教えなんでしょう、そうでしょう？」

「よく分からない」とブリテン氏が言った、「それが立派な哲学と考えられるものであるかどうか。どうも疑いが残るんだ、だが長もちしているし、本物の哲学では必ずしも役に立たないすごいいがみ合いも防いでくれる」

「あんた自身がかつて行つた愚かな振る舞いを考えてみなさいよ！」とクレメンシイが言った。

「ああ！」とブリテン氏が言った。「だけど一番驚くことは、クレミイ、君のお蔭で、俺が蘇つて生きることになりそうだということなんだ。まったく訳の分からないことだ。君のお蔭で！ 君の頭には思考のかけらもないと思つてゐるからな」

クレメンシイは、全く腹を立てた様子もなく、頭を振つて、笑い、おのが身体を抱きしめて、言つた、「そうよ、わたしもそう思つてゐるのよ」

「俺は確信している」とブリテン氏が言つた。

「おお！ あんたのいう通りだと思つてわ」とクレメンシイが言つた。「わたしは知恵がある振りをするつもりはないし、欲しくもないわ」

ペンジャミンは口からパイプを離して、涙が顔をころがり落ちるまで笑いに笑つた。「君は何て子供なんだ、クレミイ！」彼は言いながら、頭を振つておのが冗談を心の底から満喫し、涙をぬぐつた。クレメンシイは、それに反論しようとする様子はまるでないまま、同じ仕草を行い、相手に負けず劣らず心の底から笑つたのであつた。

「君を好く氣持を抑えるなんてできっこない」とブリテン氏が言つた。「君は君なりにとってもいい女だ、握手してくれ、クレム。何が起ころうと、常に君には目を配るし、君の友人でゐる

つもりだ」

「本当にそうしてくれるの？」とクレメンシィが答えた。「嬉しいわ！ 御親切さま」

「いいとも、いいとも」とブリテン氏は、パイプを彼女に渡して灰をたたき出してもらいながら、言った。「俺は君の味方だ。おや！ 妙な物音がするぞ！」

「妙な物音！」とクレメンシィがおうむ返しに言った。

「外で足音がした。誰かが塀から飛び下りたような響きだった」とブリテンが言った。「皆さん寝ておられるんだらうな？」

「そうよ、皆さんもう寝てらっしゃるわ」と彼女が答えた。

「何か聞かなかったか？」

「何も」

二人とも聞き耳を立てたが、何も聞こえなかった。

「いいか」とベンジャミンは言つて、ランタンを手にした。「納得がいくように、寝る前に一回りしてこようと思う。戸口を照らしている間にドアを閉めてくれ、クレミィ」

クレメンシィはきびきびと応じたが、ドアを閉めながら、彼がすることは骨折り損に過ぎないことと、全ては彼の空想に過ぎないことなどを指摘した。ブリテン氏は「多分そうだろう」とは言ったが、それにもかかわらず、火かき棒で武装し、ランタンの灯を遠く近くぐるりと投

げかけながら、見回りに出て行つた。

「墓地のように静まりかえっているのに」と彼の姿を見送りながら、クレメンシイが言った。

「その上幽霊でも出そうだわ！」

台所を振り返って見た時、軽やかな姿が眼前に音もなく寄つて来たので、彼女は恐怖に震えて、「一体何者なの！」と叫んだ。

「しー、静かに！」とメアリアンが興奮したささやき声で言った、「おまえはいつもわたしを愛してくれた、そうでしょう？」

「あなたを愛したですって！ その通りでございます」

「その通りよね。それでおまえを信用してもいいわね、そうでしょう？ 信用できる人が、今はおまえしかないのよ」

「結構でございます」とクレメンシイが、心の底から言った。

「あそこで待つてゐる人がいるのよ」戸口を指さした、「今夜、是非とも会つて、話をしないといけない人が。マイケル・ウォーデン、後生だから、隠れていて！ まだ駄目よ！」

クレメンシイは、メアリアンの視線を追つて、黒い影が戸口に立たずんでいるのを見た時、驚き困惑して目を見張つた。

「すぐに見つかつてしまふわ」とメアリアンが言った。「まだ駄目よ！ 何処かに隠れて待つ

ていて。じきにわたしの方から行くから」

彼は手を振り、姿を消した。

「まだ寝ないでおくれ。ここでわたしを待っていて頂だい！」とメアリアンが、せかせかと言った。「一時間もおまえと話せる機会を待っていたのよ。おお、わたしの言う通りにしておくれ！」

彼女の当惑した手を熱心に握りしめ、両手でそれを胸に押し当ててから——懇願の熱情においては、言葉による最高に雄弁を振るった訴えよりも、効果的な仕草であった——メアリアンは退場して行った。入れ違いに一回りしてきたランタンの明かりが部屋をさつと照らした。

「全く静かで穏やかだ。人っ子一人いない。空想だったようだ」と、ドアの錠とかんぬき門を掛けながら、ブリテン氏が言った。「俺が豊かな想像力を持っていることの表れだな。おい！ 一体どうしたんだ？」

クレメンシイは、驚きと不安の影響を隠せないまま、椅子に座りこんで、青ざめ、全身を震わせていた。

「どうしたんですって！」彼女はおうむ返しに言って、不安げに両手と両肘をこすり、彼にだけは絶対に目を向けようとしなかった。「本当に御親切さま、ブリテン、本当に！ 物音に続けてランタンやその他の物を振り回しながら見回りに出て胆がつぶれる程人をおじけづか

せておいて、どうしたんだですって！ おお、本当に！」

「君がランタンで胆がつぶれる程おしけついたのであれば、クレミィ」と、落ち着き払って明かりを吹き消してそれを壁に掛けながら、ブリテン氏が言った、「この亡霊はすぐに退治できる。しかし君は普段は実に胆がすわっている」彼はここで話を中断して彼女を見つめた。「物音がして俺がランタンを取った時もそうだった。一体急に何を思い立ったんだ？ 思考のかけらではなからう、えー？」

だがクレメンシィが全くもって普段通りの態度でお休みと言って、すぐに寝に行くそぶりを見せてそわそわとし始めたので、リトル・ブリテンは、女の気紛れはどうも訳が分からないとおまけのセリフを吐いた後、お休みと言葉を返して、ろうそくを手にして眠たげに寝室へと足を運んで行った。

静寂を迎えると、メアリアンが舞い戻ってきた。

「ドアを開けて頂だい」彼女は言った、「そしてわたしが外で彼と話をしている間、おまえはわたしのすぐ傍にいて頂だい」

彼女の態度はおずおずとしていたけれども、クレメンシィが逆らうことができない断固として揺るぎない意図が発揮されていた。彼女はそとドアの門を外したが、錠を回す前に、ドアが開いたら外へ出ようと構えていたメアリアンに目を向けた。

その顔はそむけられてもおらず伏せられてもいなくて、若さと美しさに輝いて、彼女をまともに見つめていた。美しい彼女の幸福な家庭と大切な愛と、その家庭を惨めなものにして、最も愛しい存在たる彼女を破壊させてしまうかも知れないものとの間を区切っていた障壁が、後一步の所で崩れようとしているという純朴な気持が、クレメンシイの情深い心に鋭く襲いかかり、悲しみと同情の念であふれんばかりにしたので、どっと涙にくれながら、彼女はメアリアンの首に抱きついた。

「わたしは無学な人間ですが、お嬢さま」とクレメンシイが叫んだ、「本当に無学な人間ですが、これだけはしてはいけないことだということは分かります。あなたがこれから何をしようとしておられるかお考え下さい！」

「わたしは何度も何度も考えてきたの」と静かに、メアリアンが言った。

「もう一度」とクレメンシイが言い張った。「明日まで」メアリアンは頭を振った。

「アルフレッドさまのために」と一途な真剣さで、クレメンシイが言った。「あなたが一度は心の底から愛されたあの人のために！」

メアリアンは瞬時にして両手で顔を覆い、まるで引き裂かれたかのように「一度は！」と何度も繰り返した。

「わたしを行かせて下さい」と彼女をなだめながら、クレメンシイが言った。「お嬢さまがし

たいと思っておられることをわたしからあの人に申し上げます。今夜は敷居をまたがないで下さい。きつと良くないことが起こりますから。おお、ウォーデンさまがここへ姿を見せられたあの日が不幸の始まりだったのです！ あなたの善良なお父上と——お姉さまのことをお考え下さい」

「考えたわ」とメアリアンが、急に顔を起こして、言った。「わたしがしようとしていることがおまえには分かってないわ。是非とも、彼と話さなければいけないの。おまえは最高のそして真実の友人であるからこそあれこれと言ってくれたけれど、わたしはこの方法をとるしかないのよ。わたしと一緒に来てくれるの、クレメンシィ」メアリアンは彼女の思いやり深い顔に接吻した、「それともついて来てくれないの？」

悲しみいぶかりながら、クレメンシィは錠を回して、ドアを開けた。敷居の向こう側に横たわっている真つ暗で得体が知れない夜の中へ、メアリアンは彼女の手を握りしめて、急ぎ足で進んで行った。

暗闇の中で彼が合流してきて、二人は真剣にかつ長い間語り合っていた。クレメンシィの手をしっかりと握りしめていた手が、語られる言葉の強い感情を無意識のうちに一層強めて、震えたかと思うと、死んだように冷たくなり、かと思うと彼女の手をますます固く握りしめたりした。彼女達が引き返した時、彼は戸口までついてきて、そこで一瞬立ち止まって、メアリア

ンのもう一方の手をとり、彼の唇に押し当てた。それから音もなく消えて行った。

ドアの門が下ろされ再び錠も掛けられて、改めてメアリアンは父親の邸内に立った。非常に若かったにもかかわらず、邸内へ持ちこんだ秘密に打ちのめされることはなく、彼女は前にも述べたごとく名状し難い涙を通して輝きを放つあの表情を浮かべていた。

再び彼女は控え目な友に感謝し、そう言いながら、絶対的な信頼を寄せたのだった。おのが部屋に辿り着くと、彼女は両膝をついて、秘密で心がふさぎながら、祈りを捧げたのだ！

極めて静かな祈りから立ち上がると、眠っている愛しい姉の上にかがみこんで、その顔と微笑みを見つめた——悲しげではあったが、そして姉の額に接吻しながら、グレイスがどれ程彼女にとって母親であったかということ、娘としてどれ程彼女を愛してきたかということを呟いたのだ！

ベッドに横になった姉の無抵抗の腕を首の回りに引き寄せ——その腕は眠りについていて間できえ守るようにかつやさしく、自発的に、彼女の首から離れないように見えた——姉の開けられた口に、神様の祝福がありますように、とささやきかけたのだ！

彼女自身安らかな眠りに落ちていったのだ、清らかで琴線を揺さぶる声で、わたしは独りぼっちだ、みんなに忘れられてしまったと叫んだ夢見の状態を除いては。

その最も遅い歩みにおいてさえ、一ヶ月はすぐに経過して行く。あの夜とアルフレッドの帰国との間に介在するように定められていた一ヶ月は速足で幻のように過ぎ去って行った。

帰国の日を迎えた。まるで突風を受けて身を震わせているかのごとく、時々古い屋敷を震わせた強風が吹き荒れた冬の日であった。家庭を二重に家庭らしくする一日であった。炉隅に新しい喜びを付与する一日であった。暖炉を囲んで集まった人々の顔により一層赤みを帯びた輝きを与え、それぞれの炉辺の人達を、外界の吹き荒れる嵐に対抗する、より親密でより一層打ち解けた仲間に仕上げた一日であった。閉め出された夜、カーテンを引いた部屋、弾んだ顔、音楽、笑い、踊り、明かり、そして陽気な歓待などの準備をするには最高にふさわしい厳しい冬の日であった！

アルフレッド帰国の歓迎として博士はこれら全てのものを計画していたのである。彼の到着が夜になるのは間違いないから、その接近に合わせて、楽の音と踊りをにぎやかに響かせようと博士は言明した。彼の古い友人全員を集めたいし、アルフレッドがつき合い好いた人物が一人でも欠けて、それで彼が寂しい想いを持つということをしたくない。絶対に！ 全員の顔をそろえなければいけない！ とも言明した。

そこで客が招待され、楽士達も雇われ、テーブルが出され、活発なダンスのために床が空けられ、歓待するためあらゆる種類の料理がふんだんに用意された。クリスマス季節であり、彼

の目が母国の柊ひいらぎとその力強い緑から遠ざかっていたので、ダンス用の部屋に柊が飾りつけられたのであった。その赤い実が葉の間からのぞきながら、彼の帰国を歓迎する気持をきらりと光らせていた。

家族全員にとって多忙な一日であり、静かに至る所で中心を占め、全ての準備の弾んだ雰囲気象徴していたグレイスにとっては、他の誰よりもとりわけ多忙な一日であった。その日何度も(あつという間に過ぎていった一ヶ月においても幾度となくしていたのであるが)、クレメンシーは不安そうに、そしてほとんど恐れおののきながら、メアリアンの方へつい目が行ってしまった。普段以上に彼女が青ざめているように見てとれたが、かつてなかった程彼女の顔を麗しいものにしていた美しい安らぎも見てとれたのである。

夜が来て彼女が身仕度をして、グレイスが誇りをもって作り出した花冠を頭に頂くと——その造花は選んだグレイスが憶えていた通りに、アルフレッドが気に入っていたものなのだが——思いに沈み、悲しげな、それでいて極めて内省的で気高く、かつ感動を引き起こす例の表情が、百倍も輝きを増して、またしても額に現れ出ていたのである。

「この美しい頭に載せる次の花冠は、花嫁の花冠よ」とグレイスが言った、「そうでないとなしは偽りの予言者になってしまうわ」

妹は微笑み、両腕で姉を抱きしめた。

「もう少しいて、グレイス。まだわたしの傍にいてよ。花嫁の花冠以外にはわたしが何も望んでいないと思ってるの？」

彼女は妹の内面へは氣を配っていなかった。彼女が思っていたのは妹の顔であり、それで情愛をこめて、目をそちらへじっと注いでいたのであった。

「わたしとしては」とグレイスが言った、「ありったけの力を振るつたのよ。あなたも素敵よ。わたしの目にあなたがこれ程美しく映ったのは始めてだわ」

「こんなに幸せなのも始めてよ」妹が答えた。

「そうでしょう、だけでもっと大きな幸せが待っているわ。ここに負けない位陽気で明るい家庭に」とグレイスが言った、「アルフレッドと彼の若奥さんがじきに住み続けることになるのよ」

妹が再び微笑んだ。「グレイス、それはあなたが思い描くところの幸福な家庭よ。あなたの両眼にそれを見ることができてよ。それは幸せな家庭になるにきまつていると思うわ。それを知っていてどんなに嬉しいか」

「ところで」と、せかせかとして入ってきた博士が叫んだ。「アルフレッドを迎える準備は全て整ったんだろうな？ 彼は深更まで——午後十一時ぐらいまで——絶対に帰ってこないのだから、彼の到着まで陽氣にできる時間はたつぷりとある訳だ。彼も緊張がほぐれない状態の我々を見

たくはなからう。暖炉の火をもっと大きくしろ、ブリテン！ 柵に照り映えて再びウィンクするように火をおこせ。全くもって馬鹿げた世の中だ、おねこちゃん。真の恋人達とかその他のもの——全て馬鹿げている。だが我々も他の恋人達ともども馬鹿になりきって、真の恋人たるアルフレッドを滅茶苦茶に歓迎するでしょう。絶対にな！」と娘達を自慢そうに見ながら、老博士が言った、「今夜は他の馬鹿げた事柄に紛れて、どうも頭がすっきりしないが、私が二人の美しい娘の父親であることだけはよく分かつている」

「その娘の一人がこれまでにしたこと、或いはこれからするかも知れないことで———すうかも知れないことで、お父さま——あなたに苦痛や悲しみをもたらしたとしても、その娘を許して下さるでしょう」とメアリアンが言った、「彼女を許して下さい。胸が一杯でふさがっていますもの。許すと言って下さい。これからも許すと言って下さい。これからも常に愛を分かち与えて、そして——」後は言葉にならなかった、というのも彼女が顔を父親の肩に押し隠してしまったからである。

「ちっ、ちっ、ちっ」と博士がやさしく言った。「許してくれだ！ 一体何を許すのだ？ 我々の真の恋人達が帰国してこのように我々を混乱させるなら、近しい間柄になる訳にはいかない。急ぎ使いを出して途中で彼等の帰国を停止させて、迎えの準備がきちんと整うまで、日に一、二マイルの前進しかさせないようにすべきだな。接吻しておくれ、おねこちゃん。許し



てくれたと！ おまえは何て馬鹿な娘なんだ！ おまえが素直にする代わりに、一日に五十回も私を悩まし手こずらせたとしても、何もかも許してやるつもりだから、そんな顔だけはしないでくれ。もう一度接吻しておくれ。そうだ！ 先のことを考えても過去にさかのぼっても――私達の間には貸し借りなんて全くといってよい程ないのだから。火をどんどん燃やせ！ この寒い十二月の夜にやって来る人達を凍えさせようというのか！ 明るく暖かくして、陽気に騒ごう、さもないとおまえ達を許さないぞ！」

かくのごとく陽気に老紳士は喋りまくったのだ！ そして火がどんどん燃やされ、明かりがきらめく中を、招待された人々が到着して、活気のある会話のざわめきが始まり、早くも楽しく陽気な興奮が屋敷中の至る所に湧き起こったのである。

群れをなすがごとく到着する人々の数は増すばかりであった。メアリアンに注がれる目が明るくきらめき、彼女にアルフレッドの帰国をおめでとうと言う唇は微笑んでいた。賢明な母親達は扇を使いながら彼女が静かに日々反復される家事をするには若すぎるし着実性を欠く面が必要ればよいがと言いつつ合点した。無分別な父親連は彼女の美しさを持ち上げすぎて不興を買った娘達は彼女を妬んだ。息子達はアルフレッドを妬んだ。沢山の恋人達がこのパーティで点を稼いだ。全員が興味津々の興奮した、そして期待でわくわくとした状態にあった。

クラッグズ夫妻は腕を組んでやって来たが、スニチィ夫人は一人だけで到着した。「彼はど

うしたのか？」と博士が尋ねた。

紛れもなくクラッグズさんはその理由を御存知のようだが、わたしは何も聞かされていないと答えた時、スニチィ夫人の帽子の極楽鳥の羽根がまるで生き返ったかのごとく震えた。

「あの汚らわしい事務所にいるのね」とクラッグズ夫人が言った。

「燃えてしまったらよいのと思うわ」とスニチィ夫人が言った。

「彼は——彼は——ちょっとした用件のために私の相棒はこんな遅い時間まで残る羽目になってしまったのだが」と言いながら、クラッグズ氏は不安げに周りを見回した。

「おーお！ 用件。その言葉を聞かさないで頂だい！」とスニチィ夫人が言った。

「わたし達にはその言葉が意味するものは分かっているのよ」とクラッグズ夫人が言った。だが二人とも何も知っていないというのが、恐らくスニチィ夫人の極楽鳥の羽根がものすごく震える理由であり、そしてクラッグズ夫人の耳輪の垂れ飾りが小さな鐘のごとく鳴った理由であつたのであろう。

「あなたはよくも抜け出せたものねえ」とクラッグズ夫人が言った。

「クラッグズさんは運が強いよ、きつとそうよ！」とスニチィ夫人が言った。

「あの事務所に二人ともうつつを抜かしているのだから」とクラッグズ夫人が言った。

「事務所を持っている人はいやしくも結婚などすべきではないのよ」とスニチィ夫人が言った。

それから、自分の厳しい視線がクラッグズの魂を射抜いたし、この男もそれを承知しているわ、とスニチィ夫人は内心呟いた。一方クラッグズ夫人も夫に対して、「彼のスニチィズ」がひそかに彼を欺いており、彼がそれに気付くのは手遅れになってからだろう、と言明した。

依然として、クラッグズ氏は、それらの言葉はほとんど無視して、不安げに見回していたが、グレイスの姿が目に入ると、すぐにその前に足を運んだのであった。

「今晚わ」とクラッグズが言った。「とてもお美しいですなあ。貴女の——貴女のお妹さんは、メアリアンさんは——」

「彼女はとても元気ですよ、クラッグズさん」

「そうですか——私は——彼女は邸内におられますか？」とクラッグズが尋ねた。

「邸内！ 向こうにいるのがお分かりになりませんか？」と踊ろうとしているのが？」

クラッグズ氏ははつきりと見極めようとして目鏡を掛けて、少しの間、彼女を見つめ、咳をした。その後得心がいった様子で、目鏡をケースに収めてポケットにしまった。

その時演奏が始まって、舞踏会が開幕となった。あたかも真の仲間意識を発揮して、自ら踊りを始めるかのごとく、暖炉の輝く炎がパチパチと音を立ててきらめき、盛んに燃えたり衰えたりした。時には、演奏に参加するかのごとくごう音を立てて燃え上がった。時には、その古びた部屋の目でもあるかのごとくきらりと晴れやかに光った。時には、万事心得ている長老の

ごとく、隅でささやき合っている若者達にウィンクをしてみせたりもした。時には柵の枝と戯れ、発作的にその葉を照らし出して、再びそれが寒い冬の夜、風を受けて震えているかのごとく見せたりもした。時には、炎の温和な気分は手に負えない常軌を逸するものとなって、部屋のかきめく足元へ、大きな音とともに、無邪気に小さな火花を雨のごとく跳ね飛ばし、狂ったもののごとく、勝ち誇って大きな古い煙突を躍動し駆け昇って行ったりもしたのである。

二回目のダンスが終わりに近ずいた時、スニチィ氏がそれを見つめていた相棒の服をそつつかんだ。

クラッグズ氏は、彼の相棒が亡霊であるかのように、驚いて飛び上がった。

「彼は行ったのか？」彼は尋ねた。

「しー、静かに！ 彼はずっと私といたのだ」とスニチィが言った、「三時間以上も、彼は全てのものを調べ、我々が彼のために調べた手筈を検討し、本当に気難しかった。彼は——ふん！」

ダンスが終った。メアリアンが話しているスニチィ氏のすぐ前を通り過ぎた。彼女は彼にも、その相棒にも目をくれないで、肩越しに遠くにいる姉を見つめながら、ゆっくりと人混みの中を進んで、見えなくなった。

「ほらね！ 万事支障なく運んでいる」とクラッグズ氏が言った。「彼は例の駆け落ちの件を

蒸し返しはしなかったんだろう？」

「一言も持ち出さなかった」

「彼は本当に行ったのか？ 間違ひなく出立したのか？」

「約束通り出立した。彼はあの貝殻のごとき小さな舟で流れに乗って河を下って、この闇の中を海に向かって進んでいる！——全く向こう見ずな男だ——風を受けながら。これ程孤独な旅立ちはないよ。まあこんなになることもあるよ。彼の言うところによると、午後十一時に潮がさしてくるんだそうだ——丁度今頃だな。彼のこと片付いて嬉しいよ」スニチ氏はほとりと共に不安の影がさしていた額を拭った。

「ところでどう思うかね——」とクラッグズ氏が言った。

「しー、静かに！」と彼の用心深い相棒が、前方をじつと見つめながら答えた。「君の言いたいことは分かっている。人名を出して内緒話をしているように思われないようにしてくれ。どう考えたらよいのか分からない。実を言うと、今となってはどうだって構わない。それがほつとすることだ。彼がうぬぼれて思い違いをしていたのではないかと思う。多分その若い御婦人が少しは氣を持たせる振る舞いをしたのだろう。形跡からみてそちらの側面の方がより強いような氣がする。アルフレッド君はまだ到着してないのだな？」

「まだだ」とクラッグズが言った。「今か今かとみんなが待ち受けているのだがね」

「それはいい」スニチィ氏は再び額を拭いた。「大いに安堵できるな。二人で組むようになって以来これ程神経を使つたのは初めてだ。今夜これから楽しむつもりだ、クラッグズ君」

彼がこのセリフを口にした時、クラッグズ夫人とスニチィ夫人が二人に合流した。極楽鳥は極度の震えの状態にあり、小さな鐘ものすごく大きく響き渡っていた。

「みんなから散々あれこれと言われたのよ、あなた」とスニチィ夫人が言った。「事務所はさぞかし満足したことだろうと思うわ」

「何に満足したというのかね、おまえ？」とスニチィ氏が尋ねた。

「一人のか弱い女性を嘲笑と噂のさらし者にしたことをよ」と彼の妻が答えた。「それが事務所の手口というものよ、絶対に、そうよ」

「わたしは実際」とクラッグズ夫人が言った、「随分長い間事務所を家庭と対立する全てのものと結びつけることを習慣としてきたので、それがわたしの平和の公然たる敵だと分かつて嬉しいわ。いずれにしても、事務所にも正直なところはあるけど」

「ねえ、おまえ」とクラッグズ氏が言い張った、「おまえの意見はありがたいが、事務所がおまえの平和の敵だなんて私は一度も思ったことはない」

「そうよ」とクラッグズ夫人が、小さな鐘をとどろかせながら、言った。「ええそうよ、まったく。率直に言つて、あなたはちっとも事務所にふさわしくはないのよ」

「今夜この舞踏会へ来られなかったことについて言うと」とスニチィ氏が、腕を妻に貸しながら、言った、「私は楽しみを失ってしまった訳だ、だが、クラッグズ君が知っているように――」

スニチィ夫人は夫の言葉を突然さえぎって彼を離れた所へ引つ張って行つて、あの顔を見るようにと求めた。彼女の頼みを聞き入れてあの男を見るようにと！

「どの男をかね、おまえ？」とスニチィ氏が言った。

「あなたの選ばれたお仲間よ。わたしはあなたの仲間でも何でもないからね、スニチィさん」

「いや、いや、おまえこそ、そうだよ」と夫が口をはさんだ。

「いいえ、わたしは違います」と厳しい笑みを浮かべてスニチィ夫人が言った。「わたしはわたしの立場を心得ています。あなたの選ばれたお仲間を御覧になったらどうですか、スニチィさん。あなたの身元保証人であり、あなたの秘密の保管人であり、あなたが信頼しているあの男を。つまり、あなたの分身をですよう？」

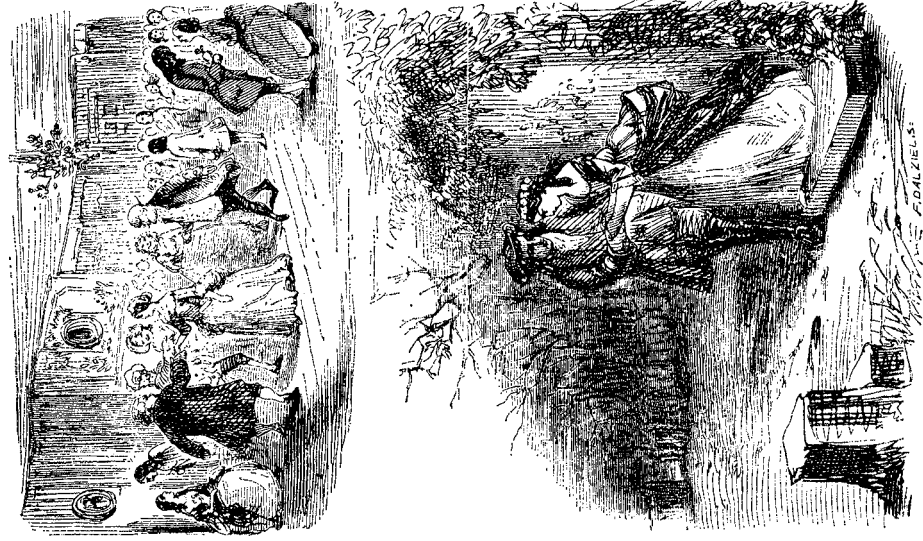
自身とクラッグズを一体化させて考えるのが習慣となつているので、スニチィ氏は思わずそちらの方向へ目をやってしまった。

「あなたが今夜あの男をじつと見つめて」とスニチィ夫人が言った、「自分がだまされ、欺か

れ、彼の手練手管の犠牲にされ、説明ができないしわたしの警句が何の役にも立たない不可解な魔力によつて這いつくばつて彼の意志のままになっているという事実が分からないとすれば、わたしとして言えることは——あなたが哀れだということよ」

まさに同じ時クラッグズ夫人もスニチィ氏に関する問題で熱弁を振るつていた。クラッグズが本場の立場を感じできない程、彼のスニチィズに盲目になることがあり得るのか？ 彼のスニチィズが部屋へ入つて来た時、あの男の冷淡さ、狡猾さ、裏切りなどをはつきりと見抜けなかったと言ひ張るのか？ 額を拭い周りをこっそりとうかがっている動作そのものが、明かりに耐えられない何かが彼の大事なスニチィズの良心に（良心があるとすればのことだが）のしかかっている事実を示してはいないなどと、彼女に言うつもりか？ 彼のスニチィズ以外の一体誰が押し込み強盗のごとくクリスマスを祝う舞踏会にやつて来るだろうか？——ところで、スニチィは玄関から極めて穏やかに入つて来たので、押し込み強盗をはつきりと指し示す実例とは到底言えなかつたのではあるが。その上万難をはいして、全ての事実と理性と経験に逆らつて、彼のスニチィズが正当化され得ると、（ほとんど真夜中にさしかかつていたので）真昼になつても依然として主張するのか、などと彼女は言い立てたのであった。

スニチィもクラッグズもこのようにして始まつた流れをあからさまにはせき止めようとせず、二人ともその力が衰えるまで、流れに乗つて静かに運ばれることを甘んじて受け入れた。これ



はカントリーダンスを始めようとみんなが動いたのとはほ時を同じくして持ち上がった。それでスニチィ氏はクラッグズ夫人にパートナーとして組んでくれるよう申しこみ、クラッグズ氏もスニチィ夫人に丁寧申しこんだのであった。「どうして他の人に申しこまないの？」とか「断られた方が嬉しいんでしょ」とか「事務所の外で踊れるのかしら」(だが今はおどけた口調で)といったような軽い逃げを打った後、それぞれの夫人は寛大にも申しこみを受け入れて、踊りの位置についた。

実際、そのようにすること、晩さん会と夕食会で同様の方法で二人ずつ組むことは、彼等の昔からの習慣であつた。というのも彼等は卓越した友人同士であり、打ち解けた親交を結ぶ關係にあつたからである。執行官を絶えず走り回らせるジョン・ドウとリチャード・ロウ(一八五二
れるまで、訴訟、取引などで、原告と被告につけた仮想名。)が、二人の夫にとって公認の作り話であつたごとく、多分虚偽のクラッグズと邪惡なスニチィというのも、二人の妻にとって公認の作り話であつたのであろう。或いは、多分夫人達は、完全に蚊帳かやの外に置かれるよりも、夫の仕事のこれら二つの分担を設定して、彼女等自身で引き受けていたのであろう。しかし夫達と同じくそれぞれの妻もおのが仕事を真面目にかつ着実に遂行したと、彼女の賞讃に値する尽力がなければ、事務所が成功した立派な存在として維持して行くことはほとんど不可能であると思つていたことは、紛れもない事実である。

だが今極楽鳥が部屋の中央を羽ばたいているのが見受けられたし、小さな鐘も飛び跳ねて音を響かせながら踊り始めたのである。博士の血色の良い顔が、色つやが良くて表情も豊かな独楽のように、くるくると旋回した。そして息を切らしたクラッグズ氏は、カントリードンスは、この世の他のものと同様、「余りにも手輕に」推移してきたのではないかという疑念を早くも抱き始めていたし、スニチ氏は、身輕に足を交差させて飛び跳ねては自身とクラッグズのために踊りまくった、しかも六回も繰り返すというおまけ付きで。

その上、更に、舞踊会がまき起こした元氣の良い風の加勢を受けて、暖炉の火が新たな勇氣を得てあかあかと大きく燃え上がった。それは舞踊会の守り神であり、遍在していた。それは人々の目の中で輝き、乙女達の雪のような首の寶石の中できらめき、おどけて彼女等にささやきかけるかのごとく耳元できらりと光り、彼女等の腰のあたりで閃光を放ち、床で揺らめいて乙女達の足のためにばら色にし、赤い輝きで彼女等の晴れやかな顔を引き立てるために天井で花と化し、そして燃え上がってクラッグズ夫人の小さな鐘樓全体に当たる照明となったのである。

その上、更に、それを煽り立てた元氣の良い風が、音楽が速くなり舞踏が新たな活力で進行するにつれて穏やかさを欠くようになり、一陣の風と化して、柊の葉と実を木々でしばしば行ったごとく壁のところで踊らせ、そしてまるで善良で生身の踊りに興じている人々を手本とし

て、目に見えない妖精の一団が彼等の後ろでぐるぐる回っているかのごとく、部屋の中を吹き抜けたのである。その上、更に、旋回するにつれて博士の顔の目鼻立ちは全く区別がつかなくなり、今や十二羽の極楽鳥が発作的に飛び上がったかのようになり、一千個の小さな鐘が一斉に鳴り出した。今やひるがえる裾の集団が小さな嵐にかき乱されたのである、その時音楽が力尽き、舞踏会が幕となった。

博士ははてり息もできない程だったけれども、それはアルフレッドの帰国を待ち望む彼の焦燥感をより一層募らせただけであつた。

「何か見えるか、ブリテン？ 何か聞こえるか？」

「真っ暗でよく分かりません。屋敷の中が騒がしすぎて外の音が聞きとれません」

「その通り！ それだけにぎやかに彼を迎えられるというものだ。今何時だ？」

「丁度十二時です。まもなくお着きのはずです」

「暖炉の火をおこして、丸太をくべろ」と博士が言った。「彼を歓迎する炎を夜空に映し出して彼に見せろ——そうだ！——近づいてくる彼にだ！」

彼は炎を見た——確かに！ 角を曲がって古びた教会の傍を通った時、彼は馬車から明かりを認めた。それが輝き出ている部屋も分かった。明かりと彼との間の古木の枯れ枝も認めた。それらの枝の一つが夏にはメリアンの部屋の窓辺で心地よくさらさらと音を立てることも彼

は知っていた。

涙が彼の目にあふれた。心臓が余りにも激しく動悸を打ったので彼はおのが幸福にほとんど耐えられない程であった。どれ程ひんばんに彼はこの時のことを思い浮かべたことか——ありとあらゆる状況下にこれを想い描いたことか——巡って来ないのではないかと恐れたことか——願望し、希求したことか——異国で！

またしても明かりだ！ くつきりと赤々と燃えて、彼を歓迎し、早く帰って来いと呼びかけているのだ、と分かった。彼は手で合図を送り、帽子を振って、その明かりが彼を待ち受ける人達であり、彼等が彼を認め声を聞くことができるかのように、歓声をあげて、意気揚々と、ぬかるみの中を彼等めがけて突進した。

とまれ！ 彼は博士をよく知っていたので、彼を迎えるために博士が仕組んだ計画を悟った。待ち受けている人達に不意打ちを食わせたくはない。だが、そうとはいえ、徒歩で前進すれば不意を突くことができるだろう。果樹園の門が開いていれば、そこから中へ入れるだろう。開いてなかったら、昔よくしたように、塀を登れば簡単だ。そして瞬時にして待ち受けている人達の中へ飛びこめるだろう、と彼は思った。

彼は馬車から降りて、馭者に数分間とどまって、それからゆっくりと動けと指示して——それさえ興奮している彼にとっては容易ではなかったのだが——驚く程の速さで進んで門を試し、

塀を登って、庭に飛び降り、なつかしい果樹園に息を切らして立った。

木々には霜がおりていて、雲間隠れの淡い月光を受けて、萎れた花環のように小振りの枝々を包んでいた。彼が屋敷めざしてそと進んで行った時、踏みつけられた枯れ葉が鋭い音を立てた。冬の夜の寂しさが地表に、空中にもの悲しくたれこめていた。しかし、暖炉で燃えさかっている赤い火が窓から彼めざして快活に進んで来た。人影が窓をしきりに行ったり来たりした。人声のざわめきがやさしく彼の耳に触れた。

彼女の声を求めて聞き耳を立て、そと進みながら、それを他の声から区別しようと努め、確かに聞きとつたと半ば信じた程であった。そしてほとんど玄関のドアのところまで迫り着いた、すると突然ドアが開けられて、人影が飛び出してきて彼と鉢合わせになった。締めつけられたような悲鳴をあげながらその人影は反射的にたじろいだ。

「クレメンシー」彼は言った、「僕だよ？」

「中へ入らないで下さい！」彼女は答え、彼を押し戻した。「立ち去って下さい。その理由は尋ねないで。中へは入らないで下さい」

「一体どうしたんだ？」彼は叫んだ。

「わたしには分かりません。思っただけでも恐ろしくて。立ち去って下さい。言う通りにして！」

邸内が突然騒がしくなった。彼女は両耳を手でふさいだ。どんなに手でふさいでも抑えることと不可能なものすごい金切声があり、グレイスが——顔つきも物腰も狂乱状態で——戸口から駆け出して来た。

「グレイス！」彼は両腕で彼女を捕えた。「何事があったんだ！　メアリアンが死んだのか！」彼女は、彼の顔を確認しようとするかのごとく、身体を引き離し、彼の足元にぱったりと倒れた。

多勢の人影が邸内から出て来て二人を囲んだ。その中に手に一枚の紙を持った彼女の父親がいた。

「何事があったんだ！」とアルフレッドは叫んで、卒倒した娘の傍にひざまづきながら、両手で頭髮を握りしめ、苦悶にあえいで顔から顔を見つめた。「誰も目がないのか？　誰も声がないのか？　誰も僕を知らないのか？　事情を説明してくれる人が一人もいないのか？」

みんなの間で小さなざわめきが起こった。「彼女がいなくなった」

「いなくなった！」彼はおうむ返しに言った。

「姿を消してしまったのだ、アルフレッド！」と博士が、声を詰まらせ、両手で顔を覆いながら、言った。「家と家族を捨てて行ってしまった。よりによって今夜に！　素直な気持から出た道に外れた訳ではない選択を行ったことを書き残し——許してほしいと懇願し——自分の

ことを忘れないでほしいと訴えて——行ってしまった」

「一体誰と？ 何処へ？」

追跡をしようとするかのごとく、彼は飛び上がったが、彼を通そうとしてみんなが道を開くと、狂ったように皆の顔を見回し、よろめきながら後ずさりして、くずおれてそれまでの姿勢に戻って、グレイスの冷たい手を握りしめたのであった。

あわてふためいての右往左往、混乱、騒音、無秩序、無意味な振る舞いが現出した。それぞれが道路の方へ散って行ったり、馬に乗ったり、明かりを手にとったりなどし、そして言葉を交わして、追跡できる痕跡も足跡も残ってはいないと言いつたりした者もいた。慰めるつもりで、親切に彼の傍に寄った者もいたし、グレイスを邸内へ移さなければいけないのに、彼がその邪魔をしていると忠告の言葉を掛ける者もいた。彼はどの言葉にも耳を貸さず、動こうともしなかった。

雪がしきりに降ってきた。彼は一瞬空を見上げて、無惨にも崩れたおのが希望の上にまき散らされるそれらの白い灰は、実に似つかわしいと思った。彼はどんどん白くなって行く地面を見渡して、メアリ안의足跡が残される片端から、隠され覆い尽くされてしまおうし、彼女の記憶でさえ消し去られてしまおうと思った。だが彼は激しく降ってくる雪のことは全く感じないまま身動き一つしなかったのである。

第三部

例の帰国の夜以来六年が経過していた。暖かい秋の日の激しい雨が降った午後であった。太陽が突然雲間から現れた。緑なす一つの場所に陽気に輝きながらさっと射しこんできた光を受けた古戦場が、それに応えて快くきらめき、まるで喜びにあふれたかがり火の一つが点火されると、それに千ものかがり火が答えたごとく、辺り一帯にきらめきが広がって行ったのであった。

光を受けて燃えている古戦場と、天界の存在のように進んでは万物を輝きで包む豊かなる感化力の美しきときたら！ それまでにくすんだ塊に過ぎなかった森が、黄、緑、茶、赤といった多彩な色合いを帯び、それぞれの葉で滴が光り、きらめきながらたたっている、多様な形状の木々となった。輝きに映えている緑したたる牧草地は、ほんの一分前までは盲目であり、今輝く空を見上げる視覚を持ち得たかのごとくであった。小麦畑、生垣をなす灌木かんぼくの列、桐、農家、屋根の集団、教会の尖塔、流れ、水車場など全てのものが微笑みながら陰気な暗闇から飛び出して来た。鳥達がやさしくさえずり、花がうなだれていた頭を起こし、新鮮な香りが活気のみなぎった地表から立ち昇った。天空の青い広がりはとどまるところを知らず、すでに夕陽の光が逃げ遅れた不機嫌な雲の群れを貫いて致命傷を負わせていた。そして地上と天空を飾る全ての色彩の精たる虹が、誇らかな栄光に包まれてそのアーチを掛け渡していた。

こうした時、そのどっしりした幹を囲む閑人用ひまじんの快適な座席を備えた巨大な櫨かじの木の居心地

の良い蔭にある一軒の路傍の宿屋が、客商売の家としては当然の姿として、旅行者に陽気さ一杯の正面を向けて、氣持よくもてなすことを無言のうちにも深く保証する態度で旅行者を誘っていた。金色の文字が光を受けてウィンクして見せている櫛の木に掛けられた赤ら顔の看板が、緑の葉の間から、陽気な顔のごとく、通りかかった者に流し目を送り、おいしい食べ物を出しますよと約束していた。澄んだ新鮮な水で一杯の飼い葉桶と、香り高い干し草の落ち穂が点在しているその下の地面は、往來する全ての馬の耳をびんと立たせた。下の階の部屋の深紅のカーテンと、上の階の小さな寝室の純白のカーテンは、風にそよぎながら、入っておいでよ！と誘っていた。鮮やかな緑色の雨戸に、ビールと真正のワインと上等のベッドを宣伝している金色の文字と、縁からビールが泡立ってあふれ出ている茶色のジョッキが描かれていた。窓辺の明るい赤色の植木鉢の花が、家の白い外観を背景にして鮮やかに浮かび上がっていた。戸口の暗がりに光の筋が射しこみ、瓶とジョッキの表面に当たってそれた。

戸口にはまた、主人のびったりと嵌まった姿が現れた。小男ではあったけれども、彼は堂々として恰幅がよく、両手をポケットに入れ、両足を開いて立っている姿には、地下室の酒については何ら不安を抱いていないことと——威張って反り返るにしては余りにも静かで穏やかな感じだが——宿屋の運営全般にゆったりと自信を抱えていることが十分に示されていたからである。あらゆるものからしたたり落ちるあがったばかりの雨の無数の滴も彼の姿の良き引き

立て役となっていた。彼の周りのものは全てみずみずしかった。きちんと手入れの行き届いた庭の柵越しにこちらを見つめている頭でつかちのダリアは、許容量一杯まで水滴を飲みこんで——多分それを少し超過して飲みこんでいたのだろう——酔っ払ってしまっている風であった。だがノバラ、バラ、ニオイアラセイトウ、窓辺の鉢植えの花、榆の古木の葉などは、お互いに有益な分だけ飲んで美質を伸ばすのに役立たせている節度をもった付き合いからくる喜びに満ちた状態にあった。周りの地面に水滴をまき散らしながら、それらの花や葉は清らかで晴れやかな笑いであふれているように見え、それが照らし出した所に良き力を振るって、間断なく降る雨でも滅多に手が届かなくなっておざりにされた隅っこを慰め、全てのものを癒したのである。

この宿屋は、建てられた時、珍しい看板を掲げた。「にくずくおろし亭」という名前の。同じ榆の木の上部、同じ血色の良い看板に、同じ金色の文字で、（にくずくおろしという）なじみ深い言葉の下に、「ベンジャミン・ブリテン経営」なる言葉が記されていた。

改めて眺め、そしてその顔をより丁寧に見つめ直してみても、戸口に立っているのが他ならぬベンジャミン・ブリテンその人であることに皆さん方も気付かれたことと思う——この六年の間にかなり変貌した、しかもより良い方向へと変貌して本当に感じの良い宿屋の主人になったところの。

「家内は」とブリテン氏は、道路に沿って目をやりながら、言った、「帰りが遅いなあ。お茶

の時間なのに」

ブリテン夫人の影も形も見えないので、彼はゆつたりと道路の方へ歩を運んで宿屋を見上げ、大いに悦に入った。「まさに宿屋として様になっている」とベンジャミンが言った、「経営していなければ、俺だって宿泊したいくらいだ」

それから、彼は庭の柵の方へ歩を運んで、ダリアへ目をやった。ダリアの方は、力なく眠たげに頭をうなだれて、彼を見つめたと思ったら、重い水滴がしたり落ちた途端に、ひょいと頭を起こしたのであった。

「おまえ達の世話は絶対にしなければいけない」とベンジャミンが言った。「念のため、家内に言うのを忘れないようにメモしておこう。それにしても遅いなあ！」

ブリテン氏の連れ合^{ベター・ヘッ}いは本当に彼の良き半身であるように見えたので、彼の生身の半分は彼女がいないとすっかり難破し無力と化してしまふのであった。

「そんなに沢山用事があつたはずはないのに」とベンが言った。「市場の後は二、三のちょっとした用事があつただけで、こんなに手間取るはずはないのに。おお！ やつと帰つて来たな！」

男の子が御している馬車が、道をがたとと進んでくるのが見えて来た。膝に抱えた籠の上でむぎ出しの両腕を組み合わせ、他の幾つかの籠と包みを周りに積み重ね馬車の動きに合わせ

て左右に揺れるにつれて、顔に間違いようのない善良さが輝き、物腰に満ち足りた不器用さがあふれている一人の丸々として主婦らしく落ち着いた女性が、大きなびしょぬれの傘を背後で乾かすために広げて、椅子に座って馬車に乗っていて、それには遠目にも昔の面影が宿っていたのである。次第に接近してくるにつれて、この昔の面影が薄れて行くということはなかった。馬車がにくすくおろし亭の戸口のところでとまると、一對の靴が降りてきて、ブリテン氏が広げた両腕の間をすばやく通り抜けて、しっかりと重みをこめて戸口におり立ったのであった、この靴がクレメンシー・ニューカム以外の誰かに属していることはあり得なかった。

実際間違いない彼女に属していて、彼女はこれを履いて立っていたのである。その上彼女はばら色の気持のよい感じの女性となっていた、即ち昔同様つややかな顔を石鹼の香りで包んでいたが、肘の方は今では傷一つなく、彼女の境遇の好転と共にえくぼが生ずるまでになっていた。

「遅いじゃないか、クレミー！」とブリテン氏が言った。

「だって、ベン、沢山の用事を抱えていたのよ！」彼女は答え、全ての包みと籠が屋内へ無事に運びこまれて行くのを忙しく目で追った。「八个、九个、十个——十一個めはどこ？ おお！ わたしが持つてるのが十一個めだわ！ 全部ちゃんとあるわ。馬を馬屋に入れて休ませなさい、ハリー、そしてもしもまた咳をするようなら今晚は懣と挽き割りをお湯で溶いたもの

を彼にやって頂だい。八個、九個、十個、あら、十一個めはどこ？ おお、忘れていたわ、全部ちゃんとあるわ。子供達はもうしてゐるの、ベン？」

「元氣にしていたよ、クレミィ、元氣にしていた」

「本当にかわいい子供達だわ！」とブリテン夫人が言つて、帽子をとつて丸々とした顔を見せ（というのも彼女と夫とはこの時には酒場の中に入つていたので）、籠を置いて自由になった両手で髪をきれいに撫でつけた。「キスをして頂だい、あなた！」

ブリテン氏は即座に応じた。

「わたし思うの」と言つて、ブリテン夫人はポケットに手を突っこんで薄い本としわくちやの書類の山のごとくかさばつた束、つまりまさに群れをなす大の耳（*big ears*）には本のページの隅の折れ曲がりという意味があり、それに掛けてユーモラスに言つた表現。）を引つ張り出した、「用事は全部済ませたと。勘定は全部清算したし——蕪は売つたし——ビールの勘定もチェックして支払つたし——刻み煙草用パイプは注文したしで——十七ポンド四シリングほど銀行に払いこんで——娘のクレムのヒースフィールド先生からの治療費の書き付け——何を言つてゐるのか分かるでしょう——ヒースフィールド先生は今度も一銭もお受け取りにならないと思うわ、ベン」

「俺もそう思う」とベンが答えた。

「そうなのよ。ベン、どれ程大勢の子供を抱えるようになるうと、あんたから半ペニーだつ

て受け取るつもりはないとおっしゃるの。あんたが二十人の子供を抱えても同じことよ」

ブリテン氏の顔に真剣な表情が浮かび、彼は壁を熱心に見つめた。

「御親切ななさり方なこと？」とクレメンシイが言った。

「とてもな」とブリテン氏が答えた。「どうあつてもつけこみたくはない類の親切だ」

「そうよ」とクレメンシイが答えた。「もちろんその通りよ。それで小馬のことだけど——八ポンド二シリングで売れたのよ。まあまあよね、そうでしょう？」

「上々の首尾だ」とベンが言った。

「あんたが喜んでくれて嬉しいわ！」と妻が叫んだ。「喜んでくれるだろうと思つてはいたの。これで全部だと思つて、あんたの妻等々のクレメンシイ・ブリテンから目下のところもうこれ以上は何も出ないわよ。はっ、はっ、は！ さあ！ 書類全部を受け取つて、金庫にしまつて頂だい。おお！ ちょっと待つて。壁に貼るビラがあつたわ。印刷屋から受け取つたばかりの。まあインクの何ていいにおい！」

「一体何のビラなんだ？」とベンが、それをざっと見渡して言った。

「知らないわ」と妻が答えた。「まだ全然目を通していないのよ」

『競売に付せられる』とにくずくおろし亭の主人が読みあげて言った、『事前に個人契約で処分済みにならない場合』

「いつもそんな言い方をするわね」とクレメンシイが言った。

「そうだが、これは違うぞ」彼は答えた。「いいかい、『邸宅』等々——『家事室』等々、『植え込み』等々、『地所を囲む柵』等々、『スニチィ・クラッグズ共同事務所』等々、『外国の居住を継続する意志を持つマイケル・ウォーデン氏の抵当、負債などの負担のない自由保有不動産中の装飾部分』！」

「外国の居住を継続する意志を持つ！」とクレメンシイがおうむ返しに言った。

「ほらここだよ」とブリテンが言った。「見てみろ！」

「彼女についてのより良いものと確かな知らせが近々のうちに届きそうだと、あちらで噂されているのを聞いたのは今日なのに！」とクレメンシイは言って、悲しそうに頭を振り、昔の記憶が思わず昔の習慣を目覚めたかのごとく、両肘をさすったのである。「やれ、やれ！ ベン、あちらでは皆さんきつとお悲しみよ！」

ブリテン氏はため息をつき、頭を振って、見当がつかないと言った。彼はとつくの昔に思考することはやめていたのだ。そう言いながら、彼は酒場の窓のすぐ傍にそのビラを掲示するとに神経を集中させた。少しの間黙考した後、クレメンシイは我に返り、思い悩んでいた表情を一掃して、子供達の世話をしに急ぎ出て行った。

にくずくおろし亭の主人は彼の妻に対し強い尊敬の念を抱いていたけれども、それは昔同様



目を掛けてやっているという類の気持から出ていて、彼女という存在を彼は大いに楽しんでいたのである。宿屋全体を運営していて、その飾らない率直なやり繰り、正直、勤勉によつて、彼を羽振りがよい男に仕立てているのは他ならぬ彼女であることを、第三者の口から確かな事実として知ったとすれば、それ程彼を驚かすものは他にはあり得なかつたであろう。どんな程度の生活においても（この世において頻繁に見受けられることだが）、自己の価値を決して主張しない人達の晴れやかな性質を、その人達の控え目な自己評価の言葉通りに受け取るのは、極めて簡単なことである。奥底までよく見つめて比較すると、その生得の真価が分かつて私達の方が赤面することになる人達を、その表面的な変人振りと突飛さの故に軽率にも好くようになるのも、極めて簡単なことである！

クレメンシィと結婚してやったという自己の優越性を思い浮かべるのは、ブリテン氏にとつては楽しいことであつた。彼女は彼にとってはおのが心の善良さと、おのが氣質の親切さを永遠に物語ってくれる証人であり、彼女がすばらしい妻であることは徳はそれ自体が報いであるという古い教訓の例証となつていてと彼は感じていたのである。

彼はビラの揭示を済ませ、彼女の一日の手際を証明する書類を戸棚にしまいこんだ——その間中、彼女の事務処理能力に満足してくすくすと笑い続けた——その時、息子二人はベツツイの監督の下馬車置き場で遊んでいることと、娘のクレムは絵のように可愛らしく眠っていると

いう知らせを持って戻ってくると、彼女は座って、彼女が戻ってくるのを待ち受けていたお茶を小卓に出す仕度に取り掛かった。そこはとても小綺麗な小さな酒場になっていて、何処でも見られるごとく酒瓶とグラスが並べてあり、(五時半を指していた)分まで正確な落ち着き払った時計があった。全てのものがそれぞれの場所に嵌まっただけで、申し分なく磨き上げられていた。

「今日落ちて着いて座ったのはこれが始めてだわ、本当に」とブリテン夫人は言って、一晩中座っていたかのごとく、深く息をついた。しかし再びすぐに立ち上がって夫にお茶を手渡し、バター付きパンを切り分けてやった。「あのピラで昔のことがしきりに想い出されてならないの！」

「ああ！」とブリテン氏が、受け皿を牡蛎かきの殻のごとく扱い、その中味も牡蛎のごとくすったのであった。

「あの同じマイケル・ウォーデンさんのために」とクレメンシィが、ピラを見て頭を振りながら、言った、「わたしは昔の仕事の口を失った」

「そして夫を得た」とブリテン氏が言った。

「そうね！ 確かにあの人のお蔭だわ」とクレメンシィが答えた、「あの人に幾ら感謝しても足りないくらいよ」

「男は習慣性の生き物だ」とブリテン氏が、受け皿越しに彼女を見つめて、言った。「俺は何とかかんとかしている内に君にすっかり慣れ親しんでしまった、クレム。そうして君なしではやって行けなくなっている自分に気が付いた。それで俺達は結婚して夫婦になったという訳だ。はっ！ は！ 俺達がだよ！ 一体こんなことを思い付いた者がいたかね！」

「本当にそうだわ！」とクレメンシイが叫んだ。「あんたが本当に親切な人だからこそよ、ベ
ン」

「いや、いや」とブリテン氏が、控え目な態度で答えた、「口に出して言う程のものではない
よ」

「いいえ、あんたのお蔭よ、ベン」と彼の妻が、極めて純朴な態度で、言った、「そうだと確
信してるの、そしてあんたにとても感謝してるのよ。ああ！」再びピラを眺めた、「彼女が姿
を消して手の届かない所へ行ってしまったことが明るみに出た時、わたしは——残された人達
のためと全く同じように彼女のためにも——知っていることを言わざるを得なかったのよ、そ
うでしょう？」

「ともかく、君はそうした」と夫が言った。

「ジェドラー博士は」クレメンシイが、ティーカップを置き、ピラを想いに沈んで見つめな
がら、話を続けた、「悲しみと怒りのあまりわたしを屋敷から追い出してしまわれた！ そ

の時でさえ、彼に向かって怒りの言葉を言わなかったし、怒りの氣持を抱かなかったことを、これまでの人生における最高の喜びとしているの。というのも彼が後になって本当に後悔されたからなの。何度となく彼はこの部屋に腰を下ろされて、繰り返し繰り返しすまなかったとわたしにおっしゃったのよ！——つい昨日も、あんたが外出している間に。何度となくこの部屋に腰を下ろされて、興味を持っておられるように見せかけながら、あれやこれやと、何時間も話しこまれたの！——だけど本当は過ぎ去った日々のためと、彼女がわたしをかつて好いていたことを知っておられるからこそなのよ、ベン！」

「おや、君は何時からそんなことに氣付くようになったんだい、クレム？」と夫が尋ねた、おのが詮索好きの心に全くぼんやりと浮かんだに過ぎない真相を彼女が明確に知覚していることに驚きながら。

「しかと知っている訳ではないのよ」とクレメンシーが、冷まそうとして、お茶をふうと吹きながら、言った。「本当に、あんたがわたしに百ポンドの褒美をくれたとしても、分かりっこないわ」

喪服を着て、乗馬をするかのごとくマントをはおり靴を履いて、酒場の入口に立っている一人の紳士の形をとった実体のあるものを彼の背後に彼女が認めるということがなければ、彼はこの形而上学的命題を追求していたことであろう。この紳士は夫婦の会話に聞き入っていて、

焦れてそれをさえぎろうとする様子は全く見られなかった。

クレメンシィはこの人物を認めるとあわてて立ち上がった。ブリテン氏も立ち上がって客に会釈をした。「二階へ上がって頂けませんでしょうか？ 二階にはとても快適な部屋がございますので」

「ありがとうございます」とその見知らぬ人物が、ブリテン氏の妻を熱心に見つめながら、言った。「ここへ入ってもかまいませんか？」

「ええ、どうぞ、よろしければ」とクレメンシィは、彼を中へ入れながら、言った。「何か御注文がございますか？」

ピラに目を留めて、彼は読み出した。

「すばらしい物件だと思いますが」とブリテン氏が言った。

彼は何の返事もしないで、読了すると、振り向いて、前と同じ熱心な好奇の眼差^{またざ}しでクレメンシィを見つめた。「あんたは私に尋ねたね」——依然として彼女を見つめながら、彼が言った

「何か御注文がございますか」とクレメンシィが、返しとして相手をそっと見ながら、答えて言った。

「ビールを出してもらって」彼は、窓際のテーブルに動きながら、言った、「あんたがたの食

事の邪魔をすることなく、この場所で飲めれば、とても有り難いのだが」

それ以上要求をすることなく、話しながら彼はテーブルに着席して、外の景色を眺めた。男盛りのゆったりとして、均斉のとれた姿をもつ人物だった。よく日焼けした顔に豊かな黒髪が影を落としており、口髭^{ひげ}をはやしていた。ビールが眼前に置かれると、彼はコップになみなみと注いで、上機嫌に、この宿屋に乾杯と言つて飲み、コップを再び置きながら、「こちらは新しい宿屋ですな、そうでしょう？」と言つた。

「とりたてて新しい訳でもありません」とブリテン氏が答えた。

「始めて五、六年ということですが」とクレメンシイが、はつきりとした口調で言つた。

「入つて来た時、ジェドラー博士の名前を聞いたように思いますが」と見知らぬ客が尋ねた。

「あのビラを見ていると彼のことか想起起こされます。というのも私は噂と親類の者を通して、例の話を幾分かはたまたま知っているからなのです。——老博士は御健在ですか？」

「ええ、そうです」とクレメンシイが言つた。

「随分と変わられたと思いますか？」

「何時からのことをおっしゃっているのですか？」とクレメンシイが、ありありと力をこめた口調と表情でもつて答えた。

「娘さんが——家を出てからです」

「そうです！ 彼はあれ以来随分と変わられました」とクレメンシイが言った。「髪が白くなり年老いて、物腰も以前の面影はありません。だけど今はお幸せだと存じます。あれ以来妹さんとおつき合いなさるようになり、度々会いに行かれます。それがじかに彼によい影響を与えました。最初のうちは、悲しみに打ちのめされて、彼が世の中を呪いながらうろつき回るのを見ると、わたし達の心はひどく痛みました。だが一年か二年経つうちに良き方への大きな変化が彼に起こり、その時から彼は行方不明のお嬢さんのことを好んで話題に出して、彼女をほめるようになったんですよ、そう、世の中のこともです！ そして目に涙を浮かべて、彼女がどんなに美しく善良であったかをあきもせず言い続けるようになりました。その時点で彼女を許されたのだと思います。これはグレイスさまの御結婚とほぼ同じ頃でした。ブリテン、あなたも覚えていてでしょう？」

ブリテン氏はよく覚えていて、と答えた。

「それではお姉さんは本、当に結婚されたんですか」と見知らぬ客が答えた。彼は「誰と？」と問う前に少し間を置いた。

クレメンシイはこの質問を受けて、驚いて茶盆をあわやひっくり返すところであった。

「あなたは御存知なかったんですか？」

「是非ともお聞きしたいのだが」彼は再びコップをビールで満たし、口へ運びながら、答え

て言った。

「ああ！ きちんと話せば、長い話になりますの」とクレメンシィは言つて、左の手のひらに顎を乗せ、右手で左肘を支えて、頭を振りながら、暖炉の火でも見つめているかのごとく、この六年の歳月を振り返つて見つめたのであった。「本当に長い話になりますの」

「だが短い話として語るとすると」と見知らぬ客がそれとなく誘つた。

「短い話として語るとすると」とクレメンシィが同じ想いに沈んだ調子で、明らかに相手に話しかけるでもなく、聞き手がいるという意識もないまま、おうむ返しに言つた、「どういふことになるかしら？ 彼等が共に彼女のことを死んだ人のごとく悲しみ、想ひ出したというところ。彼等が彼女をいとしく思つて、一度も非難せず、以前のままの彼女を想ひ起こして、彼女がしたことの口実を見い出したということになるかしら！ 誰もが知っていることだけだ。このわたいもよく知っていますの、誰よりもよく」とクレメンシィが、手で涙を拭いながら、付け加えた。

「それで」と見知らぬ客が、それとなく誘つた。

「それで」とクレメンシィが、機械的に相手の口調に乗り、姿勢も態度も何ら変えないで、言つた、「彼等はずいぶん結ばれたの、彼女の誕生日に結婚式をあげたのです——明日またしてもそれが巡ってきますけど——ごく静かな、ごく内輪の、だけどもとても幸せな結婚式を。ある

夜二人で果樹園を散歩されていた時、アルフレッドさまが、『グレイス、僕達の結婚式はメアリアンの誕生日にあげたらどうだろう?』とおっしゃったそうです。そしてその通りになりました」

「そして彼等は幸せに暮らしているのだね?」と見知らぬ客が言った。

「そうです」とクレメンシーが言った。「お二人以上に幸せに暮らしている人はおりません。彼等にはこれ以外に心を痛めることは何もありません」

一連の出来事を回想しつつその根源となった状況に突然気が付いたかのごとく彼女は頭を起こして、その見知らぬ客をすばやく見つめた。顔を窓の方へ向けて、風景に見とれていると思えたので、彼女は夫に熱心に合図を送り、ビラを指さして、何度か一つの単語もしくは語句を彼に向かって、ものすごい力をこめて繰り返そうとするかのように口を動かした。彼女が声を全く出さず、その無言の動作も他の大抵の身振りと同じく極めて桁外れの類のものであったので、この難解な振る舞いはブリテン氏を絶望の一手手前へ追いこんだのであった。彼はテープルを凝視し、見知らぬ客を、スプーンを、妻を凝視した——深い驚嘆と困惑の目で彼女のパントマイムを追った——同じ無言の言葉で、危険にさらされているのは財産か、彼か、それとも彼女かと尋ねた——最高度の困惑と混乱を示す他の類の合図でもって彼女の合図に答えた——彼女の口の動きを追った——半ば声に出して、「水で割った牛乳」、「一ヶ月前の解雇通告」、

「ネズミとクルミ」だと推測した——彼女の伝えたい意味が皆目つかめなかった。

クレメンシィはついに合図を幾ら試みても全く役に立たないと悟って、断念して、見知らぬ客の少しでもより近くにゆっくりと椅子を動かして座り、見かけは眼差しを落としていたが時折彼を鋭く見やりながら、相手が他の質問を発するのを待ち受けた。そんなに待つ必要はなかった、というのも相手も程なく、「それで家を出て行った娘さんのその後の消息はどうなんですか？ 彼等は知っているんでしょう？」と言ったからである。

クレメンシィは頭を振った。「噂があります」彼女は言った、「ジェドラー博士が実際は知っているのに隠しているというね。グレイスさまのところに妹さんから、元気で幸せに過ごしている、お姉さんがアルフレッドと結ばれて本当に幸福であると書かれた手紙が届き、彼女もそれに返事を出されました。ただメアリアンさまのその後の人生と運命は全くの謎に包まれていて、現在まで何一つ分かっておりませんし、そしてそれを——」

彼女はここで口ごもり、話すのをやめた。

「そしてそれを——見知らぬ客が繰り返して言った。

「それを説明できる方は一人しかおられません」とクレメンシィが、すばやく息を吸いこんで、言った。

「それは一体誰かね？」と見知らぬ客が尋ねた。

「マイケル・ウォーデンさまです!」とクレメンシィが、ほとんど叫び声になって、答えた。そして彼女は合図を送って理解させようとしたのはこれであると夫に伝えると共に、マイケル・ウォーデンにも正体がばれていることを知らせたのである。

「わたしを憶えておられると思いますが?」とクレメンシィが、興奮で震えながら、言った。「今想い出されたのですね! あの夜庭に、わたしがいたのを憶えておられますね。わたしは彼女と一緒にいたのです!」

「そうだ。あんただった」彼が言った。

「そうなんです」とクレメンシィが答えた。「その通りでございます。これはわたしの夫でございます。ベン、一走りしてグレイスさまに知らせて頂だい——アルフレッドさまにも——どこでもいいから一走りして頂だい、ベン! 誰かをここへ連れてきて頂だい、すぐに!」

「待ってくれ!」とマイケル・ウォーデンが、ドアとブリテンの間に静かに身体を置きながら、言った。「あんたはどうしようというのかね?」

「屋敷の皆様にあなたがここにおられることを知らせたいのです」とクレメンシィが、極度に興奮して両手を打ち鳴らしながら、答えた。「あなた自身の口から彼女の消息が聞けるかも知れないことをお知らせしたいし、彼女の行方が全くつかめないということが消えて、いずれ再び戻ってきて、お父さまと優しいお姉さまに祝福を与えるであらうということもお知らせし

たい——昔の召使であるわたしにさえそうであることも」彼女は両手で胸を打った、「彼女の美しい顔を見ることで。一走りして頂だい、ベン、さあ！」依然として彼女は彼を戸口へとせき立てたが、依然としてウォーデン氏が怒っているというよりも悲しそうに、片手をさしのべて、ドアの前に立っていた。

「或いは多分」と言つて、クレメンシィは夫の傍を駆け抜け、興奮のままウォーデン氏の外套をつかんだ、「多分彼女も今ここにいるのね。多分近くにいるのね。あなたの態度からそうだと思いますの。どうか、彼女に会わせて下さい。小さい時からずっと彼女に仕えてきました。彼女が成長してこの地方の誇りとなったのを見してきました。アルフレッドさまの婚約者となられた日の彼女も知っております。あなたが誘惑して連れ去ろうとした時彼女に警告もしました。彼女が中心をなしていた時のお屋敷の様子を知っていますし、彼女が姿を消して消息不明となった時の変わりようも知っております。どうか彼女と話をさせて下さい！」

彼は驚愕の混じった同情の目で彼女を見つめたが、同意の仕草は見せなかった。

「彼女に理解できる、とは思えません」とクレメンシィが話を続けた、「御家族の皆様が本当にどれ程心の底から彼女を許しておられるか。どれ程彼女を愛しておられるか。今一度再会できれば、どれ程お喜びになられるか、といったようなことが。彼女は屋敷に帰ることを尻ごみしているのかも知れません。多分わたしの顔を見れば、彼女に新たな勇気が湧いてくると思いま

す。ウォーデンさま、さあ本当のことをおっしゃって下さい、彼女はあなたと一緒に来ているんでしょ？」

「いや違う」彼は、頭を振って答えた。

この答え、彼の態度、黒ずくめの服装、ひっそりと舞い戻ってきたこと、外国で暮らし続けるつもりだとビラで説明されていたこと等が彼女に全ての事情を語りかけて、彼女は「メアリ・アンさまが亡くなられた」と叫んだのである。

彼は彼女の叫びを否認しなかった。「そうよ、亡くなられたのね！」と叫んで、クレメンシイは座りこみ、テーブルに顔を埋めて、泣き伏した。

丁度その時、白髪の老紳士が駆けこんできた。ひどく息切れし、ものすごく喘いでいたので、出てくる声がスニチ氏の声だとはほとんど識別できない程であった。

「本当にまあ、ウォーデンさん！」と弁護士は言って、相手を脇へ連れて行った、「一体どうした風の吹きまわしで——」彼はひどく息切れしたので、それ以上話を続けることができず、一息入れてから、弱々しく、「ここにおられるのですか？」と付け加えた。

「逆風に乗せられてだよ」彼が答えた。「あんたについて今しがたのやりとりを聞いてほしかったよ——あり得ないことを演じるように俺がどれ程求められ懇願されていたかを——俺がどれ程の混乱と苦しみをもたらしたかということも！」

「見当はつきます。ですがあなたはどのようにしてここへ来られたのですか？」とスニチイが答えた。

「どうして来たのかって！ この連中が経営している宿屋だってことがどうして俺に分かる？ 召使をあんたのところへ使いに出してから、ここが俺にとっては何事かあったのぢやんと足を向けただけのこと。懐かしの場所の新旧あらゆるものに対する好奇心も当然あったし、それにここは町から外れているからね。博士の邸宅に行く前に、まずあんたと話をしたかったんだ。あそこの人達が俺のことを何と言ってるのか知リたかったものでね。あんたの態度から言いたいことは見え見えだがね。あんた達のいまいましい警告さえなければ、とつくの昔に彼女の消息など全てのことをつかんでいたのに」

「私どもの警告ですと！」と弁護士が答えて言った、「私自身と亡くなった——クラッグズのために言わせて頂きますと」ここでスニチイ氏は、帽子に巻いた喪章に目をやって、頭を振った、「貴方はよくも私どもを責めるといふ不条理なことができますね、ウォーデンさん？ この問題は二度と蒸し返さないことと、私どものような謹厳な堅物が（あの時の貴方の言葉を記録にとつていますが）手出しできる問題ではないということは、お互いの間で了解されていたはずですが。私どもの警告もまたそうですよ！ クラッグズ君はすっかり信じて不帰の旅に立ったのに——」

「何時になろうとも、帰国するまでは口外はしないと固く約束をして」とウォーデン氏がさえぎった、「そしてそれを守ってきた」

「よく分かりました。貴方の言葉の繰り返しになりますが」とスニチ氏が答えて言った、「私どもも約束は固く守ってきました。我々自身への義務として沈黙を守ってきたし、貴方もその一人ですが、極めて近い顧客の方々に對する義務として守ってきました。こんな駆け落ちという難しい問題で貴方のことを問い合わせるのは私どもの職務を越えておりました。私は疑いは持っていました、真相を知って、貴方が彼女を失われたことを納得してからまだ半年と経っておりません」

「誰から聞いたのか？」と顧客が尋ねた。

「ジェドラー博士その人からですよ、彼はついには自ら進んで私にこの秘密を打ち明けて下さったのです。彼だけがこの全部の真相をとつくの昔から御存知だったのです」

「そして君も知った訳だな？」と顧客が言った。

「その通りです！」とスニチ氏が答えた、「その上確かな話として明日の夕方彼女の姉にこれが明かされることになっているのも存じております。御家族間でそういう約束が交わされておりますので。当座は、私の家の方で滞在して下さるようお願い致します。貴方自身のお屋敷では不意のことで無理でしょうから。だが、万一貴方だと分かった場合、貴方がここで経験され

た難儀にこれ以上出くわさないようにするために——もつとも随分とお変わりになっておられますが。私自身は貴方だと気付かずにやり過ごしただろうと思いますよ、ウォーデンさん——ここで夕食をとって、夜になってから外を歩いた方が良いでしょう。食事をするにはとてもいいところでしてね、ウォーデンさん。ついでに貴方の財産の件もその時に。私と（今は亡き）クラッグズとは時々ここで厚切りの肉を食べたものです、それもととも具合良く料理されたやつをね。クラッグズ君は」とスニチイは言いながら、少しの間両眼をしっかりと閉じ、再び開いた、「余りにも早く人生の名簿から名前を削除されてしまいました」

「あなたにお悔やみが十分に言えないのを許して下さい」とマイケル・ウォーデンが、額を手で拭いながら、答えた、「もつとも私は目下のところは夢の中の人物みたいだが。正気も失っているみたいだ。クラッグズさん——そう——クラッグズさんを亡くして本当に残念だ」だが彼はそう言いながらクレメンシイを見つめて、彼女を慰めているベンに共感を覚えているように見えた。

「クラッグズ君にとっては」とスニチイが言った、「残念ながら、理屈の上で主張した程は人生を合法的に所有することはたやすくはなかった、そうでなければ彼は今も生きてこの席に加わっていたはずです。私にとって彼の死は取り返しのない損失です。彼は私の腕であり、足であり、耳であり、目でもあった、クラッグズ君は。彼なしでは私は麻痺したも同然です。

彼は仕事上の権利を奥さんと、彼女の遺言執行人、遺産管財人とそして財産譲受人とに遺しました。彼の名前は今も共同経営者として残っています。私は、子供っぽいやり方ですが、時折、彼が生きていると信じこもうとしています。お氣付きのように私は私自身とクラッグズの意見として話をしているのですが——今は亡き——今は亡き」と情にもろい弁護士が、ハンカチを振りながら、言った。

ずっとクレメンシィを見つめていたマイケル・ウォーデンが、相手の話がやむとスニチィ氏の方を向いて、耳元でささやいた。

「ああ、かわいそうに！」とスニチィが、頭を振って言った。「そう、彼女はいつもメアリアンにはとても忠実でした。常に彼女をとっても好いていました。美しいメアリアンをね。かわいそうなメアリアン！ 元氣を出して、女将^{おかみ}さん——あんたは今結婚しているのだから、クレメンシィ」

クレメンシィはため息をついて、頭を振っただけであった。

「わかった、わかった！ 明日まで待ちなさい」と弁護士が、やさしく言った。

「明日になったからといって死んだ人が生き返るはずもないでしょう」とクレメンシィが、すすり泣きながら、言った。

「それはそうだ。確かにそんなことはあり得ない、そうでなければ今は亡きクラッグズ君だ

って生き返るはずだ」と弁護士が答えた。「だが明日になれば悲しみをやわらげる状況が出来るかも知れない。明日まで待ちなさい！」

それでクレメンシイは、差し出された手を握りしめながら、そうすると云った。悲しみに沈んだ妻（まるで宿屋そのものがうなだれているみたいであつたが）を見てひどく意氣消沈していたブリテンが、それがいいと言つた。スニチイ氏とマイケル・ウォーデンは二階へ上がつて行つた。そしてそこで二人はすぐに極めて注意深く交わされる会話に没頭したので、皿のガチャガチャいう音、フライパンのシューシューいう音、シチュー鍋の泡立つ音、焼串回転具が回転する低く単調な音——めまいの発作に襲われて、頭に致命的な傷でも負つたかのごとく時々ものすごいカチツという音を立てはするが——二人の夕食のために台所で進められていたその他の全ての準備などのために、彼等の会話のささやき一つ聞きとることができなかったのである。

次の日は快晴の穏やかな一日であつた。博士の屋敷の静かな果樹園以上に、秋の気配が美しく望める所はなかつた。彼女が姿を消して以来、冬の夜降り積もつた雪が幾度となく果樹園で溶け去り、夏季の萎れた葉が幾度となくそこでさらさらと音を立てたのである。忍冬の車寄せは再び緑になり、樹々は草の上に豊かで変化に富む影を投げ掛けていて、風景は昔と同じく静

かで穏やかであったが、彼女は何処にいたのか！

屋敷にはいなかった。そこにはいなかった。屋敷が最初のうち彼女がいなくなつて異様な感じになったよりもっと、今戻ってきた彼女の方がこの古い屋敷の中でなじみのない光景となつたことであろう。だがその心から彼女が一度として消え去つたことのない一人の女性が、懐かしい場所に座っていた。その真の記憶の中で彼女は、変わることはない、若さに満ちた、将来への期待と希望で輝いている姿のまま生きていた。その愛に包まれていることにおいて——今やこの愛は母親の愛となり、それが注がれている幼女がこの女性の傍で遊んでいたのだが——彼女と張り合う者や後に続く者は全くなかった。そのやさしい唇からこの時も彼女の名前が震えながら漏れ出ていた。

消息不明の娘の魂がその両眼からのぞき出ていた。そのような眼差しで彼女の姉であるグレイスが、果樹園に夫と一緒に、二人の結婚記念日に、彼とメアリアンの誕生日に、座っていたのである。

彼は偉大な人物にはならなかった。金持にもならなかった。若い時の諸々の場面と友人を忘れなかったし、博士の昔の予言のどの言葉も達成しなかった。しかし貧しい人達の家庭を有効に、辛抱強く、人に知られることなく往診することにおいて。病人達の看病において。やさしさと善良さがこの世の小路に花開いて、貧困の重い足取りで踏みにじられることなく、しなや

かにその通り道に咲き出て、道を美しいものにするを日々知っていることにおいて。以上の諸点において、彼は年々歳々、おのが昔の信念の正しさをどんどんと学び証明してみせたのである。もの静かで隠者のようではあったが、おのが生活流儀から彼は昔と同じく人々がしばしば依然として天使を、氣付かずにもてなしている（『ヘブライ人への手紙』第十三章第二節参照）ということと、この上なく似つかわしくない人物がどれ程——明らかに卑しく醜い上に、惨めな格好をしている者でさえも——悲哀、欠乏、苦痛の褥しとゝで輝きを放つようになって、頭に光輪を頂く救いの天使に变身するかということを教えられたのである。

もつと野望に燃えて激しく競争する場所で不安に駆られて対立した場合よりも、この変容した古戦場で彼は暮らして大いなる効果をあげていたし、妻である愛するグレイスと共に幸福であった。

そしてメアリアン。彼は彼女のことは忘れてしまったのか？

「時が流れた、グレイス」彼が言った、「あれから」二人はあの夜の話を話し合っていた、「しかも遠い大昔のことのように感じられる。僕達自身の激しく大きい移り変わりで時の流れを数えてきた。歲月そのものではなくて」

「だけどわたし達には、メアリアンと一緒にいた時からの数えられる歲月もありますわ」とグレイスが答えた。「あなた、今晚を一回と数えて、六回も、わたし達は彼女の誕生日にはここ

に座って、熱心に待ち焦がれながらずっと引き延ばされてきた誕生日の幸福な形での再現について話し合ってきました。ああ、一体何時のことになりますの？ 何時のことに？」

夫は、涙を両眼にたたえた妻をじっと見つめ、もっと傍に寄り添って、言った、「だけどもアリアンは、君にあててテーブルに残した、そして君が何度も読み返してきた置き手紙で、誕生日がそうなり得るには長い年月の経過をどうあっても待たなければいけないと言っているのだらう。そうだらう？」

彼女は胸から手紙を取り出し、それに接吻して、「そうです」と言った。

「それらの歳月の間ずっと、たとえどんなに幸福になろうとも、君達が再会できて、全てを明らかにできる時を待ち望んでいると、そして君が同じ氣持を抱いてくれるよう、信頼と希望をこめて祈っていると。その手紙にはそう書いてある、そうなんだらう？」

「その通りよ、アルフレッド」

「その後彼女から届いたどの手紙もそうなんだらう？」

「最後のを除いてね——数ヶ月前に届いた——あなたのこと、あなたがあれから知ったこと、今晩わたしが知ることになっていることなどについて書いて寄こした」

彼は、その時急速に沈みつつあった夕陽に目をやり、約束の時間は日没だと言った。

「アルフレッド！」とグレイスは、真剣な態度で彼の肩に手を置いて、言った、「この手紙に

はあるのよ——わたしが何度も読み返してきたとあなたがおっしゃる、この昔の手紙には——まだあなたにお話ししてないことが。だけど今晚、約束の日没が迫って来ると共に、わたし達の生活の全てが沈んで行く夕陽で穏やかになり静寂をたたえていると思われてきて、それを秘密にしておくことがどうにもできなくなりましたの」

「それは一体何かね？」

「家を出て行った時、メリアンはこの手紙の中に、あなたがかつて彼女をわたしに大事な預けものとして託したこと、今度は彼女がアルフレッド、あなたをわたしの手に同じく託すること、わたしが彼女を愛し、あなたを愛するように、彼女の失踪で受けた傷が癒されるとあなたがわたしに振り向けると彼女が信じている（彼女は知っていた、と書いているわ）愛を拒まないで、お願いだから励ましそれを受け入れてほしい、ということなどを書き残していますわ」

「——そして僕を誇りにあふれさせ、その上更に幸福な男にするようにと、グレイス。彼女はそうも書き残しているのだろう？」

「あなたの愛を得てわたしが祝福と名誉に包まれてほしいと、書き残していますわ」

「よく聞いておくれ！」彼が言った。——「いや、そのままで聞いておくれ！」——そう言いながら、彼は再び肩に、彼女の仰いだ顔をやさしく乗せた。「今始めて手紙のこの一節のことを聞いた理由は分かっている。あの当時君の言葉にも表情にもこれの痕跡一つ出てこなかった

理由も分かっている。忠実な友ではあったけれども、グレイスを我が妻に迎えるのが難しかった理由も分かっている。その理由が分かった時は！我が腕で抱きしめている魂の無限の価値も知っているし、それがありがたくも我がものとなったことを神様に感謝しているのだ！」

強く抱きしめられて彼の心臓に押し当てられながら、彼女は泣いた、但し悲しみのためではなく。しばらく間を置いて、彼は二人の足元で座って花を入れた小さな籠で遊んでいた娘を見つめて、夕陽がすばらしい黄金色をして赤々と燃えている様を見るようにと言った。

「アルフレッド」とグレイスは、この言葉を聞くとすばやく顔を起こして、言った。「夕陽が沈んで行くわ。日没前にわたしが知ることになっていることを忘れた訳ではないでしょう」

「君はメアリ안의境遇の真実を知ることになっている」彼が答えて言った。

「全ての真実をよ」彼女は懇願するように言った。「もうこれ以上、わたしから隠されているものは何もないはず。それが約束なのでしょ。う。そうなのでしょ。う？」

「その通りだ」彼は答えて言った。

「メアリ안의誕生日の日没前ということだったわ。あれが見えるでしょう、アルフレッド？　どんと沈んで行くわ」

彼は腕で彼女の腰を抱き寄せ、しっかりと彼女の目をのぞきこみながら、答えた、「真実は僕から説明するように長い間とおかれていた訳ではない、グレイス。それは他の人の口か

ら話されることになっている」

「他の人の口から！」彼女は弱々しい声でおうむ返しに言った。

「そうだ。君の誠実な心も、君がどれ程勇氣ある人であるかということも、僕には分かっている。準備の一言さえあれば君には十分だと思う。約束の時が来たと君はいみじくも言った。まさにその通りだ。試練にも——驚愕にも——衝撃にも——耐えるだけの強さを今備えていると僕に言ってくれ。使いの者が門のところまで待っているから」

「使いの者ってどんな人なの？」彼女が言った。「そしてその人はどんな知らせを持ってきたの？」

「僕は約束している」彼は、しっかりとした眼差しを保持しながら、彼女に答えて言った、「ここまでしか言わないと。僕の言うことを分かってくれるだろうね？」

「考えるだけでも恐ろしいくらいだわ」彼女が言った。

しっかりとした眼差しにもかかわらず、彼の顔には彼女を怯えさせる何かがあった。再び彼女は顔を彼の肩に埋めて、身を震わせ——ほんの少し——待ってほしいと懇願した。

「勇氣を出すんだ！ 君が使いの者を迎えるだけの勇氣さえ持てばいいんだ、その人物は門のところまで待っているのだから、メアリ안의誕生日の太陽が沈んでいく。勇氣を、勇氣を出すんだ、グレイス！」

彼女は顔を起こして、彼を見つめながら、大丈夫だと言った。立ち上がり、夫を見つめながら遠ざかって行く彼女の顔はアルフレッドの出立から姿を消す前までのメアリアンの顔によく似ていたので、見ていて驚く程であつた。彼は子供を連れて引きあげた。彼女が子供を呼んだ——行方不明の妹の名前を持っていたところの——そして胸に抱きしめた。小さな娘は、再び解放されると、父親の後を追って走って行つた。グレイスは一人とり残された。

自分が何を恐れているのか、或いは何を望んでいるのか見当がつかないまま、彼女はその場に立ちつくし、身動き一つしないので、夫と娘が退場して行つた門のところを見つめていた。

ああ！ 蔭から現れて、入口に立たずんでいるあの姿は何者！ 夕方の風に揺れてさらさらと音を立てている白い衣服を着て、頭を父親の胸に預け、その愛で一杯の心にひしと抱きついているあの姿は！ おお、神様！ 老人の腕から飛び出して来て、歓声をあげ、両手を振り、無限の愛をこめて彼女に狂つたように飛びついて、彼女の抱擁に身を任せているこの姿は幻なのか！

「おお、メアリアン、メアリアン！ おお、わが妹！ おお、心から愛しい人！ おお、このように再会できて、限りなく嬉しい幸福だわ！」

それは夢ではなく、希望と恐怖から浮かび出た幻影でもなくて、メアリアン、美しいメアリアンであつたのだ！ 余りにも美しく、余りにも幸福で、余りにも心労と試練によって純化され、

余りにも氣高く高貴な美しさに包まれていたので、沈み行く夕陽がその見上げている顔を輝いて照らした時、彼女は癒しの使命を帯びて地上に舞い降りた天使のごとく見えたのであった。

腰掛けに崩れるように座って彼女の方に身をかがめている姉にすがり付き——涙と共に微笑み——姉にびたりと寄り添ってひざまずいて、両腕で彼女をひしと抱きしめ、その顔から一瞬たりとも目を離さず——沈み行く夕陽の輝きを額に受け、夕暮れの穏やかな静寂に姉と共に包まれて——メアリアンがついに沈黙を破った。その声は、極めて静かで、低く、澄んでいて、心地よく、その場によく調和していた。

「ここがいとしのわが家であった時、グレイス、これから再びそうなるように——」

「待つて！——瞬だけ！——おお、メアリアン、再びあなたの声が聞けるとは！」

彼女は最初のうち、深く愛していたその声に耐えられなかった。

「ここがいとしのわが家であった時、グレイス、これから再びなるように、わたしは心の底から彼を愛していたの。この上なく心をこめて愛していたの。とても若かったけれど、彼のためなら死んでもいいと思ったの。一瞬たりとも胸の奥で彼の愛を軽んじたことはないわ。わたしにとってはとても貴いものでしたから。遠い昔の過ぎ去ったことで、何もかもすっかり変わってしまったけれど、心より愛しているあなたが、わたしがかつて彼を本当は愛していなかったと思うかも知れないと考えると、どうにも耐え切れなかったの。今日と同じわたしの誕生日

にまさにここから彼が出立して行つた時程、グレイス、彼を愛したことはないわ。わたくしがこの出て行つたあの夜程、彼を愛したこともないわ」

姉は、彼女の方に身をかがめて、顔を見つめ、固く抱きしめるばかりであつた。

「だけど彼は、知らない間に」とメアリアンが、静かに微笑んで、言つた、「別の心をつかんでしまつていたの、わたしが彼に寄せる自分の愛に気付く前に。その心は——あなたのことよ、お姉さま！——無私のやさしさを發揮して、わたしに道を譲り、極めて献身的で、氣高かつたので、自分自身の愛を摘み取つて、わたし以外の全ての人の目に触れないよう隠してしまつたの——ああ！他の人達の目がそんなやさしさと思ひやりを受けてどれ程生き生きとしたことか！——その上わたしのために喜んで犠牲になつてくれたの。しかしわたしはその心の深さを幾分か知つていたし、それが被^{こうむ}つた苦しみも知つていたの。彼がどれ程わたしを愛してくれたとしても、それが彼に対して氣高くて測り知れない価値を持つてゐることも、彼がそれを十分に理解することも知つていたわ。わたしがそれからの恩義を負つてゐることも知つていたわ。わたしの前で毎日偉大な手本となつたのよ。あなたがわたしのためにしてくれたことを、グレイス、その氣さえあれば、あなたのためにわたしにもできることも知つていたの。ベッドに入つて枕に頭を横たえる度に、涙ながらにそうしたいと祈つたの。また枕に頭を横たえる度に、出立の日のアルフレッドの言葉を思い浮かべて、もがき苦しむ心が毎日獲得する勝利と比較す

ると、この古戦場はとるに足らないと（あなたのことが分かっていたので、わたしにも理解できたの）彼が言ったことがどんなに正しいか、と思ったりもしたの。彼が言った大いなる苦闘に、毎日切れ目なく、含まれるに違いない、陽気に持続され、一度も知れ渡ったり留意されたことのない偉大な忍耐のことを思えば思う程、わたしの苦しみは軽減され楽になって行くように思えたの。そうしてこの瞬間もわたし達の心を御存知で、わたしの心には苦しみ悲しみは一滴もないこと——純粹な幸福以外には何もないこと——などを御存知の神様のお蔭で、わたしはアルフレッドの奥さんには絶対にならないと決心することができたの。わたしの決心が幸福な結末を引き出すことができるなら、彼がわたしの兄になり、あなたの夫になってほしいが、わたしは（グレイス、わたしはあの時彼を心から、心から愛していたのよ！）決して彼の妻にはならないと決心することができたの！」

「おお、メアリアン！ おお、メアリアン！」

「わたしは彼に冷淡に振る舞おうとしたものよ」彼女は姉の顔を自身の顔へと引き寄せた。「だけどそれは難しかったわ、その上あなたがいつも心の底から彼を擁護していたし。あなたにわたしの決心を告げようとしたけど、あなたは少しもわたしの言うことを聞こうとも、理解しようとしなかったわ。彼の帰国が段々と迫って来て、わたし達の間の日々の接触が復活する前に、行動を起こさなければいけないと感じたの。あの当時わたしが一つの大きな苦痛を経

「よしさえすれば、わたし達全員にとって尾を引く苦痛を救えるだろうということは分かっていたの。わたしが姿を消しさえすれば、実際に起こり、わたし達二人を幸福にしてくれた結末がきつと起こるに違いないことも分かっていたの、グレイス！ 彼女の元へ身を隠すために、マールサ叔母さまへあてて手紙を書いたの、全部ではなくて、ある程度事情を打ち明けた手紙をね、すると叔母さまは快く引き受けて下さったわ。わたしがこの方法と、わたし自身及び、あなたと家への愛情との相剋で苦しんでいた時、事故を起こしてこの家へ運びこまれたウォーデンさんが、しばらくの間、わたし達の仲間になって下さったのよ」

「近年時折、そんなことではあるまいかと恐れていたわ」と姉が叫んだ、彼女の顔はものすごく青ざめていた。「あなたは少しも愛していないのに——わたしのために犠牲となってあの人と結婚したのね！」

「彼はあの時」とメアリアンが、姉を更に強く抱き寄せて、言った、「長期間こっそりと姿を消す直前だったのよ。ここを出てから便りを寄こして、状況と先の見込みの本当の姿について説明した上で、わたしへの結婚の申し込みを書いてきたの。アルフレッドの帰国が迫って来る中でわたしが幸せではないことは分かっていたとも書いてあったわ。アルフレッドとの結婚の約束はわたしが心から望んだものではないと彼が考えたのだと思うわ。わたしが一度はアルフレッドを愛したかも知れないが、約束を交わした時は愛してはいなかったと考えたのではある

まいかとも。わたしが冷淡に振る舞おうとしたのは、氣持の冷たさを隠そうとしたためだと考えたのではあるまいかとも思うけれど——真相は分からないわ。だけどアルフレッドにとってわたしはすっかり失われた——望みがなくなった——わたしが死に絶えたとなあなたに感じてほしいと願つてはいたの。わたしの言つたこと分かつて下さるわね、お姉さま？」

姉は話に聞き入りながら、彼女の顔を見つめていた。疑っているように見えた。

「彼とわたしが姿を消した日の前夜、ウォーデンさんと会つて、あの方の信義を重んじる心を信頼して、わたしの秘密を打ち明けたの。あの方は秘密を守つて下さったわ。これで分かつて下さるわね？」

グレイスは混乱して彼女を見つめていた。ほとんど彼女の話を聞いていないように見えた。

「ねえ、お姉さま！」とメアリアンが言つた、「考えこむのをちょっとやめて、わたしの話を聞いて下さいな。そんな変な目でわたしを見ないで下さいな。無分別な激情を放棄するか、或いは心に秘めた氣持と苦闘してそれを克服して、希望のない孤独の中へ隠遁し、自分自身と現世における愛と希望を永遠に捨て去つてこの世界に背を向ける国もありますわ。女性達はそれをする、あなたとわたしにとって本当に愛しい名前を使って、お互いをシスターと呼んでいますわ。だけど、グレイス、外の広い世界には、自由な大空の下には、大勢の人がいて、忙しい生活が営まれていて、助けたり励ましたり親切を尽くそうとされたりしているところには、

——同じ教訓を学ぶ姉妹達シスターズがいるかも知れないでしょう。その上、ずっと新鮮で若々しい心と、全ての幸福と幸福の手段に開かれた心を持ち続けて、戦いは大昔のことであり、その勝利だつて同じことだと言える姉妹達もいるかも知れないわ。そしてわたしはそうした姉妹達の一人なの！ 今度こそ分かつて下さった？」

依然として彼女は妹を凝視したまま、何の返答もしなかった。

「おお、グレイス、ねえ、グレイス」とメアリアンは、長い間離れることを余儀なくされた姉の胸に更に情愛をこめてひしとすがりつきながら、言った、「もしもあなたが幸福な妻と母親でなかったら——もしもわたしと同じ名前の可愛い姪がここにいなかったら——もしもわたしの親切な兄であるアルフレッドがあなたのやさしい夫でなかったら——一体何処から今感じている歡喜の氣持が得られたと思う！ だけどわたしは出て行つたのと全く同じやり方で帰ってきたわ。わたしのは他の愛は全く知らないままだし、わたしは他の人に手を与えたこともなくてよ。わたしは今もおあなたの乙女のままの妹で、結婚も婚約もしてません。昔のままのあなたへの愛で一杯のメアリアンで、わたしの中にはあなただけが存在していて他には誰もいないのよ、グレイス！」

彼女は今妹の言葉が理解できたのであった。顔がゆるんで、ほっとした彼女からすすり泣きが漏れてきた。妹の首に抱きつきながら、彼女は泣きに泣いて、再び幼な子に帰ったかのごと

く彼女を愛撫したのである。

もつと落ち着いてきた時、二人は博士と妹のマーサ叔母さんが、アルフレッドと共に、すぐ傍に立っているのに気が付いた。

「本日はわたしにとつてはうんざりする日だわ」と、涙と共に微笑み、二人の姪を抱き寄せながら、マーサ叔母さんが言った、「あなた達を幸せにするために大切な仲間を失うことになるのだから。それにわたしのメアリアンのお返しとして、あなた達は何をくれるって言うの？」

「改心した兄」と博士が言った。

「それだとまあ悪くはないわねえ、確かに」とマーサ叔母さんが答えた、「こんな茶番劇の――」

「後生だから、やめておくれ」と博士が罪を悔いながら言った。

「分かったわ」とマーサ叔母さんが言った。「だけど不公平な扱いを受けてると思うの。六年間も一緒に仲良く暮らしたメアリアンがいなくなると、一体自分がどうなっていくのか見当もつかないわ」

「ぜひともここに来て住んでほしい」と博士が答えた。「私達はもう喧嘩はしないのだから、マーサ」

「それとも絶対に結婚をなさるかですよ、叔母さん」

「本当に」と老婦人が答えた、「国を出ている間にあらゆる点で格段に良くなって帰ってきたと聞いているマイケル・ウォーデンの氣を引くことができれば、それも悪くはないわねえ。だけれどわたしは彼を子供の時から知っているし、おまけに決して若くはないのだから、多分彼からの反応は期待できないわねえ。それでメアリアンが結婚したあかつきには、彼女と一緒に住もうと思ってるの。それまでは（と）いつでもそんなに先のことではないと思うけど）一人で暮らそうと決めたということ。あなたには何か言い分があるんでしょう、お兄さん？」

「全くもって滑稽な世界であり、真面目なものは何一つないと言いたい氣は大いにある」と哀れな老博士が言った。

「それを言うためには二十回分の宣誓を必要とするみたい、アントニー」と妹が言った、「だけれどあなたがそんなことを言っても誰も信じないと思うわ」

「この世界には思いやりが満ちあふれている」と言って、博士は下の娘を抱きしめ、その上体を乗り出して彼女とグレイスを抱きしめた——彼は二人の娘を引き離すことはできなかったのだ。「そして愚かさと共に、真剣さも満ちあふれている——地球全体を十分水浸しにできた私自身のと共にさえ。太陽は決して昇らないが、この世界は戦場の悲惨さと邪悪さを多少でも相殺する沢山の血を流さない戦いを見つめてもいるのだ。その上我々がいかに人を中傷するこ

とが多いか心せねばならぬ世界でもある、神のお許しがあらんことを、何故ならこの世界は聖なる神秘で満ちているし、世界の創造主たる神のみが人間の外面の奥に秘められているものを御存知なのだから！」

長い間離ればなれになってやっと再会したこの家族の大きい喜びを解剖し切開して皆さんのお目に掛けたところで、私の拙い描^{つた}写がそれだけ皆さんの氣に入られるとはとても思えない。それ故、メアリアンが行方不明となつた時に体験した悲哀をめぐる彼の誇りを傷つけられた想い出を追つて可哀想な博士に語らせるつもりはない。深く錨を下ろした愛が全ての人々の運命である世界がどんなに真剣なものであるかを彼が発見したことも説明するつもりもない。そして更に人生という巨大な馬鹿げたものにおける愛という一つの小さな構成単位の欠落という些細なことが、彼をどれ程徹底的に打ちのめしたかということも説明するつもりはない。また苦悩にあえいでいる兄に同情した彼の妹が、ずっと前に、少しずつ真相を彼に打ち明け、自ら身を引いた娘の心を彼に伝えて、どれ程その味方としたかということも説明するつもりはない。更にアルフレッド・ヒースフィールドもまた真相を博士とほぼ同じ頃に打ち明けられ、メアリアンが兄として、彼と会い、彼女の誕生日の夕方、ついにグレイスに彼女の口から打ち明けると約束したことなども説明するつもりはない。

「失礼ですが、博士」とスニチ氏が、果樹園をのぞきこんで、言った、「中へ入ってもよろしいですか？」

許しを待つことなく、彼は心の底から喜びにあふれて、まっすぐにメアリアンめざして進んでその手に接吻した。

「クラッグズ君が生きていたなら、メアリアンさん」とスニチ氏が言った、「本日のこの場面にとっても興味を持ったことだろうと思います。そうすれば我々の人生が多分そんなに手軽に扱われていないことに目が向いただろうと思いますよ、アルフレッドさん。概して、人生は我々が与え得るどんなさやかな潤滑油をも必要としていることにも目が向いただろうと思います。しかしクラッグズ君は説得に耐えることのできる人でした。彼は常に説得を受け入れることができました。もし今、彼が説得を受け入れていたなら、私は——つい悪い癖をお見せしまして。さあ、おまえ——呼び掛けに応じてスニチ夫人がドアの背後から現れた、「なつかしい方々がお揃いだよ」

祝福の言葉を述べると、スニチ夫人は夫を脇へ引つ張った。

「ちょっと、あなた」と彼女が言った。「亡くなった方の遺骨を暴くのはわたしの性分に反するけど」

「そうだな」と夫が答えた。

「クラックズさんは——」

「その通りだ、おまえ、彼は亡くなったんだ」とスニチィが言った。

「だけどわたしはあなたが憶えているかどうか尋ねてるのよ」と妻が言い張った、「舞踏会のあの夜のことを？ わたしはそのことをあなたに尋ねてるのよ。もしもあなたが憶えているなら、もしもあなたの記憶力が完全にがたが来ているということがないなら、もしもあなたがすっかり鞏確しているということがないなら、わたしはあなたに本日のこの時とあの夜を結びつけてほしいとお願ひしてるのよ——わたしがどんなにひざまずいてあなたに懇願したかを想い出してほしいと——」

「ひざまずいてだって、おまえ？」とスニチィ氏が言った。

「そうよ」とスニチィ夫人が、自信に満ちて、言った、「そしてあなたも知ってるはずよ——あの男に氣を付けるようにと言ったと——彼の目をよく見るようにと言ったと——わたしが正しかったと、その上あの時彼が打ち明けることを好まなかった秘密を知っていたと今わたしに言ってほしいと、あなたにお願いしてるのよ」

「ねえ、おまえ」と夫が妻の耳元で言った、「おまえはわたしの目に何かを認めたことがこれまであったかね？」

「いいえ」とスニチィ夫人が、鋭く言った。「うぬぼれないで頂だい」

「というのは、おまえ、あの夜」彼は、彼女の袖を引っ張りながら、話を続けた、「我々二人とも打ち明けるのを好まなかった秘密を知っていたし、二人とも職務上全く同じことを知っていたということがたまたまあるからだ。それでこうした問題については言わないようにした方がそれだけ良いと思うよ、おまえ。これを次の時はもっと賢明で慈悲深い見方をするようにという警告として受け取ることだ。メアリアンさん、あなたのお友達をお連れしています。さあ！ 女将さん！」

悲しみに沈んだクレメンシィが、両眼をエプロンで拭いながら、夫に付き添われて、ゆっくりと入ってきた。後者の方はもしも妻が悲嘆に身を任せてしまったならにくずくおろし亭はひっくり返ってしまうという予感に打ちひしがれていた。

「さて、女将さん」と弁護士が、メアリアンが駆け寄ろうとするのをさえぎり、両者の間に割りこんで、言った、「あなた、一体どうしたんですか？」

「一体どうしたって！」と悲しみに沈んだクレメンシィが叫んだ。——その時、驚きと、腹立ち紛れの抗議と、ブリテン氏が発した大きな叫び声というおまけの激情に襲われて顔を起こして、そしてくつきりと憶えていたあの美しい顔を真ん前に認めた時、彼女は凝視し、すすり泣き、笑い、声をあげて泣き、叫び、メアリアンを抱擁し、固く抱きしめ、解放して、スニチィ氏に襲いかかって彼を抱きしめ（スニチィ夫人が大いに怒り狂ったことには）、博士に襲いか



かつて彼を抱きしめ、ブリテン氏に襲いかかつて彼を抱きしめ、そして彼女自身を抱きしめ、エブロンを頭に投げかけて、その蔭で過度の興奮状態に陥ることで仕上げをしたのであった。

一人の見知らぬ人物がスニチィ氏に続いて果樹園に入ってきて、集団の誰にも気付かれないまま、離れて、門の近くに立っていた。というのも誰にも他へ向ける注意力はほとんどなくて、クレメンシィの狂喜振りに注意を奪われていたからである。彼は気付かれるのを望んでいたようには見えなくて、視線を落として、一人離れて立っていた。(立派な外見をもった紳士ではあったけれども) 彼には沈んだ態度が見受けられ、それは皆の幸せそうな様子でより一展顯著なものとなっていた。

しかしながら、慧眼の持主であるマーサ叔母さんだけは彼を認めた。ほとんど気付くと同時に、彼女は彼と言葉を交わし出した。やがて、グレイスと同じ名前の幼い姪と共にメアリアンが立っていた所へ行つて、彼女はメアリアンに耳に何かをささやくと、メアリアンは仰天し、驚愕しているように見えた。しかしすぐに混乱状態から回復して、彼女は叔母と一緒に、その見知らぬ人物におずおずと近付いて行き、彼とやはり会話を交わし始めた。

「ブリテンさん」と弁護士が、会話が進められている間、ポケットに手を入れて、法律関係とおぼしい書類を取り出して、言った、「おめでとう。貴方は今や目下のところ酒類販売免許の店、もしくは人をもてなす家として、貴方自身が居住し保有していて、にくずくおろし亭と

いう看板によって普通呼ばれるか或いは知られている、あの自由保有の建物全部の唯一人の所有者です。貴方の奥さんは、私の顧客のマイケル・ウォーデン氏のせいで、屋敷の勤め口を失い、今新しい家を手に入れました。私は、近日中に、州選出下院議員選挙の投票を貴方につつしんで御依頼申し上げたいと存じます」(一四三〇年に制定された法律により、下院の州選出議員は、年四〇シリング以上の価値がある自由保有財産の所有者しか選出できなかった。)

「もし看板を変更したら投票権に何か問題が生じますか？」とブリテンが尋ねた。

「いいやちつとも」と弁護士が答えた。

「それでは」とブリテン氏が、譲渡証書を弁護士に返して、言った、『そして指ぬき』と言葉をちょいと足させてもらいます。その上で例の二つの格言を額に入れて家内の肖像画の代わりに居間に掲げようと思つてます」

「そして私にも」と皆の背後から声がした。それは見知らぬ人物の——マイケル・ウォーデンの声であつた。「私にもそれらの刻みこまれた言葉の有益さを主張させてほしい。ヒースフィールドさんとジェドラー博士、お二人には本当に不当な仕打ちをしたかも知れません。それはしてないとしても、別に私がすぐれているからではありません。この六年間で昔の自分より賢くなったとか良くなったと言うつもりはありません。ですが私は、少くとも、自責という言葉は知りました。あなたがたにやさしく扱ってほしいと望む理由は何もありません。私はこの屋敷の寛大さを悪用してしまいました。自分自身の至らなさから、一度も忘れたことのない恥

ずかしさと共に、だが、これは全くの願望だが、幾分かの有益さと共に、ある人によって、私は教えられました」彼はメアリアンに一瞬目をやった、「その人のすぐれているところと自分のひどく無価値なところを知った時、私は彼女に心からへり下って許しを願いました。数日後に私はここから永遠に離れます。あなたがたが私の罪を許して下さればと思います。人にしてほしいと思うとおりに人につくせ！ 忘れそして許せよ！」

時の翁おきな（時間を擬人化したもので、大鎌と砂時計をもつ前髪まへかみだけの頭のはげた長いひげの老人として表される。）は——彼から私はこの物語の後半の部分を得たし、そして彼とおよそ三十五年間親しく交際を結ぶという光榮に浴してきたのであるが——ゆったりと大鎌に寄り掛かりながら、マイケル・ウォーデンが二度と出て行かなかったこと、彼の邸宅を売り払うどころか、改めて住み直して、歓待という中庸の徳を発揮したこと、この地方の誇りであり名譽でもあった妻を娶めとったこと、その名前がメアリアンであったこと、などを私に教えてくれた。だが、時の翁が時折事実を混同することがあるのを目撃してきたので、私としては彼の權威にどれ程の重みを付与すべきよく分からないのである。

解 説

チャールズ・ディケンズ（一八二一—一八七〇）のクリスマス物といえ、『クリスマス・キャロル』だけが有名で、他の作品が読まれたり顧みられたりすることは殆ど無い、といつてよい。『クリスマス・キャロル』が世界で最初の本格的なクリスマス作品として、一八四三年十二月十九日に書下ろし出版されて以来、今日に至るまでディケンズのクリスマス物という範疇を遙かに超えた人類の古典として、世界中の人々に愛好されてきたことは、今更説明するまでもない周知の事実である。これはこれで慶賀すべきことではあるけれど、その分他のクリスマス物の存在感が薄れて、殆ど目を向けられることの無いのが少しく残念である。他のクリスマス物もいかにもディケンズらしい愛すべき個性を備えた作品が揃っているだけに、なおさらその感が深い。

『クリスマス・キャロル』を皮切りに、以後『鐘の音』（一八四四）、『炉端のおろぎ』（一八四五）と発表を続けたディケンズが、一八四六年十二月十九日に書下ろし出版したのが、『人生の戦い』なのである。（この後一八四八年に『憑かれた男』が書下ろし出版され、以上の五篇は今日、『クリスマスの本』として一巻本にまとめられている。一八五〇年以降も他界する三年前まで毎年彼自身が編集経営を行っていた定期刊行物にディケンズはクリスマスにちなんだ作品を発表し続け、総計二十一篇に達するこれらの作品群は今日、『クリスマス物語集』として一巻本にまとめられている。）

『人生の戦い』は大作『ドンビー父子』（一八四六年十月から一八四八年四月まで月刊分冊として刊行、同年四月十二日一巻本として出版）の執筆と並行して、一八四六年九月九日から十月十七日にかけて、そ

の執筆が進められた。当時ディケンズは家族、数人の召使を引き連れて、六月十一日よりスイスのローザンヌに滞在していて、そこで構想を練り、執筆に取り掛かったのであった。だが二作の執筆を同時に発進させるという初めての体験は、ディケンズをひどく苦しめたようで、一度は親友で相談相手でもあったジョン・フォースターに宛てた手紙（九月三十日付）の中で、クリスマス物の執筆を一年間延期したい、と告白している程、『人生の戦い』は完成に至るまで難渋を極めたのであった。これにはもう一点次のような事情も関係していた。つまり、ディケンズという作家は資質的に大作、長篇を得意とするタイプの作家で、短篇の限られたスペースにテーマと各々の登場人物の活躍の場とを過不足なく織り込んで味付けすることは、どちらがといえれば苦手とする傾向が強かった、という事情があるのである。そういうディケンズの難産の末作品を何とか産み出すことにこぎつけた労苦の影は、疑いもなく『人生の戦い』に投影されており、以下それについて、内容や主題と関係付けながら説明してみたいと思う。

『人生の戦い』は終日繰り広げられて死者の山を築いた激しい戦いの描写で幕が開く。それから何百年か経過したある秋の朝、古戦場のとある果樹園で、軽やかに楽しげに舞う二人の姉妹が続いて登場してくる。名前をグレイスとメアリアンという。本篇のヒロインである。これらの冒頭を飾るアレゴリカルな場面が続いて、人生とは空しい茶番劇だと称する哲学を奉ずる父親のジェドラー博士、早く両親を亡くして博士の屋敷に引き取られて成人し、かつメアリアンの婚約者でもあるアルフレッド・ヒースフィールドが相次いで登場してくる。そして医師としての研修のために異国へ旅立つアルフレッドを全員が見送るところで、第一部は幕となる。

第二部では、前半でマイケル・ウォーデンなる破産の危機に瀕した道楽者が登場してくる。事態が好転するまでこの人物が姿を隠すために密かに出国する行動と、姉グレイスとアルフレッドを結び付けるため

に、自ら身を引いて失踪するメアリアンの行動という別個の行動を、ディケンズは表面上は二人の合意の上での出奔という形に仕立てた。それもアルフレッドの帰国の当夜に照準を合わせて。このようにプロットが錯綜してくると、誤読をする者が出て来ても当然おかしくはない訳で、それを事もあろうに、ディケンズが挿画を依頼した四人の画家の一人ジョン・リーチが犯してしまったのである。この場面を描いた挿画（本書一〇三頁の挿画を参照）の中で、リーチはウォーデンとメアリアンが手に手をとって駆け落ちする姿を描いてしまった。ディケンズから全権を任されていたフォースターを素通りして、画家から直接印刷所に持ち込まれ、製本の段階で初めて発見されたのであった。時間的に絵の差し替えが困難であった上に、リーチはディケンズが信頼を寄せていた友人で絵の訂正、抹殺が彼に測り知れない程の衝撃を与えることを考慮して、ディケンズはフォースターとの二人だけの秘密にとどめて、この間違った挿画をそのままにしておいた。それで現在もこのリーチの挿画は大手を振ってまかり通っているのである。このエピソードが、前述した構想と執筆が難渋を極めて、ディケンズが本篇をまとめあげるのに苦心惨憺したことから惹起された事柄であることは、言うまでもあるまい。

第三部は、今や結ばれて娘までもうけているグレイスとアルフレッドの前にメアリアンが再び姿を現して、真相を告げると共に、改めてマイケル・ウォーデンと結ばれ、娘の生き方に心を打たれたジェドラー博士が例の哲学を捨て去る、という大団円で幕となるのである。

ところで、これまでの説明と、そして「一つの愛の物語」という作品の副題とから容易に推察されるごとく、『人生の戦い』のテーマは愛についてである。自分は身を引いて自己の愛を犠牲にすることで、姉は妹を、妹は姉を、共に揃って愛する男と結ばせようとする気高く献身的な愛をテーマとしてこの作品は展開している。こうしたグレイスとメアリアンの自己を犠牲にして相手に道を譲る崇高な姿が、イエス・

キリストの人類を救済するために進んで自己を犠牲にした愛の姿に通じるものであることは、指摘する必要もあるまい。と同時に、キリスト生誕の日と伝えられる程、キリストと一体化したイメージに包まれているクリスマスにも通じるものであることも、もはや指摘するまでもない。後は、いかにもディケンズの産物としか言いような個性豊かな脇役達が、作品に彩りを添えて雰囲気在大いに盛り上げていることも、見落してはならない事実である。なかでもクレメンシー・ニューカムは秀逸と称すべきすぐれた創造で、彼女をめぐるユニークで卓抜した描写を、是非とも味わって頂きたいと思う。

本書は Charles Dickens の *The Battle of Life—A Love Story*——の初訳である。翻訳に当たっては *The New Oxford Illustrated Dickens* 版を底本として使用し、一部分 Penguin 版を参照した。

訳業を進めるに際して、久田晴則・中村愛人両氏の手になる本篇の注釈（あぼろん社刊）より、有益な示唆を受けること多く、ここに記して感謝の意を表する次第である。

なお、私事になるが、このささやかな訳書を恩師である故田辺昌美先生に捧げることをお許し頂きたい。すぐれたディケンズ研究家であられた先生が逝かれて、はや十年が過ぎようとしているが、学生時代から急逝されるまでの短からぬ年月、ディケンズの人と文学全体に渡って、時には厳しく、時には親身になって、色々と御指導下さった先生に対して、ここで感謝申し上げると共に、その御冥福を心よりお祈りするものである。

翻訳に当たっては全力を尽くしたつもりであるが、或いは不備な箇所が残っているかも知れない。大方の忌憚のない御教示をお願いしてやまない。

最後に、今回の出版をお引き受け頂いた成美堂と、色々と御配慮頂いた同社の谷口隆氏に心からお礼申

し上げる次第である。

一九九〇年三月

篠田昭夫

篠田 昭 夫 (しのだ あきお)

1942年広島市に生まれる。広島大学文学部
英文科卒業，同大学院修士課程修了。

現在安田女子大学教授。

訳書として，ディケンズ『憑かれた男』（あぼ
ろん社），同『無商旅人』（篠崎書林）（以上共訳）
がある。

現住所 〒733 広島市西区大宮 1-2-20-304



チャールズ・ディケンズ

人生の戦い、——一つの愛の物語——

1990年4月10日 初版印刷

1990年4月20日 初版発行

訳 者 篠 田 昭 夫

発 行 者 佐 野 義 光

発 行 所

株式 成 美 堂
会 社

〒101 東京都千代田区神田小川町 3-22

電話 03 (291) 2261番

振 替 東 京 4-35856

ISBN 4-7919-6618-X 定価2,060円（本体2,000円）

（落丁・乱丁本はお取替致します）

（精興社印刷・秀美堂製本）